
FANTASY ESCAPER ~幻想の脱出者~

真野 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FANTASY ESCAPER～幻想の脱出者～

【Zコード】

N2185S

【作者名】

真野 優

【あらすじ】

そう遠くない未来。

一つのコンピューターが発明された。

史上最高の性能を誇るそれは、とある技術を開発に使用された。

「VR-S」。これを用いた科学者とゲームプログラマーたちは、全

感覚投入型MMORPG、『ユグドラシア・オンライン』を産み出した。

発売当初から絶大な人気を獲得したこのゲームに突如異常が発生

した。

それは、「約三十万人のプレイヤーが仮想現実から戻れなくなる」というもの。

異変に気付いた現実世界の技術者たちも、閉じ込められた三十万の命を救いだすため、立ち上がるが・・・。

現実と幻想、二つの物語が今交差する

。

* 今現在、更新速度が低迷中です。不定期更新になりますがお許しください*

Prologue ノグドリシア・オンライン（前書き）

初めての方もそうでない方も。

なるべく一週間に一回は更新したいと思いますので、しばらくの間、お付き合いお願いします。

用語に関しての解説、訂正、質問等は要望があり次第追加していきます。

もちろん、それ以外でもポイント評価、感想問わず何時でもお待ちしております。

それでは、FANTASY ESCAPER～幻想の脱出者～

開幕です！

Prologue ノグドラシア・オンライン

『オンラインゲーム』

この単語を聞いて、普通はどういうものを思い浮かべるだろうか。そう、普通はPCや家庭用ゲーム機で、ボタンを操作して遊ぶ、あのゲームに他ならない。

その常識が覆されたのが、20??年秋のこと。

世界で最も優秀とされたスーパーコンピューター、『ブレインマネージ電腦の処理者』^ヤが作り上げた、全感覚投入型システム、『VRS』を取り入れ、ゲームとしたものが開発された。

『ログドラシア・オンライン』と銘打たれたマッシュブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイинг・ゲーム、略してMMORPGは、脳に小型化した電極を取り付け、専用の機械に接続し、電気信号をメインサーバーに送つて遊ぶ仕組みになつている。

仮想世界の中での時間の進行速度は、現実世界のおよそ六倍。

つまり、ゲームの中で一日過ごした後にログアウトしても、現実に戻つてみれば四時間しか経過していないことになる。

それを利用して、ゲームに没頭して現実世界で寝たきりになるような中毒者が出ないよう、現実時間の単位で八時間・・・つまり、ゲームの世界で一日間たつた時点で、強制的にログアウトするような仕掛けが施してある。

強制終了の三十分前に警告が出され、セーブとログアウトを勧め

られるため、間違えて、とかついうつかり、といふようなことは無い。

それでも強行すれば、最後にセーブした以降のデータが消去されることになる。

運営もそういう方法で、出来るだけ負担を少なくしているとはいっても、人間の動きなどという膨大な容量のデータを逐次処理できるのも、ひとえに『電腦の処理者』のおかげである。

人間では何千万人が束にかかるても敵わないような演算領域と処理速度、この二つを持つて世界最高のスパコンの地位を保っている。

以上、閑話休題。

そして、次にノンプレイヤーキャラクター、つまりNPCをどうするか。

従来のオンラインゲームでは、クエストを出してくれたり、情報をくれたりする、プレイヤー以外のキャラクターは、固定されたメッセージを表示するだけだったが、VRMMORPGとなるとそうもいかない。

そのためか、高レベルのAI、人工知能を使用するという案は、比較的早期から出されていた。

『電腦の処理者』があれば、人工知能ぐらい造れるだろう、とうのもあつたかもしない。

こうして生み出されたのが、『AI・ミコト』である。

最高スペックを持つスパコンとAI、二つの最新科学技術の開発者の息子が、幼いうちに亡くなってしまい、その子の名前を付けたAIだという噂が流れているが、真偽のほどは本人やそれに近しい人々しか分からぬ。

もちろん、各プレイヤーがそんな裏事情まで正確に把握している

わけではない。

決められた手順に従つて仮想世界に自身の意識を移したプレイヤーは、普通のオンラインゲームと同じく、自分のキャラクターの姿を決め、名前をつけたり種族を決めたりしてゲームを始める。

そして、自分が本当にそのキャラクターになつたかのように操作して、敵モンスターを狩つたり、プレイヤー同士で戦つてみたり、好きなようにアイテムを生産したりして楽しむ・・・はずだった。

実際にプレイヤーを募つて行つた テストでも何の問題も発見されず、「絶対安心」「初心者歓迎」「自由に遊べる」が売りのはずの、『ユグドラシア・オンライン』

しかし、待ちに待つた四月八日、全国一斉発売の日、午後八時ジヤスト。

「Good life and have a nice dre
am」

突然、視界いっぱいに紅いテロップが映し出された。
その瞬間、ログインしていた全てのプレイヤーの意識が闇に刈り取られた。

第一章 Act 1 運命の始動

—〇? ? 年四月七日 PM 23:59

都心の某ゲームショップには、大行列ができていた。
おそらくこの現象は、日本各地で起きているに違いない。

理由はもちろん、今日発売される「ゴグドラシア・オンライン」
を購入するため。

テストのテスターにも選ばれず、予約にも落ちた僕、仙崎竜哉
は、じうじょりやく寒さがマシになつてきたとはいえ、初春の真
夜中にこんなところに並んでいる。

でも、全く寒さは感じない。

理由はもうるん。

「つおおおっしゃ——つ後五十秒・・・四十秒・・・

「やつてやるぜええつ！」

「いよいよあたしの天下ねつ！」

「ふつ・・・VR Sか。どんなものかこの田で確かめてみよつじや
ないか」

などと、盛り上がる密の熱気で、熱いぐらいだから。

よく聞けば、最後の一人はあまり盛り上がってはないようだけ
ど。

「確かに楽しみなのは同じだけど、いい年した大人達まではしゃぎ
過ぎだろ」

辺りの歓声に書き消されるような音量で、ボソッとつぶやいた僕
の声を耳聴く聞き取つて、間髪入れずに反論してきた少年がいた。

小学校のころからの幼馴染で、ずっと同じ学校に通つている、新
宮翔。

見るからにゲームよりスポーツ！といった感じで洗剤としているが、意外なことにそこそこのゲーム好き。

「当たり前だろ、最新技術だぜ？ほら、初めて月に人間が着陸した時も同じような感じだったらしいじゃん」

「また古いネタを・・・でもま、確かにそうかもね。最新技術って単語に良く反応するのは、子どもじゃなくて大人だからね。お、そろそろだよ」

さながらハ精神な事等が勃發した

俺が弁だ！」

תְּמִימָנָה וְעַדְלָנוּ בְּבֵית הָרֶבֶשׂ

卷之三

獨い人口付近は人がひしめき合ひ ものすごいことはなつてゐる

新編 五國文庫

せに、身長百五十センチという小柄な体を最大限に活かして、列の奥へ奥へと進んでいるから、人のことは言えた義理じゃないけど。だつて、「買えなかつた奴のために余分に買っておいて、オーケーションで高値で売り付ける！」とか「今日来られない知り合いのために！」とかで一人何個も買う人もいるから、実は足りなくなる可能性があるんだ。

「ちよ、落ち着いて、落ち着いて一列にお並びください！」

しかし、いつなることを予想してか、あらかじめ配置されていた複数の店員が、慌てて列を整理しようとするも、焼け石に水で全く効果がなかつた。

「行くぞ、竜哉！」

「おまえもなごよ」

かくいう僕たちも、あらかじめ「三人」分のゲームディスクが買える金額を持ってきておいて、先にたどり着いた方が「三つ」買つておくという戦法で、棚へと駆けた。

なぜ一人じゃなくて三人分なのかというと、僕らには共通の幼馴染がいて、そいつも絶対やりたいだろうから、あらかじめ買っておいてやり、原価の一割増しで売りつけよう、という話だ。

多分、今を逃したら、当分このあたりでは買えなくなりそうだらね。

もしだすでに彼女が持っていたりしたら、その時はネットオークションで高額で売りに出す。。

「竜哉！ 取つたぞ！」

およそ一分後、真剣におしゃくら饅頭を演じていた人々をかき分け、翔は綺麗なパッケージのゲームディスクの箱を、「三つ」掴みとった。

「会計よろしく！ 後で払うから！」

「任せとけ！」

威勢のいい返事を残し、翔の姿は再び人込みに隠れて見えなくなつた。

用事が無くなつてしまつた僕は、迷惑そうな視線を受け、慌てて後退する。

やきもきしながら待つこと数分。

ボロボロになつた翔が、戦利品みつつのゲームディスクを掲げつつ店の出口から姿を現した。

「つて、ゲームを買うだけでどうやつたらそんなボロボロになれるんだ！」

普通に納得しかけた自分を心の中で一発殴り、慌ててツッコミを入れた。

「いやー。肘打ちを食らつたり足で蹴られたりと大変だつたぜー」言つてる内容と、その喜色満面の顔が、恐ろしいまでに不釣り合いで、思わず僕は噴き出した。

「「ほひ」ほひ・・・とにかく無事に？買ったんだからいつたん家に帰ろ。こんな時間からプレイするわけには・・・いくか。予め買つてある専用のヘッドギアは、枕とかで隠したら、寝てるのか遊んでるのか分からないな」

「おお！その手があつたか！いやー、明日学校が終わるまでプレイできないと諦めてたんだけどな。さすがは『悪代官』」

僕は、迷わずぎりしめた拳を、翔の鳩尾に叩きこんだ。

本来なら脳天をゴツンとやつてもいいところだが、生憎身長五十七センチの翔に脳天チョップは難しい。

「だからその渾名で呼ぶなって何回も言つてゐるだろ？それに僕は自分がそんなんだって認めた覚えもない」

「な、なら反応しなくていいじゃねーかよー」

「明らかに自分の方を見て言われたら誰だつてそう思つむ」

さつきの掌底が思いのほか効いたらしく、なかなか復活せずに腹を押さえている翔を尻目に、僕は自分の家めがけて歩きだした。

「ちょっと待て！代金を返してくれー！」

「・・・チッ。分かったからさつさと帰ろ。そして一刻も早く口グインする！僕は『リュウヤ』って名前にするから」

自分の財布から、野口英世さんを五枚抜き、翔の手に押し付けると、代わりに紙袋からゲームディスクを一つ掘んで、再度歩き始める。

「名前そのまんまだな」

ようやく復活した翔を横目で見ながら、僕は期待に胸を膨らませてやや遅めの帰路に就いた。

「ただいまー」

等と言つ訳もなく、こつそりと足音を忍ばせて自分の部屋へと辿り着き、慌ててドアを閉めて大きな音を立てるなどと言つべタな真

似はせず、最後まで無音で行動すると、ゆっくりと、丁寧に買つて
きたばかりのゲームのパッケージを開けた。

どうせ翔は開けることを優先して、綺麗に破ろうなんてことは間
違いなく考えていないだろうな、と頭の片隅で思いつつ、中から説
明書を取り出した。

「えーと、何々・・・あー、チュートリアルがあるのか。なら今読
まなくてもいいな。よし早速ログインしよう」と

そう決めた僕は、別に広いわけでもない、機能優先のシンプルな
部屋に置かれているベッドにダイブすると、枕元に置いてあるヘッ
ギアを装着し、左横についている挿入口に、ドーナツを薄くした
ような形のディスクを入れた。

VRGを使う時は、基本安全な自室などで寝転がるのがルール。
肉体は寝ているのと同じ状態だから、車の中でヘッドフォンと間
違えて装着したりするとかなり大変になるし、そこまで行か
なくても、立つたまま仮想世界へ入り込むだけで危険。僕はわざわ
ざ危険に身を晒す趣味ないので、ルールに従つて横になつた。
ウイーンと音がして、ヘッドギアが作動しているのが分かる。

さあて、どんな世界が待つてゐるのかな

そう思つたところで、僕の意識は一囁黒く塗りつぶされた。

「初めてまして。私の名前はクレア。あなたの名前は？」

ふと優しい白色の光で目を覚ました僕の目の前には、まあテンプ
レに、純白く輝く綺麗なお姉さんが、鏡を持って浮かんでいた。

多分、名前を答えるとそれがキャラクターネームとして登録され
るのでうづ

「えーと、『リュウヤ』で宜しくお願ひします

名前はあえて簡単なものにしておいた。

いちいち凝つたのを考えるのも面倒くさいし、大抵のハンドルネームはリュウヤで通している。

それに、既に翔にこの名前で教えてあるしね。

「『えーと、リュウヤ』さんですね」

「ちつがーう！えーと、要らない！」

「ふふふつ。冗談ですよ、リュウヤさん。ではあなたの外見を設定してください」

NPCにからかわれたことに若干驚きと悔しさを覚えたものの、てきぱきと予め決めておいた容姿に近いものを打ち込んでいく。

「うん、良い出来だ

McConnellかもしけないが、現実の自分と違いかなりの長身にやや茶色がかつた緋色の髪、オレンジの瞳で、他は残念ながら現実の自分と変えられなかつた。

強いて言うなら、バランス補正でやや目が大きくなつたぐらいか。眼鏡はアクセサリーとして装備されるので、一番髪と瞳の色にあう金色のものにしておいた。

普通なら絶対そんな色のはつけないが。

最後に鏡を見せてもらつたが、まあまあの出来だった。

「最後に、種族を教えてください」

これもよくあるパターン。

僕は基本前衛より魔法職の方が好みなため、魔法に適している『エルフ』にしておいた。

「ヒューマン」「ドワーフ」「バンパイア」「ジン」の四つと比べてもMPと魔法攻撃力が高い反面、物理攻撃とHPは低い。

決め終わると、クレアはノドとは思えないような微笑みを浮かべて言った。

「では、後は向こうで説明します。良い人生を」

「わかりました。行ってきます」

そんな挨拶を最後に、僕の体が淡く発光し、目の前がグーザリと歪んだ。

Act 2 チュートリアル

「……」

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。じやなく、失神後の短い読み込み中の時間を超えると、異世界であった、と言つた方が正しい。

マンションなど影すらも見当たらず、中世纪ローリッパ風の城が遠くにあつた。

今僕がいるところは、森の入口。

どうやらここでチュートリアルが始まるよつだ。

しばらくそこで跳んだり走ったりして、自分の身体の感覚を確かめてみたけど、現実世界と全く変わりがなかつた。
むしろ、体が軽くなつたような気がする。

そんなことをしていると、ふと目の前に光の球が出現した。
だんだんとその光の球は人の形になつてゆき、小説に出てくるような妖精が現れた。

掌に乗るような小さいサイズの妖精が、ゆっくりと口を開いた。

「初めてまして、こんにちわ。私はフェア。これからチュートリアルを始めます。初めに言っておきますが、ここで学んだ内容を忘れた場合のことを考え、チュートリアルの内容を一冊に纏めた本がありますので、慌てずに覚えてください」

こいつがチュートリアルをしてくれるのかー、とあまりにもフェアが小さすぎて、何か頼りなく思いながらも、僕はうんうんと頷いた。

「まずははじめに、アイテムウイングウの開き方から説明しますね

およそ十五分後、だいたいの基礎知識を叩き込まれた僕は、初めての狩りへと行くことになった。

『ユグドラシア・オンライン』だけあって、今僕たちがいる大陸は、ユグドラシアという名前だそうだ。

で、そのユグドラシアにはかつて、一人の創世神がいた。数百年前に、異次元の魔物を率いた邪神が現れ、ユグドラシアを蹂躪していた。

その邪神や魔物と戦い、創世神は深手を負つも、見事邪神を打ち滅ぼした。

が、魔物を討伐し終える前に、傷で命を落とした
や、その寸前で自らの傷を治癒するため、千年間の眠りに入った。
そして残つた魔物が繁殖し、人間と競い合いながら順調にその数を増やし、今に至つていると。

なんともありがちな展開だが、それはしじうがない。

RPG、特にMMOとなると、大抵のストーリーは使い古されているからね。

紆余曲折、今回僕が狩るモンスターは、レベル1の「チャイルドウルフ」。

こいつを五匹倒せば、チュートリアルは終わり、次の街へと進む

ことができる。そしてそれからは個人の自由だ。

ちなみに次の【城下町：アルザス】からは、他のプレイヤーと出会つことがあるため、行つたらまず翔に似た人を探さなければならない。

「お、いたいだ」

森の出口付近で、小さな獸の影が五つほど、動き回つてゐるのが見えた。

頭の中で「ウインドウ表示」等と思うと、田の前に「MAP」「キヤラクターデータ」「アイテムインベントリ」といった、これまたM M O R P Gではおなじみのウインドウが現れる。

もつともこれらすべてが一斉に表示されるわけではなく、「MAP」と思えばマップが、「現在のステータスを確認したい」と思うとキヤラクターデータが表示される。

今回の場合、「チャイルドウルフ」の上には、それぞれのHPバーとレベル、「チャイルドウルフ」という名前が表示されている。もちろん、見たくなれば見えないようにすることも可能だ。

僕はもらつたばかりの装備、「初心者の上着」「初心者のズボン」「初心者の靴」「初心者の短剣」をつけて、チャイルドウルフにこつそりと忍びよる。

そして、気付かないまま、彼らまで五メートルの距離に達した時、僕は勢いよく飛び出した。

手に持つた短剣を振り上げ、一気に切り下げる。

腹を切り裂かれて、紅いエフェクトを弹けさせたチャイルドウル

フの身体が小さく弧を描いて飛び、鈍い音を立てて落下する。

僕はその子狼から眼をそらし、僕に気付いて襲いかかってきた他の四匹に向き直る。

正面にいた子狼を蹴飛ばし、体を捻って首筋にかみつこうとしていた別の子狼の背中に思い切り振り下ろす。

そして横から鋭い爪でひつかこうとする子狼を、攻撃が当たる寸前で斬る。

その子狼の体がオレンジに光り、一瞬でライフが〇になる。ビルやらクリティカルヒットしたようだ。

が、ほぼ同時に背後から襲ってきた一匹をかわすのは不可能だった。

僕の満タンだったHPが、大きく削られ、残り七割となつた。

「ちつ」

右肩と脇腹に鋭い痛みが走るが、それを無視して、腕を素早く振るい噛みついだ一匹を払い落とす。

そしてそのまま片方を左手で地面に押さえつけ、手早く急所を攻撃する。

紅いエフェクトが迸り、その子狼はHPになつて霧散した。ゲームだから、ゴミを捨てようが、モンスターを倒そうが、全て粒子となつて土に還る。

もつとも、ゴミを捨てるのはマナーに反するため、インベントリに備え付けられている「ゴミ箱」に放り込むか、備え付けのゴミ箱に入れるのが礼儀、だそうだ。

チコートリアル時に「豆知識ですよ～」と言つて教えられたけど、道徳的に常識だと思う。

「おつと、こんな考え方をしている暇はなかつたな

グルルル、と低く唸る子狼が眼前に迫つてきて、我に返つた僕は、短剣を振り上げ、切つ先を子狼に突き刺した。

そのまま真横に引き裂くと、その子狼はもつ慣れたエフェクトと共に消失した。

残るは初めに弾き飛ばした一匹のみ！

「ううらで一つ、スキルでも使ってみようかな！」

僕は、にやりと不敵に笑つて呟いた。

スキルと言うのは、所謂技の分類のこと。

全種類の武器+ 分だけ存在しており、レベルアップ時に得られる三のスキルポイントと、武器を使うことで得られる熟練度を振り分けて、「アーツ」と呼ばれる個々の技を習得することになる。

たとえば、【片手半剣】というスキルに、五スキルポイントを振り、熟練度を五まで上げると、一重連斬 というアーツが使えるようになります。

だから、「あ、間違えたアーツだった」と小声で言いなおしたりしたが、それは一生誰かに話すこともないだろう。

このスキル制度が原因で、『ゴグドラシア・オンライン』には、明確な職業が存在しない。

【長剣】スキルを極めれば剣士、【魔法】スキルを究めれば魔法使いを自分で名乗ることはできても、あらかじめ決められているわけではないから、剣を持って魔法を使うことも可能ではある。

杖のスキルには、魔法攻撃力増加のものがたくさんあるので、魔法が使いたければ杖を持つのが薦められるけど。

+ としては、【索敵】や【収集】、【見切り】、【魔法】など

武器を使わなくてもいい物、「レアスキル」と呼ばれる、その名通り一定の条件を満たさなければ使えないものもある。

「レアスキル」の取得方法では、称号と呼ばれるシステム、が力ギとなっている。

土属性の魔法を最後まで究めれば【鍊金術師】という称号がもらえ、レアスキル【鍊金術】がGETできる、などといった風に。

そして、『ユグドラシア・オンライン』をプレイする全てのプレイヤーが、一番憧れているのが【パーソナルスキル（ＰＳ）】で、「全プレイヤーの中でただ一人しか使えない固有スキル」。

真っ先に特定の条件をクリアした人に与えられるそれには、とても強力なものが多い。

これに関しては、欲しいからと言つて攻略サイトなどを見ることもない。

つまり、「誰かがとり方を発見して攻略サイトに載せた」場合、それはもう取得されている可能性が高いため、見るだけ無駄な場合が多いからだ。

それに誰も、対人戦では重要な切り札となる自分の固有スキルなんて掲載しようとは思わないだろ？

今僕が使えるアーツは、一番最初に貰ったスキルポイントで得た【雷系魔法】の第一段階目、つまり熟練度0でも使える初級アーツ ライティング のみ。

これは威力もまあまあで、攻撃速度も速く、なおかつ貫通性能と麻痺を持っているという優れ物だ。

フェアに聞いたところによると、テストからプレイしていた人でも、使うことがあるのだとか。

そろそろ回復して立ち直った子狼一匹が、同時にこちらに向かって駆け出す。

脳裏に ライティング と思い浮かべただけで、手が勝手に動いて何もない空中に魔法陣を刻む。

(分かつてはいたけど、やっぱり魔法は発動に時間がかかる・・・！)

詠唱式と魔法陣式の二つの発動方法があり、魔法陣式の方が時間はかかるないが攻撃力、効果範囲（範囲魔法でなければ飛距離、有効射程）が三分の一になってしまい、詠唱式の方だと時間がかかるが性能に優れている。

子狼が僕の無防備な身体に到達すると、魔法陣が書きあがると、どちらが早いか！

「グアルルルルッ！」

「喰らえ！」

もう子狼の牙が柔らかい僕の喉元まであと一十センチぐらいに迫ってきたその刹那、魔法陣が完成した。

明るい黄色に輝いた魔法陣から放たれた雷撃が、一二匹の子狼をまとめて葬り去った。

「グア、ガル・・・・・・ル・・・・」

断末魔の呻きを漏らして、子狼は霧散してその姿を消した。

「ふう・・・。お、レベルが3に上がってるー」

スキルポイントは温存し、自分のステータスを強化するパーソナルポイントは、一レベル上昇につき三ポイントもらえるため、STRにDEX、VITやINT、AGI、LUKのうち、AGIに3とINTを振った。

さつきまで持っていた短剣を腰の鞘に戻し、僕は次の街、アルザスを目指して歩き出した。

現実時間

A
M
0
1
:
0
0

Act 2 チュートリアル（後書き）

「よくわかる解説」

クリティカルヒット・・・急所に命中させた物理攻撃や、暴走して威力が上がった魔法のことを指します。

ディレイタイム・・・一度使ったアーツがもう一度使えるようになるまでの時間です。

STR・・・筋力、物理攻撃力、アイテムの所有量に影響します。アイテムを持ちすぎると、実際に重い荷物を持つているのと同じで動きが遅くなってしまいます。

DEX・・・命中力、クリティカルヒット率に影響します。これを上げると生産系スキルの成功確率も上昇します。

VIT・・・防御力、被物理、魔法ダメージに影響します。これは防具で底上げも可能です。

INT・・・は、知性、魔法使用に影響します。魔法攻撃力、射程距離などが向上します。

AGI・・・は敏捷、呪文の詠唱時間や魔法陣を書く時間など、デイレイタイム、移動速度などに影響します。行動全般の速度、とい換えてもいいかもしれません。

Act 3 仲間との合流

城が見える方向へ、しばらく歩いて行くと、急に森の木々が途絶え、辺りに明るい日差しが差し込んだ。

その先に広がる光景は。

「うわあ！凄いリアル！」

空は現実世界と同じ青く澄んでいて、ヒノキビニに雲が浮かんでいる。

そして田の前には、川が流れていて魚も泳いでいる。

かかっている橋を渡つて少し歩けば、もう次の街、アルザスだ。

家も木でできたものからコンクリートを使った物までさまざま。家の木材にある木目や、大通りの石畳の模様まで、細部までリアルに作りこんであつて、とても綺麗だった。

森の中でも小鳥の囀りや木々のそよぐ音、一枚一枚模様の違う葉など、本当にゲームなのか、と疑うことはあつたけど、こつもリアルな世界を再現できる技術があつたとは。

そんなことを考えていると、脳裏にピロコンッという効果音が鳴り響いた。

ウインドウを開けてみると、どうやらメールが届いているようだ。NEW!というマークが描かれているが、受信ボックスにはまだ運営からのメールと、【送信者：クラウド】となつてている件のメールだけなため、一発でどれが新着のメールかは判別できる。

ウインドウを指でたたくと、ブゥンと音を立てて、メールが開いた。

【送信者：クラウド】

件名 …合流しようぜ

本文 …よお、お前は高校生の仙崎竜哉か？違つたら悪い。まあ竜哉なら俺が誰かぐらいわかるだろうから、マップで『シドの酒場』を探して、そこまで来てくれ。待ってるぞ】

「翔だな。妙なハンドルネームにしたな、あいつ。よりもよって『雲』とはね」

メールの送り主が誰か察した僕は、指示通りマップを開いてみる。「シドの酒場……シドの酒場つと。げ、かなり距離があるな」マップに表示されている僕の現在地は、南街道の入口付近。それに対しても、シドの酒場があるのは、東街道の中間地点ぐらいか。

【送信者：リュウヤ】

件名 …Re 合流しようぜ

本文 …了解。今南にいるから、そっちに向かう】

そう返信すると、僕はウインドウを開じて、やや速足氣味に歩き出した。

本当はゆっくり見て回りたかったがしちゃうがない。

歩いている途中、大柄なプレイヤーにぶつかってしまったが、これも普通のMMORPGとは違うところだな、とVRSの技術を改めて実感した。

そして歩き始めてから十分後。
『シドの酒場』と書かれた看板を発見し、その店の中に入る。

中世ヨーロッパ風の石造りの建物で、大きさは現実の店と変わらないぐらい。

木製のドアを開けると、チリンチリンと来客を知らせる鈴の音が鳴つた。

「いらっしゃいませ、お一人様ですか？」

「いえ、待ち合わせをしているんですが・・・」

NPCとは思えない自然な動きで現れた受付嬢に返事をしようとしていると、それをさえぎるかのように大きな声がした。

「よ、見つけたぜたつ・・・じゃなかつた、リュウヤ。こいつだこつち」

叫びながら手招きしている男の方に意識を向けると、
「クラウド：LV3」と表示された。

リュウヤと同じく長身で、短い金髪に碧眼。現実の顔を元にしているはずだけど、結構様になっていた。

「今行くよー！・・・すみません、連れが呼んでいるので失礼します」

翔、いやここではクラウドの方に向かつて叫び返すと、受付嬢の方に向き直つて、一言謝罪した。

いえいえ、どうぞどうぞ。と終始笑顔で応対していた受付嬢は、どう見ても感情のある、普通の人間にしか見えなかつた。

他の客の迷惑を顧みず、二人用のテーブルに座つて大声を上げていたクラウドの向かいの席に僕が座ると、クラウドが口を開くのが同時だつた。

「よし、リュウヤ。さっそくフレンド登録申請するから、承諾よろしく！」

「了解。ん、承諾したよ」

頭の中に、『クラウドからフレンド申請がありました。承諾しますか？』というテロップが効果音とともに現れたので、その下にあ

つたYESの方を押すイメージを浮かべると、文字列が切り替わって、『フレンド申請を承諾しました』と現れた。どうやら、指で操作しなくても、イメージだけで動かすことが可能らしい。

「OKOK。じゃ、飯食つたら早速パーティ組んで、レベル上げ行こうぜ」

「そうだね、今武器とか防具買つてもすぐに新しいものが必要になるわけだし、これでいいや」

今の僕たちが装備できるのは、どう考へても一番安い、性能の低い装備だけ。

ならしばらくはこれで我慢して、レベルがある程度上がった後にそろえた方が、節約にもなるし、時間も省ける。

それにこの世界でも腹は減るし、喉も渴く。睡眠はどうなくとも問題ないけど、状態異常に罹りやすくなるらしい。

メニューを見ると、「ハンバーグ」「ステーキ」「パスタ」など、割合元の世界にもあるような品物が並んでいた。

「これにす「熟成牛のステーキで」・・・一番安いもので

どれにする?と聞こうと思つた時には、既にクラウドは店員を呼んで注文をしていたため、仕方なく一番安いものを選んだ。

「よりもよつてステーキつて。金かかるよ?」

「いいのいいの。ゴグドラシア・オンライン初の食事なんだから、盛大にやれば」

小一時間ぐらい、「節約」という熟語について、クラウドにみつちりと説教したい気分だが、もちろん実行移したりはしなかつた。代わりにグーで殴つておいたが。

「いつてえな!何するんだよ!」

「お前なあ・・・今財布に何円持つてんだ?」

個々の通貨の単位は「セル」だが、1セル=1円が相場なので、プレイヤーは皆分かりやすく円で通していくのみなのだ。

「きつかり1000円」

「すこし足りないだろ?」

さつきのステーキは、消費税込みで1050円。

そこまで再現しなくてもいいと思うが、どうやら此処の王に払う税金らしい。

「あ、やベホントだ。リュウヤー! 少し貸し

「きつぱりと断る!」

て、まで言う前に断つた。

自分の所持金もちょうど千円だし、一番安い品物を注文しても、残り七百円しか残らない。

「そ、そんなあ・・・」

「稼げ」

頭を抱えて悲嘆に暮れるクラウドだが、現実は厳しかった。

「お待たせしました」

テーブルに突っ伏していたクラウドが視線を上げると、そこには出来たてで湯気が立ち上っている、美味しそうなステーキと、その隣に載つているおにぎり三つが視界に入った。トレイを持った女店員は目に映っていない。

「ぐぐ・・・

そんな擬音が今にも聞こえてきそうな表情でトレイを凝視するクラウドをじり目に、僕は立ちあがつて店員からおにぎりとステーキの載つたトレイを受け取つた。

「あれ? 食べないの? クラウドさん?」

あらかじめ言つておくが、僕は断じて、サディストではない。

「五十円ぐらい貸してくれてもいいだろ？ケチかお前は」「しょうがないなあ・・・」

溜息をつきながらしぶしぶ五十円を取り出して渡すと、クラウドの眼がキランと輝いた。

「でもステーキは半分もらうよ」

が、次に放たれた僕の言葉で、ゴンッと音と共にテーブルに倒れ込んだ。

「鬼かお前は！」

「失礼な、守銭奴だよ」

すました顔で言うと、ずっとコップに入った水を飲む。

「十分酷いじゃねーか！」

「で、くれるのくれないの？」

「誰がやるか！」

なお抵抗するクラウドの方を見て、ぼそっと一言。

「五十円」

「その手には乗らないっ！」

「おねーさん。この人千セルしか持つてないのに千五十セルのステーキ頼んでまーす」

わざわざ右手を拡声器の形にして店員の方を向いて叫ぶ。

「ちょ、おまつーなにいつて」

「で、くれるのくれないの？」

「・・・あげますよ、あげればいいんでしょ」の野郎

「分かればいいんだ」

こうして僕は、五十円でステーキを五百円分、食べることができた。

「あー、食べた食べた」

おにぎり三つとステーキ半分を食べ、腹を満たした僕と哀れなク

ラウドは、パーティを組んで狩りに出かけることになった。

「不幸だ・・・」

空になつた自分の財布を眺め、溜息をつくクラウド。

「不幸じゃない、不注意だよ」

「原因のお前が何言つてるんだ！」

「いやいや、君が財布の中身も確認しないで『いいのいいの。』『ゴグ
ドラシア・オンライン初の食事なんだから、盛大にやれば』とか言
つたんでしょ。僕は止めたよ？一応」

正確には止める前にすでに注文しちゃつてたのだが、なおせり僕
に責任はない。

「まあいい、狩りに行くぞ！」

「OK、ドロップアイテムでも売つて、金を稼がないとね

「そのことはもう言わないでおこう、うん！」

東側にある初心者の森を抜けると、『カベルネ湖』^{シルバーワルフ}とこいつら
があり、そこでレベル5の『銀狼』^{シルバーワルフ}を狩ることになった。

目的地に向かって走りながら、僕は今回のネタをずっと忘れない
と、心の中で誓つた。

「お、もう着いたみたいだな

表示されていたマップが「初心者の森」から「カベルネ湖」に切
り替わった。

「だねー。ところでまだ聞いてなかつたんだけど、これからどんな
ふうに育てるつもりなの？」

「剣使いかな。まず目標としては、称号『守護者』^{ガーディアン}から『闘劍士』^{グラディエーター}と
かを狙つてる」

なるほど。なら魔法使いの僕とは相性がいいみたいだ。

これで回復職が一人と、もう一人ぐらい盾役がいれば、完璧なパーティになるだろう。

「僕は魔法職だから、前衛は頼むよ。今は ライトニング しか使えないけど、レベルが上がつたらもう少し強力なのも使えるようになるだろうから」

「おう、任せとけ！」

どん、と胸をたたくクラウドは、まあなかなかに頼もしかった。

Act 4 レベルアップ

「ふう・・・・よし、これで十二匹目だ！」

銀狼を狩り始めてから約一十分。

クラウドは「どっちがたくさん狩れるか勝負だ！」と言つて走り去つていき、僕が盛大にため息をついていたことは記憶に新しい。あの時のクラウドは、「前衛は任せとけ！」とか言つてた人と同一人物とはとても思えなかつた。

前言撤回できるなら、「なかなかに頼もしかつた」とかいう発言は取り消したいよ。本当に。

それでも順当に経験値は溜まり、今はレベル6になつた。

パーソナルポイントは相変わらずAGIに3、INTに6振つて、スキルポイントは全部雷系魔法に。

おかげで新しいアーツ、ホームинг・サンダーとフラッシュユ_を覚えることができた。

二十分間、できるだけライトニングを使ひよじにしていたら、熟練度が上がつていたみたいだ。

追尾型のライトニングと、辺りに膨大な光量を出現させて、敵の眼をくらませる、スタングレネードみたいなアーツ。でも自分には効果がないっていうなかなかに優れ物。

それに、まだ試していないけど、面白いことも思いついた。

「クラウドー、何匹狩れた？」

「今十一匹目狩り終わつたところ。そつちは？」

僕は、自分の狩れた数を知つてゐるため、にやりと笑つた。
「知りたいか？」

「おう、もつたいつけないで早く教えろ」

少し間をあけて、効果を高めると、弾んだ声で言つた。

「十三匹だ」

「んなあ！負けた！防御が紙のこんな奴にいい！」

「当たらなければ問題ない！」

AGIを上げていいせいが、結構素早く動ける。

不意を突かれなければ、噛みついたり引っかいたりするしか能のない、銀狼にはそう簡単にやられはしない。

パーティを組んでいるから、経験値も平等に分配なんだし、と銀狼に特攻をかけようとするクラウドを押しとどめ、湖の近くに座る。「そろそろもうちょっと奥に行かない？ 銀狼狩りも飽きてきたし、あいつらレベル5だからそろそろ経験値も足りないしね」

鞄を開いてみると、銀狼がドロップしたらしいポーションがいくつかと、およそ七百円、そして嬉しいことに杖が入っていた。INTが5上がる補助効果付きで、このレベル帯で装備できるものにしてはそこそこ高性能だった。

早速装備してみると、手のあたりに光の粒子が舞い、細長いカシの木でできた杖が召喚された。

先端が銀色に輝いていて、アイテムの名前が「シルバー・ロッド」。安直な命名だけど気にしてはいけない。

「そうだな、ポーションも手に入つたし……つておいリュウヤ！ 良いもん持つてんな！」

「銀狼がドロップしたんだよ。たしか十三匹目のが落としたかな！」もちろん嘘です。そんなことは覚えていないし、戦闘ログを見てみると、だいたい六～七匹目のが落としていた。

「マジで！ よし俺も防具や長剣、片手半剣、短剣のどれかが出るまで戦つ！」

「いいから行くよ。奥にいるモンスターの方が強い装備とかドロップするだろうしね」

それに、他のプレイヤーがいればパーティ組めるかもしれない。むしろそれが結構大きい理由かな。

クラウドはどうも当てにならないし……。

「そうか。それもそうだな。じゃあ出発!」

「やれやれ、扱いやすい奴」

やや呆れ気味に肩をすくめると、意氣揚々と歩きだしていたクラウドがくるっと振り向いた。

「何か言つたか!?」

「いやいや別に」

耳いいんだな とか思いつつ、顔の前で手を振つて『まかし、彼の後について行つた。

歩いても歩いても、辺りに広がる景色はとにかく美しいある湖と草原、林。

ときどき出てきたモンスターは普通に倒せたが、狩り場にするほどでもなかつた。

数人のプレイヤーとも出くわしたけど、一心不乱に狩りに集中していく、気付かれずらしなかつた。僕は影が薄い方だとは思ったことがないんだけどね・・・。

「そろそろじゃないか?次のエリア、『カベルネの泉』」

「そだね。どんなモンスターがいるんだろうな。銀狼の次はあれか、金狼か」

「ゴールドウルフ

金狼つてどこかの神話に出でてくるライカンスロープを漢字に直したものもあるらしいけど、多分ゴールドウルフの方の線が強いな。

「あー、ありそうだなそれ・・・つておい、あの辺に何かいるよーな」

クラウドが指さした先には、金色に輝く何かが、二匹いた。

「もしかしなくとも、あれってどう見ても金色だよね

「予想的中、つて感じだな

少し近寄つてみると、**「金狼」**LV10と表示された。

「…………なんというか、アレだな」

「ネーミングに困つてたんだろうね、きっと」

予想通り過ぎて、少し呆れたが一応相手はLV10。物音をたてないよう、こつそりと近づいた。

「ポーションの準備は良いな」

「もちろん」

「よし、じゃあ勝ち前衛は今度こそ任せたよ……任せられてやるよ」

また勝負とか言いつつだつたから、先に言葉の槍で封じておいた。

「行くよ、フラッシュ！」

これは、魔法陣や詠唱を必要としない魔法。

攻撃力も状態異常もない代わりに、即効性を求めた魔法なわけだ。もちろん、一回使つた後は五分間使えない。じゃないとMPが尽きるまで連発できることになる。

そんなことを思つてる最中には、眩しい光が出現し、辺りにいる自分以外の生き物全ての眼をくらませている。

「ぎゃああああ！ 眼が、眼が……！」

「あ、わるいわるい ライティング ホーミング・サンダー！」

それはクラウドも同じだったようで、眼を抑えながらのたうちまわっていた。

心を込めていない謝罪を一応しておぐと、僕は順番に二つの魔法を発動し、一匹目の金狼に攻撃を仕掛けた。

「ギャルルツッ！」

二つとも命中したが、それだけで死んではくれない。

レベル10にもなると、HPが結構ある。加えて狼系は攻撃力とスピードも高い方だ。

「援護するから行け！ クラウド……！」

「委細承知！」

フラッシュによる閃光も晴れ、見事復活を果たしたクラウド

は、うりやああああと奇声を上げながら、金狼目掛けて突っ込んでいく。

「つたく、バカかあいつは。忍び寄るとか背後とかできないのかな、まったく。 ライトニング ホーミング・サンダー」

同じく一連発で魔法を発動。

「ギャ、ル、ル」

クラウドが向かつて行つたのとは違つ方の金狼に仕掛けたのだが、何か様子があかしい。

何でだろう、と考えてみたが、すぐに答えは見つかつた。

そういうば今まで一度もかかつたことはないけど、この魔法は一応麻痺効果付き。

あの金狼は麻痺状態になつたに違ひない。

「ほんつと便利だな、この魔法」

MPの都合上、このまま乱発するのはよろしくない。

持ち前のAGIを活かして素早く接近すると、杖を使って、噛みつこうと跳びかかってきた金狼を叩き落とす。

パソコンでやるのとは違つて、こうこう応用技も自由自在なのが、このVERSを使った『ユグドラシア・オンライン』。

「クラウドー、ほれ。パス！」

テニスのラケットのようく杖を振り、ボカッといづ音がして、金狼の身体が弧を描いてクラウドの方に跳ぶ。

一匹相手に善戦中のクラウドは、突然の乱入者に一瞬、相手の金狼から注意がそれる。

「危ない！ ライトニング」

僕が叫ぶと同時に、二匹の金狼がクラウドの腰に噛みついだ。

クラウドのHPバーが半分ぐらいまで削られる。

「ちつ・・・痛えな、この野郎！」

ショットと空気を裂く音がして、クラウドが 連衝斬 を発動したと分かつた。

あの技の止めの一撃、突きが初めの金狼の腹に命中する。

残りの一匹には、僕の放った雷撃がぶつかった。

僕も一匹の金狼に向かつて走りながら、鞄ウインドウを開いて装備をナイフに持ち変える。

手元で光の粒子が舞つて、それが収まるとさつきまで持っていた杖は消え、手には細身の短剣が握られていた。

「行くぞ！トドメだ！」

「喰らえ！」

別々の掛け声だけど、発動したアーツは同じ。

「連衝斬！」「

紅いエフェクトが弾け、一匹の金狼はついに消滅した。

大量の経験値が入り、レベルが7から9に上がったことを知らせる効果音がなつた。

まだ6だつたはずだけど、ざつやうじに来るまでにレベルアップしていたらしい。

ポイントの振り分けはいつも通りに行つた。

「お、おいリュウヤ！アレ見ろ、アレ！」

「何？そんなに慌て……て……！」

興奮と驚きの入り混じった声がして、彼の指さす方を見ると、僕も絶句してしまつた。

先ほどまで木が生えていただけのところに、蒼い光が現れていて、奥に行けるようになつていた。

「怪しくないか？」

「滅茶苦茶怪しいね。うん」

行かない方がいいと思うよーと言おつとしたけど、やめておいた。無駄に決まつて。

「よし、行つてみるぞ！嫌とは言わないよなー」

「あーうんそうだねー。行つてみよ か 」

分かりやすい友人の行動に、僕は今まで一番大きな溜息をついた。

Last Act 牢獄までのカウントダウン

「うりやーー待つてろよ、未知の世界！」

「はあ・・・未知の世界を求めるといんなら、そんな怪しそうな所に行かなくとも、大抵のところは未知な場所だよ。今の僕らにとつて最後の最後に、光の中に足を踏み入れるまで、いや一步中に入った途端、足元から身体が消えるような感覚と共に、転移させられてからも、今回の冒険には、心情的に反対だった。

「やつぱりこいつなったあああああああ————！」

転移の瞬間、僕の叫びが虚しく辺りに響いたとか響かなかつたとか。

ヒュオーンッと言ふ音とともに、僕たちは湖の前に出現した。

穏やかな光が木々の間から差し込んでいるが、それすらも今の僕らにとつては死亡フラグになりえる状況だった。

だつて、どこからどう見ても、どう考へてもこのヒリアのボスモンスターとの戦闘、としか思えない。

マップで確認してみると、【カベルネの精霊湖】とかいうボスが住んでいそうなネーミングだし、ちょうど戦闘しやすいような円形の草地の真ん中に、一本の樹と湖があり、近寄った瞬間、ボス戦が始まリそうな感じになつてゐし、しかも戻る方法がないし…ここに

転移させられた光はもうないし、ここでボスを倒すか、逆にパーティが殲滅するしか帰る方法がなさそuddash;だ。

ふう・・・落ち着け、まずは冷静に状況を把握しよう。
僕が持っているのは、HP回復ポーションが四個、MP回復ポーションが二個。

そしてクラウドが持っているのはHP回復ポーションが六個。
大丈夫、まだ勝ち田はある。

そう思った瞬間、僕の甘い思考は打ち崩された。
あのクラウドが、ぶるぶると震えながら、前に足を進めようとしない。

拳句の果てに、こっちを見ながら、とんでもないことを言い出した。

「な、なあ・・・知つてるか?」このエリアのボスモンスターってさ、『カベルネの泉』の最奥部にあるんだよ、決してこんな精霊湖にはいないんだ」

なんだ、じゃあ思い違いか・・・とホツと胸を撫で下ろしたら。

「ここ、レベル一十のボスマンスター、<水精龍^{アクア・ドラゴ}>の住処。レベルはそこそこでも、攻撃力や防御力はエリアボスのおよそ二倍・・・
そんな強さを持つ、竜の眠る湖なんだよ、ここは」

「お前、確實にバカだろおおオオオ!」

「言い返せねえなあ~いや~、あはは

「あはは~じゃない!」

この時の僕は焦りすぎて、気が付いていなかつた。
さつきから、随分大声を出していることに。

そして、空気を重々しい唸り声が支配していること。

「グ…グルウオオオ！」

「「・・・・・」」

ギギギギギ、と鏽びついた歯車が鳴らすよつた音が、實際になつてこむかのよつた錯覚。

それぐらにゅうくじと、僕らは恐る恐る、横を向いた。するとそこにはやはり、青色の炎を鼻から噴き出した、全身が蒼い西洋風のドラゴンが。

「しゃーないな、やるだけやつてみるか！眼を開じてよー。」

なんだか、この世界に来てから、諦めが良くなつた気がする。

「 フラッシュコ…」

この魔法は、どうやら閃光を発するのは一瞬のことらしい。

その後は、眼をやられた敵が一時的に失明のバッドステータスが付加されるとか。

これは、眼を剣で斬つたり、弓で狙撃したりした場合にも起くることだ。

だから、最初の一瞬だけ目を開じていれば、後は普通に行動できる。敵も、味方も。

「行くぜー！」

両手で眼を覆っていたクラウドにもそれは伝えてある。
すぐさま飛び出していったクラウドの手には、短剣が握られていた。
が、ここで大きな誤算があった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

眼が見えなくなつた水精竜は狂つたように暴れ出した。

「がつ！」

ブォンッと音を立てて振り回された、水精竜の尻尾がモロに腹に命中し、クラウドは大きく後方に飛び、近くの樹にぶつかつた。

今の一撃だけで、もう彼のHPは残り三割を切つていて。

「ライトニング！」

が、クラウドが飛び出すと同時に発動していたアーツにより、雷撃が水精竜を襲う。

詠唱時間はAGIによつて短縮することも可能なうえ、熟練度によつても長さは変動するようだ。

今僕は、ライトニングなら五秒で発動できるようになつてゐる。

「ライトニング！ ホーミング・サンダー！」

作戦変更。

あいつの眼を、ホーミング・サンダーで集中的に狙う！

「クラウドー立てるか？」

矢継ぎ早に魔法を連発しながら、唸るように尋ねた。

その瞬間、水精竜が生み出した水の弾丸が辺りに降り注ぐ。

大急ぎで後方にさがつて回避すると、仕返しどばかりにライトニングを打ち込む。

もう僕のMPは残り半分。

対する水精竜のHPは、ようやく一割削れたかな？といつ程度しか減つていない。

「おう、畜生・・・舐めやがって、あのくそドリノン！」

「舐められて当然かもね。それぐらいの差はあるよ」

「溜息がまた漏れる。これもまた癖になつてゐみたいだ。いやだなあ・・・。

「グギヤアアツ！」

「「「うおつと」」

水精竜の羽ばたきによつておこされた突風が、渦となつて辺りを襲う。

「あいつ、魔法も使えるの！」

「みたいだな！」

「うわあ・・・厄介な。

」「いや勝ち目はないな、うん。

「 ホーミング・サンダー ホーミング・サンダー！」

剥き出しになつた水精竜の眼を、集中砲火で狙い続ける。

「短剣のアーツに便利なのはないのか？」

「あいにくと、衝連斬とダガースロー！これしかねえな。ナイフをもう一つ生み出して、それを投げつける技だ。これで俺も目を攻撃するか」

ダガースロー・・・あまり強そうな名前じゃないな。

むしろ遠隔攻撃ができるつていう以外に特徴あるアーツではなさそうだ。

「仕方ないな、あまりやりたくなかったんだけど、新技行くぞ！」

「ライトニング　ホーミング・サンダー　ライトニング　ホーミング・サンダー　！」

順番に発動しているだけに見えるけど、実は違う。

一番初めの　ライトニング　は、魔法陣。

ホーミング・サンダー　は詠唱。

次の　ライトニング　は魔法陣。

最後の　ホーミング・サンダー　は詠唱。

魔法陣を書いている最中に詠唱をし、魔法陣を書き終わったらまた新しい魔法陣を連続で描く。

裏技を使って、魔法の多重発動。これが僕の最大の新技。

レベル上げ中に思いついて以来、試したことはなかつたけど上手くいった。

鞄の中からMP回復ポーションを取り出し、親指で蓋を弾く。

ひと思いに一気に飲み干すと、また魔法を発動する。

その間も、麻痺効果がかかつたのか、水精竜は攻撃を仕掛けてこない。

「今のうちに行くよ！」

「応！」

威勢のいい返事を残して、水精竜に向かつて突撃するクラウド。それに反応してか、ピクリと水精竜が動く。麻痺状態が解けたのか！

「お前完全にバカだろ！　ダガースロー　使えって！」

「あ！」

思い出したよつと口に手を当てるクラウドだが、それは同時に大きな隙を作ったことをも意味する。

水精竜の口から、蒼い炎のブレスが放出される。水とは対極の存在ともいえる炎だけど、ドラゴン種だけあってブレスによる攻撃もできるようだ。

黒い影が猛スピードで動くのが視界に入った。

紅いエフェクトが弾け、思わず僕は目を閉じてしまった。

ファンタジー小説なら、ここで誰か テストの時からプレイしていた強い人が助けに来てくれるんだろうが……。

あいにく、そういうことはなかつた。

「クラウド…」

クラウドのエマ、一瞬で○になつた。

「ちつ・・・これまで・・・か。これを・・・使つてくれ」
ポイッと放られたのは、ポーションと短剣。

それを投げ終える頃には、クラウドの身体は薄れていき、しまいには光の粒子となつて消滅した。

「グギヤアアアツアアアツ！」

なんの意味も持たないはずの竜の咆哮が、今の僕には「よし、次

はお前だ！』と勝ち誇っているように聞こえた。

「くそつー負けてたまるか！ ライティング！』

何かないか・・・何かないか。 状況打開の手が！

「とりあえずこれでも喰らえ！』

ホーミング・サンダーを詠唱しながら、僕はさつきもらつた短剣を投げつけた。

万が一にでもあたつてくれればいい、と思つて投げたその短剣は、見事に水精竜の右眼に命中した。

が、そんなまぐれのような幸運でも、ＨＰはあまり削れない。

水精竜のＨＰは残り五割。

が、怒らせる程度には十分だったようだ。

「グギヤラアアアッ！』

今までに倍する音量で、雄たけびを上げる水精竜。
と、不意に僕は今までに読んだことのある、ファンタジー小説の中にこういう場面があつたことを思い出した。
自分が撃つっていた電撃に負けないスピードで、脳裏を思考が駆け巡る。

「できるかどうかは分からぬが、やってみるしかないな！』
もうひとつ、自分が持つっていた短剣とＨＰポーションを握りしめ、腕や尻尾を振りまわす水精竜に接近する。

自分のＡＧＩがどれだけ有効なのかわからぬけど、どの道死ぬなら、せめて一撃でも入れておきたい。

ズシャツ

僕の腰を、水精竜の腕の爪が抉る。

が、緩和された痛みは、まだ耐えることができた。

そして空中にホバリングしている水精竜の真下に潜り込むと、力いっぱい短剣を投げ上げた。

「ブスッ」という軽い音がして、短剣の切つ先が数センチ、水精竜の腹にめり込み、紅いエフェクトが表示される。

「こ、これでどうだ！」

もちろん、それだけでダメージを「△」とは思わないし、実際ほぼノーダメージに近いようだ。

HPとMPのポーションを飲み、もう一度今度は肩に爪の洗礼を浴びるが、ぎりぎりHPは残っていた。

「『ライトニング』！」

狙うは、水精竜の翼の付け根。

ホーミング・サンダーの陣を描きながら、発動した『ライトニング』は、狙い過たず命中する。

ほぼ同じタイミングで、湖の水を凍らせて作ったのであろう、氷塊が飛来する。

氷も水の一部なため、水を操る竜ならこれぐらいしてもおかしくないというのは予測済みだ。

それを現実世界より格段に上がった反射神経で、横に身をさばいてかわすと、「先ほど短剣を投げつけたところ」にホーミング・サンダーを撃ちこむ。

高電圧の塊は、金属製のナイフの柄にぶつかった。

これだけならなんということはない。

が、電流というものは流れやすい方に流れ込む性質を持っている。

水精竜の体内に流れ込んだ電流は、次に出るところを探す。

それが、クラウドからもらい、今は水精竜の右目刺さっている短剣。

水精竜の体内を駆け巡った高電圧は、確かに皮膚や鱗に護られている身体の表側とは違い、柔らかい内臓を焼く。

この世界のモンスターも、倒せば「生肉のかけら」等のアイテムが手に入るという。

つまり、内臓や何かも、一応ある設定になつてているといふこと。ならば、一番弱いのは守られていない体内

！

追撃とばかりに、今使える二つの攻撃魔法を同じように放った。

水精竜の身体がビクッと震える。

「グラアアアアツ！ グオオオオツ！」

が、一撃で止めを刺すには至らない。
HPは一割を削った程度だった。

「くそ・・・ライトニング！」

最後の悪あがきとばかりに、慣れ親しんだアーツを使う。が、これもあまり効果は得られない。

そして、今の攻撃でもう僕のMPは残っていないし、ポーションもない。

「僕の負けか・・・」

観念して、自分のHPが○になるのを待った。

が、いつまでたつても衝撃も痛みも来ない。

不審に思つてみると、いつの間にか水精竜は事切れていた。

ボスマンスターだけあって、すぐには消滅しない。達成感を与えるための措置だらうが、今の僕にはどうでもいいことだった。

「何で死んでるんだ・・・？」

思わずつぶやく。

確かにさつきは、誰かが助けに来てくれればいいなーと現実逃避したりもしたが、それは叶わなかつたはず。

「やあ、こんにちワ。今日もいい天氣ですね？」

それでも、言葉遣いのおかしな、変な人が竜の頭の上に座つて、こちらへ手を振つていた。

で、あれから一時間ほどが経過して、僕らは『シドの酒場』に来ていた。

メールではなく、直接 心話 という電話みたいな機能で、呼び出したクラウドにまだ自分でも整理できていない事情を説明すると、死ぬほどうらやましがられた上に一発殴られた。

当然だろう。トドメは持つて行かれたとはいえ、水精竜がくれた大量の経験値で今や僕はレベル十五。

そしてレアドロップ【水精竜の涙】と呼ばれるアクセサリーをも手に入れていた。

火耐性と、魔法攻撃力の向上効果付きで、見た目にも蒼い宝石の

に、碧色の樹の葉がついた綺麗な品だ。

あの後、湖に生えていた樹に、大量の花が実つて、新エリア「マップ【カベルネ・陸の孤島】」が追加された。

その新エリアマップを狙つて、単身乗り込んできたのが、語尾のおかしい、僕を助けてくれたシウェルさん。

アルザス城の東西南北に、このゲームの発売を記念に、テストのときはなかつた、特別な新エリアが追加されるという話を聞きつけ、知り合いと協力して攻略に臨み、死にかけの僕を見つけた、とのこと。

肝心の彼は、レベル98とかいう異常な数値。

もう想像がつくだろうが、彼も テストの対象者。

その中でもトップクラスの実力を誇る・・・らしい。

なぜ「らしい」かというと、彼が自分で「私はねえー、このゲームの中でも、上から数えて五本の指に入るぐらい強いプレイヤーなんですヨ」と言つていただけだから。

「いやあ、途中から見物させてもらつてしましましたけど、君、なんの役にも立つてませんでしたネw」

「うつさいなあ！見てたんなら助けてくれればいいのに！」

「あんな面白い戦い、普通止めませんヨ」

そう言つて、ケラケラと笑つているシウェルさんは、とてもそんな強い人に見えない。

「で、これからまた、レベル上げに行くんですか？手伝いますヨ」

「いや、もう落ちます。今日は疲れました・・・」

さすが幼馴染。ぴつたりと細部まで同じセリフを、同時に言つなんて。

「そうですか。また何かあつたら言つてくださいね。フレンド登録でもしておきますか」

じつして、僕たちは自称最強のプレイヤーと、フレンド登録を交わした後、近くの宿屋に戻ってログアウトした。

そして、朝。

目覚めた僕たちは、始業式に臨むことになった。
運がいいことに、翔とは同じクラス。

「よつ！また同じクラスになつたな」

「そうだね。よかつたよかつた……。あー、眠い……」

僕は昨日、あれから自室のパソコンを開いて、攻略サイトのない『コグドリシア・オンライン』の情報を、あるだけ探していた。
テストの参加者のブログ、公式サイト、消されるのを承知で作つたとしか思えない攻略サイトもどき。

最後のは見てる最中に削除され、画面がフリーズするという事態に陥つたせいで、PC再起動も面倒だつたから、電源切つて寝た。

そんなことや全くゲームに関係ない話などを続けていたり、始業式が始まつた。

「…………」

校長の話？ そんなもの寝てるに決まつている。

先生が言つには、今日は何時もより多くの生徒が寝ていたらしい。
そして先生はそれを怒らない。何故か？ 簡単なこと。

先生自身も、長すぎる校長の話につづけて、体育館の壁にもたれて眼を閉じていたからだ。

「では、LHRを始めます。全員席について」

去年と同じ、担任の辻前真衣先生が、教壇から頑張って叫んでも、その声は届くことがなかつた。

教室中で、かわされている会話のほとんどが、新しい技術を用いたゲーム、『コグドラシア・オンライン』のことだ。

「あれ欲しいよなー。聞いたところによると、もうこの辺の店で売つてるところはないらしいぜ」

「値段も結構高いしな。それにうちの親がアホでバカでカスだから、そんなよくわからないもんに手を出すなー！ つてうるせえんだよ」「おーおー、いいのかそんなボロカスに言つて。でもま、そんなの無視して買つんだろう？ どうせ」

「愚問だな。決まってるじゃないか。今度の休日、『コグドラシア・オンライン』探して激戦区巡りをしないとな」

そんな会話が繰り広げられている中、僕と翔に、もう一人の幼馴染と言つてもいい、楓星羅かえで せいらが近づいてきた。もちろん彼女のあだ名は、小公女。

「で、どうせあんたたちはもつ買つたんでしょう？ あのゲーム」

「もちろんだ」

「あんな夜中に、行列まで作つてゲームを買つに並ぶなんて・・・ よほど暇人なのね」

さすが幼馴染。僕らの行動は予測できるつて？ いやいや、違うな、こいつの場合。

「うるさいわ。それに小公女も見に来てたんだろ？ で、並ぶのが嫌になつて家に帰つたと。そういうわけだな」

「うつ・・・何でバレた！ それに小公女言つくな！」

あ、墓穴掘つた。

「だつて『あんな』つてことは、どこから見てたつてことじゃないか。で、見てたんなら目的は一つ。お前も買つに来てたんだ、つてことぐらい予測付くだろ？ な、翔」

星羅のセリフの後半はスルーすることにする。

「お、おつーもちろんわかつてたぞー。」

絶対気付いてなかつたな、こいつ。

「はあ・・・で、小公主、じゃない星羅は、結局買ったの？」

「残念ながら買えなかつたわ・・・どこの店でも売り切れだつた」

「だらうね。あの程度の行列なら、どこの店でも同じだらう。」

行列が嫌だからって言つて帰るようじや、まだまだだな。

あらかじめ、三つ買つておいてよかつた。

「翔、持つてきた？」

「もちろん」

先ほどと違つて、同じセリフでもこつこつとは自信が満ち溢れてい
た。

「ジャジャーン！」

わざわざ口で効果音をいい、僕と星羅に引かれているのにもかま
わず、鞄の中から一枚のゲームディスクを取り出す翔。

「ぐつ・・・と睡を呑む音がした。もちろん星羅が音源だ。

「これを星羅に売つてあげてもいいよ

「い、いくらいで！」

「野口英世さんを六枚で」

「原価は五千円よね。もうひとつとまけてくれてもいいんじゃない
の？」

その後も交渉は続き、結局五千五百円で落ち着いた。

「ありがとね～」

今にもスキップでも始めそうなぐらい、上機嫌な星羅の姿に、僕
とカケルはそろつて噴き出した。

「おーい、待つてつて！どんなキャラでログインするつもりなのか
教えてー！」

僕が呼び止めると、ぐるりと振り向いた星羅は、若干言いたくな
さそうに、それでも口を開いた。

「へセーラーよ、なに、文句あるのー。」

「いや、ないない。僕はくリュウヤマで翔はくクラウドだから、また一緒にプレイしようね」

やつぱり小公女だーとは言わないう方が良かつただろう。

「わかった。じゃあまたねー」

「其処の三にーん? 不要物は持ち込まないよつにね? 先生の眼の前で出すとはいひ度胸ですね・・・」

「あーなんというか、すまん星羅」

「翔のバカー!」

間違いなく、没収されるだらうな(御愁傷さま)とクラス中のメンバーが思った時、先生の口から思いもよらぬセリフが発せられた。「私もプレイしてゐるのよね、そのゲーム。また先生ともプレイしうねー」

「…………それでいいのか真衣先生ー…………」

そんな楽しい日の夜。
僕たちはそろって、歴史に名を残す大事件に、巻き込まれること
になつた。

Last Act　牢獄までのカウントダウン（後書き）

第一章終わりました。
と言つてもこれまで実は序章みたいなもので、次から本格的に話
に入ります。

（よくわかる解説）

LHR・・・ロング・ホーム・ルームの略。
激戦区・・・電化製品を取り扱つてゐるところ等によくある、「
他の店より安いのが売り！」と言つよつに書いてあつたりする店が、
一か所に集まつているところの」と。

そこでは「あ、隣の店の方が安い」「あ、さつき値下げしてもら
つたからこっちの方が高いかもー！」などと言えば、大幅な値下げ
が見込めたりする。

ではまた明日、第二章の始まりです！

第二章 Act1 幻想の牢獄

「はーい、これで今日は終わりでーす。部活がある人は残つて、それ以外の人は帰つてもかまいません。では起立！氣をつけ！礼！」

「…………」「ありがとうございました！」

「」

今日は始業式だから、学校は午前中までしかないし、僕たちは今日部活もない。

「竜哉ー。早く帰ろうぜー！」

「そうだね、早く続きプレイしたい、しー！」

肩に鞄を引っ掛け、教室を飛び出そうとした僕の足に、箒がひっかけられた。

「ちょっと待つて。掃除手伝つて？」

もちろん、攻撃の主は星羅。

「あーはいはい。わかったよ。やればいいんでしょ、やれば「納得早つ！」

翔のツッコミが入るが、ここで抵抗しても無駄だといつのは、長年の経験上分かり切つている。

なら、さっさと終わらせた方が得だ。

「翔も手伝え（いなさい）ー。」

「あーわかった、わかったからー。」

翔の腕をつかんで、強引に引き寄せる。

そしてその手に箒を握らせた。

「ショーガない、ひやつひやつと終わらせるだー。」

およそ十分で掃除は片付いた。

「やれやれ、やっと終わったな。帰るぞ、竜哉！」

「そうだな、後はよろしく。星羅！で、翔。おまえんちに行つていいか？」

「なんで？」

「うちの親がむ、一日中家で寝転がつてゲームしてることを許してくれると思うか？」

翔の家は両親が共働きで、夜になるまで帰つてこない。

うちの親にも、「翔んちに遊びに行つてくるー」と言えば何も怒られない。

それを説明すると、なるほど納得。と言わんばかりに、ポンッと手を打つた。

「なるほど、分かった。問題ないぜ。じゃあ飯食つたらひづけに来てくれ

「ちよーっと待つたあ！あたしも行つていい？」

星羅は、性格はともかく、物凄い美少女と言つても差支えない。クラスメートからも人気があり、こんな会話が聞かれれば、翔が殺されるか、逆に大勢の男子が集まつだらう、といつぐらい。

僕の好みじゃないとはいえ、幼馴染じやなかつたら、到底縁がない人だつただろうが、そんな美少女が家に遊びに来てくれるとなれば、普通はうれしい、はず。

が、僕たちはそうじやなかつた。

「遠慮させてもらひよ

「無理だな

即座に返された冷たい答えに、ペキッと血の音を立てて、星羅のこめかみに血管が浮く。

「なんですよー別にいいじゃない、減るもんじゃないんだしー。」

「あのなあ・・・まあお前が気付いてないならいいけど。道徳的にどうかと思うがな、なあ童貞?」

翔の言いたいことは、なんとなくびりかはつきりとわかった。
確かにね、まあ星羅だし問題ないんじゃない?どの道翔んちには誰もいないわけだし

「なんのことよー。」

まだ理解できていないのか、と僕と翔はそろってため息をついた。

「別にもう来ていって言つてゐるんだから気にするな。じゃあまた後でな」「また後でー」

僕たちは、「待ちなさいよー!」とつ星羅の声をBGMにして、そそくさと教室から逃げ出した。

飯食べてから、翔の家に行くまでの過程は、ビデオもいって話だから割愛する。

何はともあれ、無事に翔の家に到着した僕と星羅は、「お邪魔しまーす」と慌ててドアを開ける。

誰かが家に遊びに来る時は、ドアに鍵を掛けないのが翔一流の出迎え方。

それを知っている僕らは、「不用心だな」と思つた程度で、特に気に留めることもなく中に入つた。

手には、しっかりとヘッドギアとゲームディスクの入つたカバンを持つて。

「お邪魔しまーす。はい、おみやげ」

星羅の家は、洋菓子店をやっており、滅茶苦茶つまいお菓子を持ってきてくれる。

「おう、来たな。さっそくプレイするか?」

「だね。いつの世界で四時ぐらいになつたら一回起きて、星羅が持つてきてくれた菓子食べて、再度ちょろっとプレイしたら帰ろつか」

「OK。じゃあ俺はこの辺で」

翔は、一回にある自分の部屋のベッドで。僕はその下の床で、寝転がつてヘッドギアを装着した。

この姿勢じゃないと、本体には意識がなくなるわけだから、結構危ない。

もちろん、星羅は一階の別の部屋で横になつている。

「じゃあ行くよ・・・ログイン!」

僕達は、ヘッドギアにゲームディスクを挿入し、ボタンを押した。

僕とクラウドは、この前ログアウトした宿屋で眼を覚ました。

「これから、チユートリアルを終えてセーラが出てくるまで、しばらく時間があるな・・・何する？レベル上げでも行くか？」

クラウドの提案に首を横に振ると、僕は今朝ネットで調べた興味深い情報を話した。

「それよりさ、『職業スキル』っていつのがあるみたいなんだ。取りに行かない？」

その名の通り、「料理人」や「剣士」などの、職業にちなんだアーツが使えるようになるスキル。

クラウドの目指す「守護者」や「剣闘士」と違い、誰でもいつでも簡単に、特定のNPCに話しかければもらえる、珍しくとも何ともない「レア」スキル。

僕は、空中を歩いて、足音を立てない 無音移動^{サイレン・ゲープ}や、姿を隠すことのできる 透明移動^{ハイティング・ゲープ}、AGIを上昇させる、常時発動型アーツ^{パッシブ} アクセラレーター 加速者 などがある「暗殺者」を狙っている。

フラッシュ^{ショット}で眼つぶししたと、無音移動^{サイレン・ゲープ}で背後をとり、威力の高い魔法のクリティカルヒットで大ダメージ！そして相手の反撃からはそのスピードを生かしてするりと逃げる・・・なかなかいいと思わない？

「クラウドはどんなにするの？」

「俺か・・・何にしようかな」

とりあえず、誰かに話を聞きながら田的の職業スキルをくれるNPCを探さなければならない。

僕の場合、だいたいの場所は絞り込めてるから、そのあたりにいる、青アイコンのプレイヤーと違つて、意識を向けた時に出るその人の上に出るアイコンが緑のNPCに、片つ端から声をかけるつていう方法もあるけど。

「じゃあまた見つかつたら連絡してくれよな
「互いにね」

しばらくすると、僕もクラウドも職業スキルを手に入れていた。時間的には、ちょうど星羅のキャラクター設定と、チュートリアルの説明が終わつたぐらいか。

僕は念願の「暗殺者」、クラウドはなんと「鍛冶屋」を選んでいた。

本人曰く、「んなもん、全部戦闘一色じゃつまらないだろつ。それに自分の武器ぐらい自分で作りたいしな」とのこと。

職業スキルは、50レベルに到達すると、一つに増やせるので、その頃には僕も生産系の職業スキルを手に入れようかな、と考えている。

「早速武器作ろうぜ！」

「ああ、良いね。中央に鍛冶ができるところがあるので、其処に行こうか」

僕は、レベル15に上がつた時のスキルポイントを、新しく解禁された「V15」のスキル、中級炎系魔法と暗殺者に振り、エターナルフレアと無音移動を習得した。

「暗殺者」のアーツは、他のアーツと併用が可能。

つまり、ダメージを受けて中断されない限り、隠れたままアーツで攻撃することも可能なわけだ。

まさに暗殺者の名前にふさわしい。

で、エターナルフレアは、任意の対象の周りに、超高温の焰を出現させ、継続的にダメージを与えて火傷状態にする魔法。

この魔法の恐ろしいところは、新しく他のアーツが使えないことに田をつぶれば、MPが尽くるまでずっと、相手の身体を、揺らめく焰で覆っていることができる。

ゆえに、中級魔法 永久搖焰（エターナルフレア）。

僕は 無音移動 を発動して、クラウドと鍛冶のできるところ、『鍛冶屋の空き家』に向かつた。

「よおっし。早速欲しかった長劍作るぜーー！」

必要もないのに、腕まくりをする動作とともに、インベントリから「鉄鉱石」を出して、どこからともなく取り出した金づちでたたき始める。

たまたま近くにある炉に入れたりするついで、だんだんと剣の形になってきた。

もつとも、金属塊の端の方だけ叩いていても、剣の形にちゃんと仕上がるのだが。

そして、眩しいHフロクトとともに、ついに仕上がった。

「よっしゃできたーー！って……えええええええ！」

「何があったの？」

「そ、それがわ・・・これ見てくれよ

見せられた長剣に意識を向けると、△アクセル・アイアンソード♪とあった。

普通のアイアンソードと違つて、剣腹に紅い模様が描かれている。能力も、普通は攻撃力+3のところを、攻撃力+7なのに加えて、AGI+3が付いている。

「もしかして・・・『クリティカルメイド』？」

生産スキル持ちが、夢見ているのが、このクリティカルメイド。稀に、叩く力加減や炉に入れる時間の長さなどが良いと、普通より能力の高いアイテムや、付加効果のあるアイテムが作れることがある。

そして一度クリティカルメイドに成功すると、以後同じものを作るのは、絶対にクリティカルメイドになる。

それを説明すると、クラウドの眼が驚愕に見開かれた。
そりゃそうだろう。なんてつたって百回やっても成功しないような確率のクリティカルメイドが、一発目から成功したんだから。
「俺、コソツつかめたかもしれない。何か鉱石持つてたらくれない?」

僕が持っている鉱石は、銀狼を倒して得た「銀鉱石」。

「ああ、いいよ。ただし、作るなら杖をよろしくね」
銀鉱石で杖を作れば、僕が今持っている「シルバー・ロッド」が出来上がるはず。

クリティカルメイドだと、シルバー・ロッドの前に、「オフエンス」とか「アクセル」等の形容詞がつくことになる。

ちなみにこの形容詞は、武器だと英語、防具やアクセサリーだと日本語なのだと。

「しようがねえな。でもリュウヤはシルバー・ロッド既に持ってるだろ?」

「僕の鉱石だからね」

「まあ、クリティカルメイドの方が性能いいからな、分かった。作つてやるよ

またクラウドが金づちで銀を叩き始める。

それから数分後、また眩しいエフェクトが瞬いた。

「ほーら、出来たぜ、『マジカル・シルバーロッド』

白毫げに語るクラウドが渡してきたの杖には、僕の持つシルバー
ロッドと違い、先端の銀の部分に魔法陣が書かれていた。

能力は、魔法攻撃力+7の、僕のシルバーロッドと違い、INT
+7、MP+50。

「いいねー、良いね　　！ありがとう。でも、そのクリティカル
メイドを作れるっていうのは、話さない方がいいね。皆がクラウド
に殺到しちゃうよ。だから僕とかセーラとか、あとシウェルさん以
外には話さない方がいいと思つ。でもまあ、金を稼ぐ分には困らな
いね」

強力な装備をもつて上機嫌な僕の耳に、プルルルル、という効
果音が聞こえてきた。

これは心話が来たことを知らせる効果音。

メールと並んで、この世界で連絡をとる手段で、オンラインゲー
ムで言うところの「チャット」に当たる。

『もしもし、竜哉？ いえ、ここではリュウヤね。今チユートリアル
が終わつたわ。レベル上げ手伝つてくれない？ 今は【城下町・アル
ザス】の北側入口にいるわ』

『了解。じゃあ今から行くから、中心に向かつて歩いてきて。途中
で出会えるか？』

『分かつた。よろしくね』

ブツツと音を立てて、心話が途切れだ。

『クラウド、鍛冶はおしまいだ。セーラを迎えて行くぞ！』

無事、セーラと合流した僕たちは、現実世界で四時になるまで、ずっと三人でレベル上げをしていた。

セーラは流れるような銀髪と紫の眼で、一瞬僕たちがポカーンと口を開けて突っ立つてしまふぐらいに綺麗だった。

が、目の前にいるのが星羅だと思うと、格段に色褪せて見えたのは何故だろう？

それはさておき、彼女は回復職志望だった。

僕たちの編成を知っていたから、「三人でプレイするなら、回復職の方がいいでしょ？それにあたし、前衛とかには向いてないしつて。

でもおかげで、バランスのいいパーティになつた僕たちは、順調にレベルを上げることができた。

隠されたエリアの発見者は、そのキーとなるボスと何回でも戦うことができる。

ストーリー的には、『また来たな・・・今度こそ倒してやるぞ！』のことらしい。

だから僕ら一人がいるパーティか、忘れてはいけないシウエルさんのいるパーティは、水精竜と好きなだけ戦える。

数時間が立つて、僕がLV23、クラウドがLV16、セーラがLV10になつた時、再チャレンジしてみるとあっさりと勝てた。

何度も何度も水精竜と戦つて、最終的には僕がLV30、クラウドが25、セーラが20になつた。

そして、宿屋でまたログアウトすると、僕たちは現実世界へと帰つて行つた。

「たつだいま～っと！」

僕とクラウドは、ビーチのゾンビよりじぐへ、むくりと起き上がった。

これから頂く、星羅の持つてきてくれた菓子は、皿そなうなケーキだつたため、冷蔵庫に仕舞つてある。

僕らが階段を降りてリビングに行くと、既に星羅がケーキを皿に並べている最中だった。

「さあ、席について。早く食べましょ。また続きやるんでしょ？」

僕が「うん、そうだね」と答えようとしたとき、僕の携帯に電話があつた。

僕が好きな、某映画の主題歌のサビの部分が流れる。

相手は僕の従弟で、自衛隊に所属している「仙崎直弘」。数人

居る従弟の中では一番仲の良い人で、まだ二十五歳だったかな。

他の年上、年下と違つて、何故か話が合う。

翔たちに断つて座つたばかりの席を立つと、廊下に出て通話ボタンを押した。

「どうしたの？電話してくるなんて珍しいね

「ちょっと物騒な噂を聞いてな。竜哉たちにも知らせといつと思つたんだ。もちろん先に竜哉の両親にも知らせてある」

自衛隊内での噂だらうけど、そんなに簡単に部外者に話して良いのか？という思いが頭をよぎるが、今回は好奇心が先に立つた。

「どんな噂？」

携帯電話の向こうから、すうーっと息を吸う音が聞こえる。

「今夜、大規模なサイバーテロが起きるらしい。勿論未然に防ぐ用

に努力するけど、念のためパソコンをネット回線から外しておいた方がいい

方がいい

それが本当なら、確かに危ない。

個人情報とかが漏れないよう、インターネット回線からの切断はしておいた方が良いだろう。

「分かつた。気を付けるよ。知らせてくれてありがとう。直弘兄さんも気を付けてね」

「勿論。まあ物理的な被害は無いだろうけど、今晚は徹夜確定だな。じゃ、また明日連絡するよ。じゃあな」

そこで、ブツツと通話が切れた。

僕が携帯を閉じて席に戻ると如何にも興味津々といった様子で、翔がテーブルに身を乗り出してきた。

「何の電話だつたんだ？」

「・・・翔、もうちょっと礼儀とかそういう物を身につけた方がいいよ。間違いなく」

でもまあ、この二人にも注意を促しておいた方がいいか。

「えーっと、今夜サイバーテロが起こるかもしないから、ネット回線には接続するな、ってさ」

たつぱり三秒間は固まった後、二人は一斉にわめきだした。

「どうということよ！ そんな情報を仕入れられるなんて、竜哉はどんな知り合い持ってるのよ・・・」

「げ、そんな物騒なことが起こるのかよ・・・教えてくれてありがとなーで、信憑性はどうぐらであるんだ？ デマじゃないのか、そん

な話は「

耳をふさぎたくなるようなマシンガントーク・・・いや、ガトリング砲トークの方が表現としては正確かもしれない。

「うわ、ひるさつーーおい、ちょっと落ち着いてってー今は自衛隊に所属してゐる従弟の教えてくれたことで、結構信用できる情報だよ。少なくとも『そういう噂がある』というのは事実だよ。そのうわさが正しいかどうかは別として。だからまあ用心しておいて損はないんじゃない?別にパソコンを使う用事なんてないでしょ?」「まあな、後でネットから切断しとくよ。それより、今は早くこれを食べちゃおうぜ」

「「食い意地張りすぎだよ(でしょ)ーー」

と言いつつ、僕も自分の分のケーキをフォークで一口サイズに切つて口に入る。

「美味っ!すげえうまい!」

「これは美味しいな。さすが楓洋菓子店製」

チョコレートを使ったスポンジに、イチゴ等のフルーツが乗った、甘さ控えめなケーキは、本当に美味しかった。

「レシピあとで教えてくれる?」

「それは無理ね。うちのお菓子の作り方は、門外不出なの」

意外に思われるかもしれないが、僕たち男一人も料理は得意だ。翔に関しては、親がないときに自分で作らなきやならないから、僕に関しては趣味で。

よく翔の家に遊びに行つては、晩飯も作つて食べて帰つていた記

憶がある。

そのうちに、だんだん料理が上手くなつたんだ。

「あーおいしかった。これはVR Sじゃ再現できねえな

「ホントだよ。あっちの世界の飯も美味しいけど、あくまで普通レベルだからね」

「そう? 良かったわ、喜んでもらえて!」

いや、作ったのお前じゃないだろ。等と突っ込むような野暮な人は、今この三人の中にはいなかつた。

が、予想を裏切るセリフの続きが語られた。

「これは、お父さんに教えてもらいながら、あたしが作ったのよ
「うつ・・・急に腹が痛く」

翔が、胃のあたりを押さえてテーブルに倒れこむ。
もちろん演技だ。

「何よ、失礼な! あたしだってケーキぐらいまともに作れるわよ!」
「まあまあ落ち着いて。翔もふざけるのはいい加減にしたら?」

二人をなだめると、これからどうするか話し合つた。

さすがにVR Sばかりやつてるのも身体に悪いだらうといつこ
とになり、頭のいい星羅の手伝いのもと、残つていた春休みの宿題
を仕上げると、晩飯作りを開始した。

ちょうど午後六時ぐらいに晩飯は完成した。
メニューは、ハンバーグとオムライス。

僕が作ったのがハンバーグで、翔が作ったのがオムライスだ。ケーキのお礼も兼ねての料理だけど、ちょっとカロリーが高いメニューになっちゃったかな。

「「いただきまーす！」」

礼儀正しく食前のあいさつをした僕と星羅の眼の前では、がつがつともう半分ぐらいを胃の中に収めている翔がいた。

「あいつはもう放置でいいよね？」

「ええ。構わないわよ」

以降、食べ終わって僕たちが自分の家に帰るまで、翔はシカトされ続けた。

4月8日 19:00

「ただいまー」

もう晩飯は翔ん家で食べて帰ってきたから、母親や姉に呼び止められることもなく自分の部屋に向かった。

パソコンを立ち上げ、いつも見ているサイトの更新をチェックし、『ユグドラシア・オンライン』の攻略情報を少し探すと、インターネットから切断した。

八時になつたら、また三人でログインすることになつていてる。

部屋にある時計を見ると、もつもろの時間になるといひだつた。
ベッドに横になると、ベッドギアを装着し、ディスクを挿入する。
ウイーンという音がして、内蔵されたコンピューターが起動した
のがわかる。

「なんだかいつもよりも時間がかかるな・・・」

そうつぶやいた時、作業が完了したらしく、僕の意識は闇に包ま
れた。

そしてついに、悲劇へのカウントダウンが0になつた。

▽▽のゲームでの死は 現実世界での 死を 意味する▽

▽元の世界に 帰れるのは 三万人 だけ▽

<では、お休みなさい。よい幻想を>

何もない、まっ暗闇の中で。

そんなテロップが、禍々しい赤色で表示された。

テロップが消えた瞬間、僕はまた意識を失った。

第一章 Act 1 幻想の牢獄（後書き）

最後の方時間飛ばしました。

次回から事件が始まります。

では、感想等お待ちしております。

Act 2 テスゲームの始まり

今度こそ僕は、宿屋で眼を覚ました。でも、さつきの異常のことば、しつかりと記憶に残っている。

ふと横を見ると、他の一人もログインしていた。クラウドは首をかしげて、「セーラは何かに驚いたような表情をしている。

「一人とも……さつきの、見た？」

恐る恐る問い合わせてみると、一人は同時に、じつへつとうなずいた。

何とも言つていないので、いつもすぐに反応できるつていうことは、疑いようのない事実だということ。

「なんなの、あれ……」このゲームでの死は、現実世界での死を意味する。元の世界に帰れるのは三万人だけ。では、お休みなさい。よい幻想を。だつたつけ? どういう意味?」

「さあ……とりあえず、今は違和感がないだろ? 特に実害はないんじゃないかな? ただのイベントとか」

クラウドが、あえて楽観的な意見を述べるが、この場を支配している重い空気は払えない。

「なあ、一端ログアウトしようぜ。何かおかしいことがあるなんなら、戻ればいい。ただのゲームなんだしな」

僕も、なんとなくさつきから嫌な予感がぬぐえない。

クラウドが、ログアウトのために行つたん眼を閉じる。

普通ならこれで、だんだんとプレイヤーの身体が薄れていって、しまいには見えなくなるんだが・・・。

今回は、少し事情が違い、数十秒がたつても彼の身体は実態を保つたままだった。

「ロ・・・ログアウト、できな?」

「・・・・・・・どうやらもうみたいだな」

クラウドの眉間に、深々としわが刻まれる。

「じゃあ、もしかして本当に、あたしたちは・・・」

「といふことは、よく小説にありがちな・・・」

「おそらく・・・」

前置きは二人とも違うセリフ。でも、思つてこむことは同じ。

「「「この幻想世界から出られない!」」

「おい、運営!なんなんだ、さつきのは!」

「ログアウトできないぞ!どうなつてゐんだ!」

「ゲームオーバーが死につながる?どういふことだよ、おこ!」

僕たちはとりあえず情報が欲しきため、宿屋の外に出てみると、

半ば予想通り、大パニックが起きていた

た。

僕が今思っていること、それは「そういう、このゲームもネット回線使つてゐんだったな・・・畜生、このことか！」だ。

そういう事情を知つていて、仲間が一人、一緒にいるからこそ、僕たちは落ち着いていられるのかもしねりない。

「やつぱり、僕たちだけじゃなかつたみたいだね」

「ちつ、そうみたいだな。脱出できるのは『三万人』ね・・・」「とんでもない事態になりそうな予感がするわね」

今、ここに何人が捕らえられているのかはわからないけど、何者かが「三万人しか生き残れない」っていうなら、少なくともだれかが殺されることになる。

「今のうちに、レベル上げに行っておいた方がよさそうだな。PKに合つてしまわないように」

今僕は、結構な特権を持つている。

そう、滅茶苦茶おいしい狩り場を三人占め。

でも用心する必要はある。

確か、テストのテスターは五千人。

彼らは高確率で生き残れるだろうけど、代わりにさつと脱出しそうとして、他の人を殺しまくるかもしねりない。

「そうだ！シウェルさんに連絡してみよう！」

もしあの人がこっちに来ていれば、強力な味方になつてくれることは間違いない。

フレンドリストを開いてみると、「クラウド」「セーラ」「その他」

も、ログイン中の人気が何人かいた。

レベル上げの途中で知り合いになつた人たちで、一緒に水精竜を買つたりした仲間だ。

そして・・・

「いた！ シュエルさんもこつち来てる！」

「本当か！ よし、今すぐ心話しそう！」

僕が連絡するから、必然的にクラウドが、セーラにシュエルさんについての説明をすることになる。（初めて水精竜とたかつた下りが、どうなることかわからぬけどね）

『もしもし？ シュエルさん？ 大丈夫ですか！？』

『あア、この可笑しな事件のことです力。私は大丈夫ですヨ。なあに、始めたばかりの初心者ぐらい、何人集まろうが余裕で蹴散らせます』

まるで今戦闘中みたいな言い方が引っ掛かるけど、無事ならよかつた。

『良かつた。今から合流できぬい？ どこにいる？』

『君たちには到底来れないようなダンジョンですヨ。私が今から帰還呪文で戻ります。『シドの酒場』・・・分かります？』

『分かります。僕たちも待ち合わせによく利用しているところですから』

『よし。目の前の雑魚どもをかるーく蹴散らしちゃいますから、ちよつと先行つて待つててくださいネ』

うーん、俗に言う死亡フラグを立てられても困るんですけど。でも、あの人なら大丈夫だろう。

シウホルさんが負けるところなんて、想像もつかない。

『「ちょっと野暮用ができたんで、お遊びは終わりでス セヨウなら。
ダイヤモンドダスト
金剛氷塵』』

『え？ ちょっとシウホルさんつて魔法使えたの！？』

場違いな質問とわかつても、言わずには居られなかつた。

が、心話の向こうで「うわあっ！」とか「ちょっと、これはないわー！」とか、「助けておかーちゃん——ん」とか、何人かの悲鳴が聞こえてきた。

最後のに「いまどきあんなセリフ言う人いたんだあ……」つて若干引いたけど、何が起きているのかは想像がついた。

『「ちょ、シウホルさん？ 相手死んじゃうんだから殺さないようにな？」』

『「いやあ、これで本当に死ぬのかどうか試してみるのも大事かと思いますガ・・・分かりました。命はとらないであげまス』

最後に、そんな甘い考えではダメですヨ・・・という声が聞こえてきたけど、僕はあえて聞こえなかつたふりをした。

男たちの悲鳴を最後に、ブチッと音を立てて心話が途切れた。

「二人とも！」シドの宿屋に行くよ…」

「ん、了解！・・・辺りに気をつけてな。セーラ、回復呪文がすぐ使えるように準備しておいて。リュウヤは防御が紙だから、透明移動 を発動しておいたほうがいい

「わかったわ

「確かにね。透明移動 ！」

僕の身体は、フレンド登録している人、今はいないけギルドの

メンバー、パーティのメンバーには半透明に、他の人には全く見えなくなる。

後、足音や気配を消せるかどうかは、本人の技量次第だ。

こうしていると、どこかの額に稻妻形の傷持つた、魔法少年の気持ちがよくわかる。

ピロリンッと言つ効果音が頭の中に響いて、メールの着信を知らせた。

【送信者：クラウド

件名：無し

本文 …これから、目的地に着くまではこうやって会話しておいた方がいい。声だけ聞こえてたら怪しいからな。ちょっと面倒くさいけど

さすがクラウド。

こういう時には本当に頼りになる。僕も思いついたことだな。

【送信者：リュウヤ

件名：無し

本文 …了解。まあもうすぐ目的地だけど

すかさず返信を送り、僕はまた歩き出した。

それに街中には、「衛兵」と呼ばれるレベル120のNPCがいて、非戦闘区域の街中で戦闘行為をした者を、その場で殺して、復活地点に送り返す役目の人人がいる。

このゲームで、最高レベルの人でも、きつぎり負けるっていう強さを持った衛兵たちがいるおかげで、街中での僕たちの安全は守られている。

正直、レベルの低い僕たちじゃなくて、「メインのストーリーは、こいつらが進めればいいじゃん?」とか思つたりもしなくもないけど、そこはまあゲームだからね。

実際、特に誰かに襲われることもなく、僕たちは何事もなく『シードの酒場』に辿りついた。

僕も 透明移動 を解除すると、ゆっくりと木製のドアを開けた。

すると既に、白髪で僕と同じ赤色の眼をした、シウホルさんが文字通り「テーブル」に座つて、手を振つていた。

さすがに高レベルなだけあって、装備も見事なものなのだが、ちぐはぐ感が否めない。

だつて、「全身鎧」に「魔法の杖っぽいの」つて、どう考へてもおかしい。

魔法使いと言えば、軽装なのがオンラインゲームの常。

そして、これまたすごく似合つて、剣と杖が交差して、後ろに盾が描かれた、口ケット付きの金属製のネックレス。

「……どこに座つてるんですか？」

「え、会つていきなりつっこむの?」

ふー。落ち着け僕。

多分、結構な緊張で、疲れた脳がこいつら形で息抜きを求めたのかかもしれない。

そう思つてこしよつ。

「まあまあ、座つてください。ああ、もううん『椅子に』です!」「分かつてますって。そんなとこ座るの? 小さい子どもが貴方ぐらいです」

さらりと返すと、僕らはそれぞれ、シウエルさんが乗っているチーブルの椅子を引いて座った。

何気に、四人席なため人数がちょうどいい。

「で、いつまでそこに乗ってるんですか、シウエルさん」

「堅苦しいこと言わないでくださいヨ~」

「引き摺り降ろしますよ」

繰り広げられるクラウドとシウエルさんの漫才は、見てて面白かつたけど、いつまでもこじりして和んでいるわけにはいかない。

不毛な言い合いを続ける一人を止めると、僕は本題を切りだした。

Act 3 危険と差異

「シウホルさん、今回の事件、どこまで情報を把握してますか？」

ピタッと、騒いでいた一人が止まる。

さすがにこの話題を聞いて、ふざけていられるほど心に余裕はないようだ。

かくいう僕も、自分でこんなに冷静にいられることができ、物凄くおかしく感じる。

でも、他のあつとあらゆる異世界転移の小説より、僕たちはまだ恵まれた方だ。

VRMMORPGは、その中でも「生活」することができます。実際に物を食べることもできるし、安全などこころもある。

3万人しか生き残れない、という制限がなければ、普通に助けを待つて日々を過ごすことができないわけでもない。

制限があったとしても、街からでなければ安全と言つてもいい。つづかり者が、少しづつその数を減らしていくば、もしかしたら自分は楽して生き残れるかもしれない・・・という、淡い妄想を、希望と言つ名のオブラーントで包んで、後生大事に抱いていることもできる。

僕は、ネガティブ思考というわけでもないけど、そんな楽観的には考えることができない。

まず、ゲームオーバーになつた者を、リアルでも殺す、そういう方法がないわけでもない。

脳からの電気信号をいじくるのが、VRISなんだから、手を加えていない「脳から心臓や各内臓器官に送られる、生命維持のための電気信号」を、ちょっと遮断してやれば、そのまま死にいたる。強制ログアウト + 電気信号。この二つがあれば、強制ログアウト

で現実に戻つてみれば、心臓が動かなくて死亡。

そして、もうひとつ。

「この事件の後と前で、「『ゴグドラシア・オンライン』の設定はいじられていないのか?」ということ。

ここまで疑り深いのは、このメンツの中では僕だけだらうけど、「自分たちで確かめたこと以外、保証できることは何にもない」のだから。

「うーん、情報交換です力・・・なら、こちらからも一つ、条件を出させてもらつていいですね?」

僕は、シウエルさんが考え込むよつこ呟いたおかげで、思考の海から戻つてきた。

「どうぞ、あまりにも無理なものでは無ければ

パチパチと、僕とシウエルさんの間で、火花が散つた気がする。

「まあ、君たちにとつても悪い話じゃないと思いますガ・・・」
そう前置きすると、少しクラウドやセーラをちらつと見ると、深々と息を吐き、しつかりと僕の眼を見据えて言つた。

「三人とも、私のギルドに入つてください」

「はい？」

「別に・・・想像してたよりは良い話じゃないか。シウエルさんがギルドマスターだつたつてのは驚きだけどな」

「ギルド? なにそれ」

反応は、三人とも異なつていた。

一番落ち着いていたのは意外にもクラウド。

「シウエルさんがギルドに入つているつて知つてたの？」

「当たり前だる。ギルドに所属しているのを示す、ネックレスがかつてるじゃないか」

「え!? あれそういう意味があつたの?」

初耳だ。

もしかして、アレをデザインしたのもシウエルさんだらうか。ずいぶん似合つてるなーとか、これ作った人センスあるな とか思つてたけど、それが音を立てて崩壊していく気がする。

「なんとなーく、物凄く失礼なことを考えられている気がするんですけど。私はこんなのを作つた覚えはありませんし、製作者にもう少し良い柄のにしよう、と言つたんですが・・・急げしらえなもので、これぐらいしか思いつかなかつたそうでス」

「でも、初めて会つた時はつけてなかつたよね?」

「当たり前です。ギルドを作ったのは、ここに閉じ込められてからなんですか？ で、入るんですか、入らないんですか？」

もう少し詳しく述べ話を聞かせてもらひたけど、要約すると、ギルドやらシウホルさんの知り合いや、またその知り合い・・・とこう風に仲の良い、信じられる者だけでギルドを作つたらしい。

この良くわからない状況の中、一人で対処するより、何人かで集まつて行動した方が何かと便利だらうし、PK対策等も練りやすい、つていうことだ。

なら、ためらう理由なんて、どこにもない。

他の一人も同じ意見だつたよつて、視線を合わせただけで、ゆつくつと首を縦に振つた。

「いやいや、よろしくお願ひします。入させていただけると嬉しいです」

そういえば、クラウドには「クリティカルメイド」の特技があるんだつた。

そして、セーラは、あまりこのゲームにおいてその数が多くない、回復職。

・・・・・このメンツじゃ、僕が一番いらな子じゃないか・・・。

「うんうん、これでこれから条件はおしまいでス。今からギルドに招待するので、承諾してくださいネ」

シウホルさんが言い終わるなり、パッと目の前にウインドウが開いて、「シウホルさんからギルドに誘われています。承認しますか

？』という文面が現れた。

一瞬もためらわずに、YESのボタンを押す。

「良かつた。では、なんなりと質問してくださイ。分かってる」と
なら何でも教えます『』

「じゃあまずは一つ。シウエルさんはいつからここに閉じ込められ
ていたんですか？」

そう、さつきの言い方だとまるで、結構前からこの『ユグドラシ
ア・オンライン』の世界から出られなくなっているみたいだつた。

「えーと、確か現実世界で4月8日の正午にログインしましたが、
それ以来新しく入ってきた人も、前からいた人も、ログアウトでき
たっていう話は聞いてませんネ。おそらく、その正午からこの事件
は始まつていたと思われマス」

「だから、シウエルさんは心話の向こうで、PKに襲われていたん
ですね。なるほど、何でこんな早くから？と思つてたけど、前から
いて、『三万人しか生き残れない』って知つてる人が他にもいれば、
レベルの高い人から、大勢で潰そうっていう人の心理は理解でき
ます」

あれ？でも、確かサイバーテロの噂があつたのは、夜からじゃな
かつたつけ？

「そんな噂は、私も聞いていませんネ・・・」

「まあ、分からぬことは置いておいて、次は俺からの質問だ・・・
シウエルさん、今この世界に、だいたい何人の人がいるとか・・・
分かりますか？」

「それは分かりませんネ。数える手段がありませんカラ」

確かに、ゲームのときからいじられていないなら、設定上はこのゲームの舞台は、日本のおよそ三分の一の広さがある国。

ユグドラシア大陸には、今後新しい国がアップデート」とに追加されていくことになつていた。

「でしょうね。僕からの質問は次で最後です・・・。『ユグドラシア・オンライン』と、この世界で違うところはありますか?」

僕が聞くと、「お、いいところに気がつきますね」とでも言いたげにやりと笑うと、まず第一に、と指を折りながらシウエルさんは口を開いた。

「大きく違うのは、『戦闘方法』。HPとかMPとか、各ステータスは一緒でも、アーツの出し方などがぜんつぜん違います。・・・いわば、『制限なし』の状態で、『再発動待機時間』(リキヤストтайム)ありませんし、早口で詠唱すれば、魔法も短時間で発動できます。そして、もしレベル1の初心者でも、元の世界で剣道の心得があつたりすれば、セーラさんぐらいなら倒せるかもしれません」

「うわ・・・魔法系のスキルを上げておいてよかつた・・・」

火力が高くて、詠唱時間と再発動待機時間が長いのが魔法だったけど、デメリットが全て帳消しになつている。

「もちろんそれだけじゃありませんヨ。落とし穴みたいな罠を作つて設置しておくこともできれば、『銃使い』の弾薬を、爆弾代わりにして一斉に起爆することもできまス。どうやらこの状況を作り出した存在ハ、デスゲームにあまり時間をかけてほしくはないようで

ス」

「確かに、これだけ改変されたら、それに気づかなかつたり、適応できなかつたプレイヤーは、早々に脱落することになりますね」
ふうう・・・と、特大のため息をつくと、まだあるんですね、と言いたくなさそうに、でも毅然としてシウエルさんは、僕らに告げた。

「それもそうですが、一番違うところは、『安全地域がなくなつた』ことですね」

「「「えー...」」」

Act 3 危険と差異（後書き）

よくわかる解説

ギルド・・・ゲームの世界にある、会社みたいなもの。

同じギルドに所属しているメンバー同士で、狩りに行つたり、チャットをしたりして楽しむことができる。

Act 4 幻想の脱出者

「先ほど、街の中でPKに遭いましたが衛兵は来ませんでシタ。戦闘禁止区域での戦闘が可能になっています・・・。聞いた話によるど、初心者向けエリアにも、高レベルモンスターが出現し、しかも全てのモンスターがアクティブ化・・・こちらを見つけ次第襲つてきまス。どうやらこの事件を起こした人・・・もしくは人々は、何があつても私たちを殺し合わせたいみたいですね」

「それはまずいですね・・・。まだみんなレベルが低いから、何も知らないときに、高レベル者に街を襲撃されたりしたら、相当数の人が犠牲になります」

「で、君はどうするつもりなんですか？この世界でおびえながら生きていきますか？それとも、テストからプレイしている人に喧嘩を売りますか？それとも、ひたすら自分が元の世界に帰ることを目指しますか？厳しいですが、『誰も殺さずに自分は元の世界に帰る』なんて、甘い考えは捨ててください」

「うつ・・・と僕はとっさに返事ができなかつた。

完全に正論なシウエルの言葉は、僕からすべての反論の語彙を奪つていた。

「ですが、まあ私のギルド、幻想の脱出者《ファンタジー・エスケープ》では、自分からPKを仕掛けることは禁止しています。もちろん、正当な防衛や誰かが襲われているのを助けたりと言つた、正当な理由があれば話は別ですがネ」

「・・・・・そうですね、僕たちが甘かっただみたいですね。いわゆるPKKのためにには、まずは、戦闘訓練を兼ねて、レベル上げに行
ブレイヤー・キラー・キル

つてこようかと思いますが・・・それでいいよね、一人とも？」

「モチのロンだぜ」

「当然よ。あたしだって死にたくはないしね」

「一人とも、全く迷わずに即答した。

やつぱり頼りになる仲間たちだよ、本当に。

「その前に、幻想の脱出者 の他のメンバーに合流することは可能ですか？挨拶と、他と一緒にレベル上げに行ける人を、後何人か追加で募集したいのですが」

横では、クラウドとセーラもうんうんと頷いている。

というか、一人とも何かシウェルさんと話しそうよ！

「すみません、紅茶を一つお願ひします。まだ合流は難しいですね。後三時間後ぐらいに、皆がこの町に揃うと思いますので・・・それまでは、私が同行します。少しレベルの高い所に行きます）。その方がPKに遭う確率も減りますカラ。そしてここは酒場ですよ？何か注文しないと迷惑でス

「紅茶がいいかな」

「俺はコーヒーで」

「あたしも紅茶で」

「この世界では酒を飲んではいけないなんて法律はないけど、日本で育ってきた僕らは、まだ未成年なために、酒を飲む気にはなれない。い。

「酒場に来て注文するような飲み物じゃありませんよね・・・人のことは言えませんけど」

「うぬせこですね。僕らはまだ全員未成年なんですよ。こぐら日本と違つてそんな法律はないとはいへ、到底そんなアルコール類は・・・」

「あ、そうだここでは禁止されてないんだつたつけ。店員さん、赤ワインも一つ追加でぶつー！」

迷わず、僕とセーラはそれぞれクラウドの頭と頬を張り飛ばした。スパーーン！といい音が鳴つて、クラウドの頬にはもみじ型の赤い痣ができた。

「未成年の飲酒禁止には、アルコール依存症になりやすいっていう立派な理由があるんだよ！それはいつの世界でも変わらないんじゃないかな」

「赤ワインより白ワインの方がおいしつていうのは常識じゃないのよー。」「つづじむといふやうなのー？（かよー）（ですか？）」「

ひとしきりワイワイと騒いだ後、さきに頼んでいた紅茶とコーヒーが届き、それを飲み終えると、僕たちはシドの酒場を後にした。

「で、どう向かうの？」

「【カベルネ・陸の孤島】…………そう、私たちが解放した、
あの新エリアでス。北や南の新エリアはレベルが50とか60で、
西側の方に至つては、新エリア前のボスが倒せていないそうですか
ラ。前からあるエリアのレアアイテムは取りつくされていりますガ、
陸の孤島なら、君たちに合つたレベルの強力なレア装備もドロップ
するかもしだせん……」
「あ！すっかり忘れてた！」

装備と言えば、クラウドは『クリティカルメイド』の製作が可能なんだった。

まだ熟練値やスキルポイントが足りないから、特殊効果付とかはできないけど、純粹な付加効果なしの装備なら、かなり強力なものが作れる。

「クラウドは、『クリティカルメイド』の製作が可能です。おそらく、全ての武器や防具のを、ね」

視線によるやり取りによつて、何故か本人でなく僕が言わされると、証拠として僕は「マジカル・シルバーロッド」を、クラウドは「アクセル・アイアンソード」を見せた。

「これはこれは・・・凄いものですネ。後でまたこれをお願いします」

そう言つて差し出されたのは、「金剛石」の塊。

所謂ダイヤモンド。

「もちろんっ！そして俺にも余った素材はもらいますか？」

「どんどんどうぞ～」

がしつと握手を交わす二人。

そんな一人を、僕とセーラは生温かーい目線で見つめた。

「もう一度確認しておきますが、今回の目的はレベルと熟練度上げ。もし途中でPKに遭つてゐる人を見つければ優先的に救助、自分がPKに遭つたら、問答無用で返り討ち・・・つてことでいいですかね？」

「もちろん・・・敵のレベルが45つてこののはびつかと思こます
がね」

僕がLV30、クラウドがLV25、セーラがLV20。
シウエルさんはなんと100LVに達しているとはいっても、こので
こぼこPTで上手く45レベルのモンスター相手に立ちまわるとは
あまり楽観的に考えない方がいい。

それにしかも、ゲームとここでは、どこがどれぐらい変わっつい
るかわからないのだ。

敵が異様に強化されている可能性も考えなくてはならない。

「大丈夫ですヨ多分。いざとなつたら私が救出に行きますから」
「頼りにしますよー。セーラ、回復頼むね」
「まつかせなさいー」
「できるだけシウエルさんに頼らなくとも済むよう頑張るぞー！」

ひつして、僕たちの壮絶な死合いは幕を開けた。

Act 4 幻想の脱出者（後書き）

短くなってしまったすみません（汗）

感想、ポイント評価等いつでもお待ちしております。

Act 5 聖光十字の四重奏

田の前に広がる、周りを森に囲まれた大きな広場。数人の人が、一心不乱に敵を狩っている。

いかにも何か出てきそうな雰囲気の中、今いる敵は、グレイトサラマンダー「火蜥蜴」。

通常の27レベルの火蜥蜴の10倍はあるかというくらいの巨大なのが、ばら売りのジャガイモよろしく転がっている。

名前からもわかる通り、おもに火を噴いて攻撃するモンスターだが、普通に打撃攻撃を食らつただけでも相当HPが削られるかもしれない。

「では、行きます!」。間違えて誰か殺してしまわないように、気をつけてくださいね。どうせ常にアームモードになってるんでしょうから

「それ、滅茶苦茶あり得ますね」

小型の拳銃を構えたシウエルさんを見て、僕もゆっくりと杖を構えた。

今の僕の装備は、「深遠なる永夜の杖」。

レアドロップのこの杖には、INT+10、魔法攻撃力10%アップの効果がある。

見た目は、漆黒と紫の模様に包まれた、終製。長さはちょうど身長と同じぐらいだ。

クラウドやセーラも、両手剣と片手杖をそれぞれ使いやすいやうに構えている。

全ての気配を断ち、僕はこいつそりと一番近くにいる敵の背後に回る。

ほぼ同時に、シウエルさんのアーツが発動した。

「クラスター・レイン」

上空に向けて、一回引き金を引く。

放たれた赤い弾丸は、空中で幾つにも分裂して、辺りにいる巨火蜥蜴に突き刺さる。

予想通り、一斉に十数匹もの巨火蜥蜴がシウエルさんたちの方を向いた。

火を吐くのもいれば、見た目を裏切る敏捷さで体当たりをかまそ
うとしている奴もいる。

が、おそらく狙い通り、僕たちに近づいたのは間違いない。
ここなら、広範囲にわたる魔法を使おうと、誰かを巻き込む心配
もない。

「今の動きを見たところ、別にプログラムから解放されて、敵の頭
がよくなつたりしたわけではないみたいだね。 エターナルフレア

」

リキヤストタイムがよくなつたおかげで、次々と魔法を発動でき
るようになつたため、全ての巨火蜥蜴に一回ずつ、継続ダメージを
与える。

揺らめく高温の炎が、巨火蜥蜴の身体を包む。

「目には目を。 齒には歯を。 炎の敵には焰の魔法を！」

「バカなことを言つていないで、さつと倒すの手伝つてください。
強化されてるのが敵だけだと思ってるんですか？」

慌てて前に目を戻すと、巨火蜥蜴の口が、こちらを向いて大きく

開けられている。

その口から、『コウツ』という音とともに、一直線に僕めがけて火炎が放たれる。

「甘い！」迅雷、万物を超える速度をもつて、我に害なす輩を撃滅せ。 ライトニングビーム『！』

突きだした杖先から、高電圧をレーザー状に収束させた光線を放つ。

眩しい残光を煌めかせながら、火炎と雷撃が衝突する。
が、火が広範囲を高火力で殲滅する魔法なら、雷は一点に全力を込める、貫通力と攻撃力が高い魔法。

「ちょっとだけ分が悪かつたね！」

拮抗していたのはほんの数瞬だけ。

すぐに雷撃が火炎を打ち破って、僕に向かつて攻撃を放った巨火蜥蜴に直撃する。

「『世界の断りを捻じ曲げ、何人も防ぐことが叶わぬ一条の浄化の槍と化せ。 グラン・サンダーフォール』」

スキル【高位雷系魔法】のアーツ。

大気中の電子を敵の上空に集め、其処から激しく輝く剛雷を落とす。

轟音や閃光を伴った光が、密集する巨火蜥蜴の中に放たれる。

もちろん、敵の方がレベルは上。これだけで倒せるほど甘くはない。

それに、僕の無音移動も解除されている上、防御力はまだまだ紙

だから、狙われたらひとたまりもない。

「クラウド！ 今だ、いけ！」

「任せろ！」

一気に間合いを詰めようと踏み込んだクラウドによつて、全長一メートルぐらいの長剣が振り降ろされ、赤いエフェクトが弾ける。僕に攻撃をしようとしていた巨火蜥蜴が、次々と標的をクラウドに変えている。

シウエルさんが完全に傍観者モードに入っているため、前衛はクラウド一人。

セーラが付いているとはいえ、油断はできない。

「どうした！？ レベルだけか！ グラビティ・ストライク」

移動速度減少効果付きの、上空から重力を利用して剣を叩き込む一撃。

「僕がトドメ行くよ！」光の加護を受けし聖神の怒りをここに！ 必殺の意を込めて贈る。 聖光十字の四重奏ホーリークロス・カルテット『』

現在、僕の中で最高火力を誇るアーツ、【聖白魔術】スキルのホーリークロス・カルテット。

まず、辺りを飲み込む白い光を発生させ、防ぐ間もなく小さなダメージを与える。

一回限りの効果を持つシールドなどを消し去り、時間経過による防御術までも無効化する。

そして、対象を交点にして白く太い光線が車線上の敵を焼き尽くす。

最後にとどめとばかりに、上空に魔法陣が浮かび、アーツ発動からダメージを受けた敵全てにぎりぎり当たる程度の太さの光線が降り注ぐ。

四つの攻撃を一つに合わせた魔法だから、カルテットと名付けられた。

だとしたら、演奏している曲はおそらく、敵を冥界へと送る鎮魂

歌になるのだろう。

「いがほしゅう! あかほりが・・・」

よくわからない叫び声とともに、HPバーをぎりぎりまで減らしていった巨火蜥蜴たちは、粒子に還った。

「おし！レベルアーップ！」

儀毛

僕は一気にレベル35に。パーティのステータスを確認すると、クラウドは32、セーラは27になっていた。

ス kill ポイントは計十五分温存。
レーベンハーゲルホインエ（田中）をアーティアリに振り

今使えるアギルは【初級雷系魔法】と【中級火系魔法】【高位雷系魔法】に【高位光系魔法】。もちろんそれに加えて【暗殺者】。初級雷系魔法や中級火系魔法には、もう役に立ちそうなアーツはない。

今上げているのは、高位魔法系の一つ。

暗殺者スキルからは、
「無音移動」、「透明移動」、「加速者」、「急所適殺」の4つを覚えている。

最近
知つた
ことだが、
魔法にもクリティカル判定はあるらしく、
最後の常時発動型アーツ「急所適殺」によつて、通常なら出にくい
クリティカル率を底上げしていふ。

その上、ケリテイガルビツ工の時の上れるタメーシカモラに11

でも、次に【究極○系魔法】のスキルが使えるようになった時の
ために、SPは温存していた方がいい。

そう思つたが、35～スキルの一つ、【常態強化】に目を止める。これは、もともとのステータスや、パッシブアーツの効果を一定時間だけ引き上げることができる物。

その中で、一番弱いアーツ デュアルバッシュアーツ 多重常態呪文 を取得することにしていた。

これは、パッシブアーツの効果を、任意の時間だけ3倍にする物だ。

ただし、使うと時間経過とともにMPが削られていく。浮かんできたウィンドウを意識で操作すると、チャツチャラ～ffと新しいアーツの習得を教える効果音が鳴った。

同じく、近くの樹にもたれて座っていたクラウドの操作も終わつたようだ。

ゆつくりと、剣を杖代わりにしながら立ち上がる。

「よつし。後何回か行くか！」

「分かったわ。ちょっと支援呪文掛けるから、動かないでね」

セーラが何か魔法陣を描くと、僕たちの身体から紅白それぞれの光が立ち上つた。

「MPの自動回復と、攻撃、魔法攻撃力の上昇よ。頑張ってきてね」「三人とも、私のこと忘れてませんか？こんな所より、もう少し奥にさらに効率のいい狩り場があります。そこに案内しますヨ」

何となく嫌な予感がするが、僕らはシウェルさんについて、奥へ奥へと歩を進めて行つた。

その先に、何が待ち構えているのかも知らずに。

Act 5 聖光十字の四重奏（後書き）

主人公が若干チートっぽくなつてきましたね・・・。
30レベルで使える技にしては強すぎないか！？等という疑問があるかもしれません、作者の中では、「強いけど消費MPが半端なく大きい技」としてアリにしています。

どうかお許しください。

Act 6 魔術縦乱（前書き）

すみません！！！！！一回分飛ばしてました！

申し訳ありませんでした・・・。

なお、ストックが尽きかけているので、不定期更新気味になるかも
されませんがお許しください。

執筆は頑張りますので。感想等お待ちしております。

Act 6 魔術練乱

歩き始めたころから感じていた嫌な予感が現実のものとなるまでに、そう長い時間はかからなかった。

「「「げ」」」

ズシン、ズシンという地響きの音が聞こえてくる。歩くだけで思わず耳をふさぎたくなるほどの大好きな音を鳴らすのだから、巨火蜥蜴とは比べることすら許されないような、相当な巨体の持ち主に違いない。

「えーっと、もしかしてシウエルさん？あの、でたらめな音を鳴らしている敵に挑みに行くんですか？」

それだけは勘弁してくれ、という思いが、クラウドの口にした疑問に染みわたつている。

が、それに気付いていないのか気付いていながら黙殺したのか、シウエルさんの返事は簡潔だった。

「モチロン。他に何があるつていうんですか？」

「・・・・・はあ。で？敵の名前と強さと攻撃方法ぐらい教えてくださいよ？」

「敵は＜巨人獣兵＞。もつ分かる通り、一部の例外を除いて、この辺にはサイズが大きいモンスターしかいません。巨体ゆえか動きは鈍重。魔法耐性は高いですが、打撃攻撃はかなり有効でス。ただ、攻撃範囲と威力が高いため、一撃でも喰らえば、リュウヤ君とセーラさんは、即死でしょうネ」

「それって僕と相性悪すぎでしょ！」

「「そんな物騒な敵の前に連れていくなよー（かないでよー）」」

クラウドとセーラも叫ぶ。

ゲームと違つて、これは一度でも死ねばその場で人生が終了の、デスゲームだ。

PKに遭つて殺られるとかならまだともかく、不相応なモンスターに倒されるなんて屈辱すぎる。

「・・・ですが、経験値は先ほど狩った巨火蜥蜴三〇体分・・・どうです？効率がいいでしょウ？再出現までの間隔が短いため、何匹も連續して狩ることが可能でス。しかも！リュウヤ君には・・・特別に、パーティを組んで同じエリアにいれば経験値が入るシステムを利用した、個人任務があります！」

「ななななんだつて――！」

滅茶苦茶経験値いいじゃないか！つて驚くところ違つた。個人任務！？

「さらに少し奥に行つたところに、アーヴィング闇魔賢者アーヴィングがいます。それを狩つてきてほしいんですヨ。一人で」

「上手くいくわけないだろうがあああつ！」

「そうすればセーラさんやクラウドさんの負担も減りますシ、はつきり言つて要らん子な君の時間を有効に活用できまスッ！」

ぐつと拳を固めて力説するシウエルさん。

それを見て、クラウドとセーラがアイコンタクトで対処を決定した。

「「行つてらっしゃーい」「

「裏切り者おッ！」

「まあまあ落ち着いて。『闇魔賢者』はその名の通り、もともとは人間だった者が、闇の魔法を行使して悪魔の力を得たとされているボスでス。が、43レベとはいえ魔術系の敵。装甲は紙ですし、HPも多い。攻撃を受けなければ死ぬことはありません。他の三人と違い、リュウヤ君なら、勝てますヨ」

「その間、シウェルさんは何をしてるんですか？」

納得したわけではないが、まだ何かシウェルさんが口にしていい裏がある気がする。

僕が疑惑の色を載せて、じっと彼の眼を見つめると、怪しげにふつとほほ笑んだ。

「『巨人獣兵』の討伐の方に参戦しておきまス。はつきり言って、危険度でいえばリュウヤ君の方が楽ですヨ。AGIを上げてるんだから。ですがまあ、これだけは貰つて行つてください。スケーブドール代替人形」

「

ポンッと投げ渡されたのは、ウサギにピロロの服を着せたような感じの、どこか禍々しいぬいぐるみ。

なるほど。ゲームじゃないから、アイテム交換の過程も省略されているのか・・・じゃなくって！

「なんだこれ？」

「時機に分かりますよ。分からぬ方がいいのですがネ」
謎めいたセリフが僕の耳に届くか否か、というタイミングで、ひょいと軽く襟元をつかみ上げられると、そのまま僕の身体は宙を舞つた。

「行つてらっしゃーイ」

「シウエルううううううッ！帰つてきたら一回殴つてやるうううううううう！」

空中で回転しながら飛んで行つてゐるせいか、声にエコーがかか
る。

「そんな死亡フラグは立てない方がいいですヨ～」

ひらひらとハンカチを振つてゐるシウホルさんを見て、僕は一発
どこのか、三発ぐらい魔法を当てることを決意した。

が、ぐっと拳を固めた途端に身体が落下を始める。

下には、シウェルさんたちのいる方角を睨みつけている黒いフー
ドの人型モンスターが。

意識を向けると、それはく闇魔賢者 LV43 AREA BOSS

S>

「ええい！男は度胸、先手必勝！ フラッシュ 無音移動！」

覚悟を決めると、モーションによる発動が可能となつた、詠唱な
しの魔法を発動する。

フラッシュは両手をパチン！と叩わせて柏手を打つ、無音
移動は左手の指を鳴らすと発動するように登録した。

ちなみに、あまり使わないけど 透明移動は逆に右手の指を鳴
らすと発動するようにしてある。

ひとつしてまとめてみると、魔法だけが強化されてるようだと思える
けど、武器系のアーツは、連続発動が可能になつていて。

たとえば、十字型に切り払うアーツの後に、『横に切り裂くこと
で発動する』と登録してあるアーツを、タイムラグなしで使うこと
だってできるし、この場合、縦と横の切り裂く順番を入れ替えるこ
とだって可能。

じつしていくつかのアーチをつないでいけば、限りない剣舞で敵を追い詰めることができるのだ。

クラウドは今、田下これを練習中。

「『顯現せよ、永遠の炎。揺らめく影となり、敵を包め！ エターナルフレア』！」

閃光で田下をましをした後、地面に激突することもなく空中を走つて背後に回る。

そして、新しいアーチを発動しながらふと思つた。
こうして宙に浮くことのできる技を持つているのは、シウエルさんを除いて、三人のうち僕だけ。

それは、道を見張つている「闇魔賢者」に、地面に激突した際のダメージや音もなく不意を打つことげ出来るのは、僕以外にいないということでもある。

さりとて言つと、MPの都合上、気配のつかめない、姿も見えない敵にやみくもに攻撃を放つわけにもいかない魔法系の敵とは僕がかなり相性がいい。

まして、セーラによるMP自動回復の支援呪文がかかつている状態ではなあさう。

「つたぐ、そこまで考えてたんだな、あのタヌキ野郎は」

この世界に閉じ込められてから、つい口調が荒くなつていてる気がする。

まあ、それだけ自分でも自覚のないままに、緊張していたのかもしないけど。

立ち上った搖らめく炎を見ながら、僕は次の魔法の詠唱を開始する。

もちろん、出所を悟られないようなものしか使わない。

「『世界の断りを捻じ曲げ、何人も防ぐことが叶わぬ一条の浄化の槍と化せ。 グラン・サンダーフォール』！」

「『世界の断りを捻じ曲げ、何人も防ぐことが叶わぬ一条の浄化の槍と化せ。 グラン・サンダーフォール』！！！」

「『世界の断りを捻じ曲げ、何人も防ぐことが叶わぬ一条の浄化の槍と化せ。 グラン・サンダーフォール』ツ！！！」」

同じアーツを、何度も連續して発動。

これは、上空からの攻撃のため、自分がどこにいるかばれることはない。

「チツ・・・poiuytrewqikjhgfdsamnbvc
xz、闇夜の世界！」

何を言つているのか相変わらずわからない呪文の後、急にクリアな音声で魔法が発動された。

〈闇魔賢者〉の上空に、光の魔法陣を覆い尽くすかのように闇が広がる。

そしてその闇は、物凄い勢いで辺りを飲み込み、僕の視界を漆黒一色に染めた。

「範囲魔法！？でもまだ甘い！」

先ほど、僕が掛けておいた エターナルフレア は、明るい炎のエフェクトを常に伴つて継続ダメージを与える。

だから、外界からの光を遮断しようと、焰に包まれた本人の位地ぐらいはつかめる。

「『迅雷、万物を超える速度をもつて、我に害なす輩を撃ち滅せ。』

ライトニングビーム『』

言下に、眩しい閃光とともに高電圧のビームを撃ち出す。これだけやつても、‘闇魔賢者’のHPはまだ七割ほど残っている。さすがはボスといつたところか。

「qwertyuiopasdfghjklznxcvbnm!
イトメアスフアイ
闇の力弾！」
常ナ

魔法は発動した物の、辺りに異変はない。
不発か!?と思つていると、辺りにジユッという音とともに、焦げ臭いにおいが漂つた。

「うわっ！卑怯くさい技だな！」

漆黒の世界の中で、同じ色の弾丸を放つ。
攻撃を予測できないばかりか、どういう技かすらつかめない。
実際、一発だけのビーム状の攻撃なのか、連続的に弾丸を放つアーツなのか、とまだその全容は把握できていない。

「くそっ！ 多重常態呪文：アクセラレーター加速者！」

僕が開発した、他のオンラインゲームや、家庭用携帯ゲームにも登場する、「緊急回避」に似た技。
急増したAGIを活かしてその場から飛び退く。
予想通り、敵の放つた漆黒の攻撃が、先ほどまで僕がいたところに命中する。

「セーラがくれた支援呪文のエフェクトでこっちの居場所突き止め
てるのか・・・」

奇しくも、敵の索敵方法は僕とほぼ同じ。

そうとわかつても、MP自動回復や魔法攻撃力上昇の支援効果をなくすのは痛い。

「こりや、早めに決着つけないとな。『聖なる世界の創造主、 我の敵を束縛する光を！ ホーリーバインドローズ！』」

僕が使える、もうひとつ【高位光系魔法】アーツ。

輝く光で作られた棘のある茎が、
「聖魔賢者」の身体を締め付ける。

じわじわと少しずつHPを奪い、魔法発動からの経過時間が十秒に達した時、茎は蕾だった薔薇の花を咲かせ、儂く散る。見た目もかなり綺麗な魔法だが、このアーツの真価は、十秒の間に敵の動きを封じるところにある。

もつとも、常に飛んでくる弾丸の精密さは変わらない。もう、無音移動は解除してある。

位置がばれてるんだから、気配なんて隠しても、MPが減るだけ
で何のメリットもない。

「世界の断りを捻じ曲げ、何人も防ぐことが叶わぬ一条の浄化の槍と化せ。 グラン・サンダーフォール『！ ライトニング！

詠唱しながら魔法陣を書く、魔法の多重発動。

そういうや、フラッシュの「再発動待機時間」がなくなつたら、それだけでだいぶチートだよね。

フラッシュの場合は、「再発動不能時間」になるから、制限時間が消えないのかもしれないけど、それよりは、誰かが人為的に、無詠唱で発動できる攻撃魔法に関しては「再発動不能時間」を残した

と、こう方が可能性が高い。

つまり、今回の事件の裏には、コンピュータのバグやエラーなんかじゃなく、れっきとした人間がいるということ。

「無意識のうちに『事件』って言つてたもんな、僕も。『事故』だとは全く思つていなかつたし。でもこつ確実になると若干驚くなつとー。」

少し考へている間に、く闇魔賢者へは失明状態から回復したらしく、また漆黒の攻撃が放たれる。

僕の残りのMPと、敵のHPはともにおよそ三〇%。次の一撃で沈める！

「やつぱぱトドメはこれだな！『光の加護を受けし聖神の怒りをここに！必殺の意を込めて贈る。聖光十字の四重奏ホーリークロス・カルテット』『ロキミージナハブヤゴバツフカルダクセスニ！』インターチェフト・アン・アリア 詠唱妨害！」

シュイイインという効果音がして、僕の放った閃光が打ち消される。当然、その後の絶大な火力を誇る十字型の白光もない。

「ちつ・・・やっぱボスだけあつて、強力な切り札持つてやがつたつてか・・・？」

もうMPは尽きた。支援呪文による自動回復を待つしかない。が、そんな隙は与えないとばかりに、敵のさつきまでより長い詠唱が始まる。

「q a z w s x e d c r f v t g o b y h n u j m i k o l p r m k o n j i b h u v g y c f t x d r z s e a w q ダークネス・

アローレイン」

「すがががががががつー！という音と共に、上空から闇で造られた矢が、大量に降り注ぐ。

魔法障壁でも生み出して防ぎたくとも、そのためにはMPがいる。万事休すか・・・。

「ええい！やらないよりました！」

両手に握った杖を構えて、身体を前に倒して疾走する。強化されたAGIは、今回も遺憾なくその力を發揮した。腕を矢がかすめるが、致命傷には至らない。

「つおらあつ！」

闇魔賢者に近づくなり、僕は杖の柄を敵の方に向けて突きだす。支援魔法によって、物理的な攻撃力も上昇しているため、少しはダメージを与えるはず。

杖を槍や棍代わりにして、突く、叩く、殴る。

しかも、エターナルフレアの継続ダメージもある。

持ち前のAGIのおかげで攻撃のスピードは早いものの、攻撃力の低さが枷となって、なかなかダメージを与えない。

が、通常攻撃を加えると、その分少しづつMPが回復する仕様。

「qwertyuiopasdfghjklzxcvbmjふつ」

「残念でしたあ！」

接近すれば、詠唱を妨害するのに、敵が使ったような魔法は必要ない。

頬を殴れば問題ない！

「q a z w s x e d c ぶ」

満を持って、僕はアーツを発動した。

詠唱をしながら、パンツといつ音を立てて、
「闇魔賢者」の眼の前で両手を合わせる。

喰らえ、必殺最強猫だまし！

「 フラッシュ！ ライトニング 」

バリバリつといつ音と、閃光、爆音の三つが、至近距離で炸裂する。

自分の耳もおかしくなりそうだったが、何とか耐えた。

次の詠唱をしながら、大きく跳躍する。

AGIを活かして、三メートルほど飛び上ると、杖を振り降ろす。

そして、「闇魔賢者」が上を向いて詠唱を始めたのと同時に、僕は先ほどから唱えていたアーツを発動した。

「 ライトニングビーム ！」

ビームといっだけあつて、約一秒ほど、発射し続けるこの攻撃。
僕の放った雷撃は、まるで長大な剣のように、「闇魔賢者」の身体を真っ二つに焼き切った。

Act 6 魔術繚乱（後書き）

さて、今回書いて思つたんですが、毎回毎回詠唱の部分を「ペペ」と読みにくいくらいに書くと、読みにくいくらいに書くので、次からは、連続して魔法を放つ場合、詠唱を省略して書かせてもらうことになります。申し訳ありませんが、お許しください。

Act 7 パーソナルスキル

僕が「闇魔賢者」を倒した後、いくつかのことが連續して起こった。
アーツメイジ

まずは、レベルアップ。一気に38レベルになった。

そして、辺りが真っ白に染まり、水精竜のもとへ転移させられたときと同じように、足元から身体が消えていくような感覚を味わう羽田になつた。

さらには転移の直前。

僕のもとに、一人の男が駆けこんできた。

そして、男が僕に触れた瞬間。

一人まとめて転移することになつた。

「こ、ここは……？」

ふと気がつくと、辺りには夜の森の景色が広がっていた。

まだ昼だったはずだ。

それに、いかにも怪しい石碑や、祭壇に置かれた杖なんかない。
『起きたか。お前は、初めて「闇魔賢者」を独力で倒した者だ。よ
つて、その栄誉をたたえ、称号【闇殺の魔術師】を与える。パーソ
ナルスキルは、【聖生秘術】だ。武具「聖帝の蒼光の杖」もお前に
譲ろう。これからも精進するがよい』

「・・・は？」

頭の中に、声が響いた。

その声が聞き取りにくかったわけではない。
内容が、理解できなかつたわけでもない。

あまりにも信じがたいことに、思わずもれた咳き。

「パーソナルスキル・・・そうか、そういうことか・・・。あんの
腹黒タヌキいいいい！」

きつとシウホルさんは、このことを知っていたに違いない。

で、僕にパーソナルスキルを覚えさせようと、単身で闇魔賢者
'のもとに送り込んだ。

あのシウエルさんの怪しい笑みを思い出し、僕は思わずこぶしを
固めていた。

どうやら、三発ではなくその十倍、ぐらいは魔法攻撃を当てなければこの怒りは晴らせないようだ。

まあ、回避力と命中力の差で、全く当たらないし、当たったとしても蚊に刺された以下のダメージしか与えられないのだろうけど。もしかすると、痛覚が大分緩和されたこの世界では、それすらも無理かもしれない。

「おい！私を無視するな！」

「あー、くそっ！一刻も早くレベル上げて、あの人にまともなダメージを『えられるようにならないと」

「私の声が聞こえないのか！？」

「でもあの人の強さって、レベルだけじゃなさそうだよね・・・。
スキル + 戦闘経験の差もあるだろうしな」

「そ！こ！の！ひ！と！聞！こ！え！て！ま！す！か！」

「ま、別に悪いことじやなかつたしそう怒る」ともないか

あ？ それからわめいてるのは放置しておいていいのかつて？ もちろん。あんな怪しい輩はまともに相手しない方がいい。

「うひっ・・・私って・・・・グスツ」

うん。無視、シカトを決め込もう。

というか、さっさと帰させてもらえないのかな？

「こりあつ！ 人の話を聞けえええええええええええ！」

ズドッ！

氷でできていると思われる弾丸が、辺りにめり込んだ。ここまで来ると、さすがに無視もできない。

「どうしたんですか？ 僕に何か用でも？」

「やつと聞いてもらえたあ・・・じゃなくつて！ 私、道に迷つてあの辺りをうろうろしていたら、貴方を見つけまして。で、初心者なもので右も左もわからないから、街への教えてもらおうと思つて。後、ログインした時に変な文字列が表示されたんですけど、あれつて大事なイベントの予告か何かですか！？ それにここがどこかもわからないし、さっきからぶつぶつと独り言を言つてるので、どうしたんですか！」

「いや・・・聞いたの僕だけど、そんないろいろ並べたてられても」

何というか、今ので物凄く疲労感が増した気がする。

誰かがしゃべっているのを聞いているだけで疲れたのは、これが初めてだよ。ホントに。

「そうですか。もつ一回聞こなおしますね！」

「…………」

最早、つつこむ気力も失せた。

また目の前の女の子がしゃべっている間、僕は彼女の奇抜な風貌を観察していた。

まず、特徴的なのはかなり綺麗に整った顔。

いくらゲームの補正があるとはいえ、現実の顔が元になっているのだから、現実世界ではさぞかしモテていることだろう。

深い緑の長髪に、ライトグリーンの眼も、彼女によく似合つて、センスがいいと言わざるを得ない。

僕みたいなまがい者じゃなく、正統派魔術師という感じの彼女の装備は、両手杖に翡翠のネックレス。

服はさすがに緑にしないつもらしく、白と金であつらえられた、初心者が好むローブ。

「つて、聞いてるんですか！？」

「うん聞いてた聞いてた。で、僕に何をしてほしいの？」

全く聞いていなかつたが、適当に流すと決意した僕は、あーうんうん、と首を縱に振る。

「結局聞いてなかつたんじゃないですか！できれば、【城下町：アルザス】まで送つてほしいうなーって。後は今何が起こつているのかとか、教えてほしいなー」

結局厚かましい女だなオイ！

つつこむ気力がないとか言いながら、思わず心のなかでツッコミを入れてしまった。

「ひ、酷いです！貴方だってアルザスに帰るんでしょう？案内して

くれたつていいじゃないですか！一人で帰るより一人で帰った方が安心です！」

「他にパーティメンバーいるしね（それに君みたいなひるさいのがいるより一人の方がましだよ！）」

「もう、（）の部分は心の中で言つている。

「う、うるさい！？そつか・・・私うるさいんだ。じゃあ静かにするから連れて行つてください！」

「げ、心読めるの？んなわけないか。
ま、そんなことよりもっと差し迫つた問題がある。

「あーもう分かつた分かつた。とりえず（）から戻らないとね。で、パーティのメンバーに同行の許可貰つたらいいんじゃない？（）から出る方法わかる？」

「あ、分かんないけど、あの石碑みたいなの上のぐぼみに、杖を刺してみればいいんじゃない？ほら、有つたですよね？アーサー王の伝説。アレの逆バージョンで、刺してみれば何か起こるかもしけませんよ！」

「なるほど。確かにあんな怪しげな石碑が、ただの飾りであるわけがない。」

青白い光を放つてゐる杖を手に取つてみると、初めて触るのに、何故か心地よく手になじんだ。

まるで、何年も前から扱つてゐるかのように。
どんな効果があるのかは・・・今見るのも楽しみが減る。後に残しておこうか。

そして、石碑の方に向き直る。

石碑の上側にある円柱状に彫られた穴に、思い切りよく杖を差し込んだ。

途端に、僕の視界はまた白光で満たされた。

Act 7 パーソナルスキル（後書き）

質問です。

対巨人獣兵戦は書いておいた方がいいですか？
主人公目線なので、別行動中の他のメンバーについての話はどうしても抜けてしまいがちで。

希望があれば、サイドストーリーSSとして書かせていただきます。

Last Act 背負わされた業

「で、出られたー！」

「ねえねえ、貴方のパーティメンバーはどこにいるんですか？案内してください」

僕が白光から視界を取り戻し、辺りを眺めまわすと、景色はまた昼の森に戻っていた。

「ああ、ついてきて。多分向こうの戦闘もそろそろおわ・・・ってタイミングいいな、今敵を倒し終わったみたい」

効果音と共に、レベルアップが確認できた。

えーと、今現在のレベルは42。危な・・・、多分さつきのところにいたらこれだけおいしい経験値が入らなかつただろう。悔しいが、目の前にいるこの小さいサイズの女の子はとても役に立ってくれた。

当然、何らかの形で恩返しをしなければならない。

「INTとAGIに振り。SPはそうだな。せつかくだから【聖生秘術】に振つてみるか。何かいいのがでるかな？」

パーソナルスキルなんだから、当然強力なアーツが使えるようになるはず。

僕は、これまでためておいたスキルポイントを、惜しげもなく全部【聖生秘術】に振りこんだ。

「あ、そうだ。君の名前を聞いていなかつたね。なんて名前？」
処理が終まるまでの時間を、適当な雑談で潰す。

名前は、「ヒーラー」LV35と出でるから、本当に名前を聞きたかったわけではない。

「私は、ヒーラーと言います！以後よろしくお願ひしますです！」
「あ、終わった終わった。えーと、何を覚えたのかな？」

「自分から聞いておいて無視するな！」

「聞いてる。聞いてるって」

結果、ゲットできたアーツは四つ。

それは、【灼音の命撃】^{クライシス・キル}と【転現蘇生】^{トライブイタ・キル}に【創世防壁】^{クリエイト・プロテクター}【魔光砲】^{マジカルビーム}【命撃】^{サイレンス・キル}。

残念なことに、【創世防壁】はMPが足りず使えない。

というより、レベル70ぐらいにならないと使えない気がする。

さらに、【転現蘇生】^{トライブイタ}は一回しか使えない単発のアーツ。

一回使うと、もう一度と使うことはできない。

「まともに使えるのは【灼音の命撃】^{サイレンス・キル}【魔光砲撃】^{マジカルビーム}だけか・・・」

「ねえねえ、何の話ですか！そりいえば貴方はあそこで何をしていたのです？」

どうしようか。

パーソナルスキルといえば、周りの皆が欲しがるような物だ。

しかも、この事件の後じや強力な戦力になる。つまり、先に排除しようとする者、無理やりにでも仲間に引き入れようとする者が現れてもおかしくない。

そんなものを、「僕持ってるんだよー」などと辯闘にホイホイ言いふらすわけにはいかない。

「ああ、間違えて転移させられちゃってね。出ようとも出方がわからなかつたんだよ」

「そうなんですかー。で、いつになつたら呂えるんですか?・リュウ
ヤさんのパーティメンバーに」

「うわや、エリーナはあつさりと納得してくれたよつだ。
この子、本当に天然なんだなあ・・・。

「そろそろ行こうか。スキルポイントも振れたしね
「行つきまつしょう」
「りょーかーい」

マップウインドウを表示すると、パーティメンバーの現在地がアイコンで表示される。
ざつと、北へ五百メートルといったところか。

「ちよつとじめんねー、しつかり背中に捕まつてね」

何のことかわからない、と首をかしげているエリーナをひょいと担いで背中に乗せる。

そのままの状態で意識を集中して、多重常態呪文・加速者を発動する。

超加速状態になつた僕は、百メートル五秒台の速さで疾走することができる。

まあ、単純計算で五百メートルは一十五秒弱で走りきれることになる。

これで百キロとか走ろつとすると、MPと体力が切れてしまうため、長距離の移動にはあまり向いていないが、短距離ならこの世界で僕に勝てるプレイヤーは少ないだろう。

「ひやういっ！なななななななんなんですかー滅茶苦茶速い

ですよっ！」

「この世界じゃ、ステータスとアーツで足を速くすることができるからね」

慌てに慌てて、まさに文字通り右往左往と身じろぎしているエリーナに、若干苦笑しつつも、しゃべっている最中にもう目の前に幾十人分もの人影が見えていた。

「ん？『幾十』？」

まだクラウドたちが巨人獣兵と戦い始めてから、まだ十五分ぐらいしかたっていなはず。

それなのに、これだけの人に囲まれて居となると・・・

「PKか！」

「はわわ、PKです！」

奇しくも、僕とエリーナのセリフはかぶってしまったが、そんなことに注意は払っていない。

シウエルさんが付いているとは言つても、敵のレベルや正確な人数がわからない現状では、最大限に警戒するべきだ。

僕は、小声でエリーナに囁いた。

「君も、戦える？無理ならここでアルザスに帰らせてあげるけど。戦えるなら、ついてきてくれる嬉しい」

さすがに一緒に来るのをためらつかと思つたが、意外にも全く躊躇つことなくすぐに首を振った。

「上へ！」

「もちろん行きますっ！」

「良く言つてくれた！じゃあ僕が フラッシュュ を発動したら、すぐ に魔法を発動してね。できれば範囲魔法がいいと思つ」

「ふえ！なんで私が魔法を使うつてわかつたんですか！それに フラッシュュ つてなんですか！」

「持つてる装備からして一目瞭然だし。 フラッシュュ つていうのは、一閃光弾 スタングレネード みたいなものだよ」

教えながら、クラウドに心話を送る。

同時に、手元にウィンドウを生じさせて軽くいじる。

『クラウド！現状を手短に教えてくれ！』

『いいところに来てくれた！今、二十三人のPKに囮まれてる！シウェルさん含めて皆、移動速度減少や攻撃力低下、防御力低下、HP・MP最大値低下、AGI低下の状態異常呪文を掛けられてる！一度に全員をしてシウェルさんが戦ってるけど、敵もかなり強い！平均レベルは45ぐらいあるんじゃないかな？』

ギリッと僕は思わず歯ぎしりをしていた。

圧倒的に不利な状況じゃないか！

『今すぐ援護に向かう！何とか持ちこたえてくれよ…』

返事も聞かず、僕はそのまま心話を切つて、エリーナに指示を飛ばした。

「エリーナ・・・行くよ」

「あ、名前で呼んでくれた！じゃないです。分かりました。行きましょう！田を開じておきますね」

両手をパンツと合わせて、田ぐらましに閃光を発生させる。

僕の攻撃パターンは、クラウドやシウェルさんたちも知っている

から、援護が来ると分かつた瞬間目を閉じていいくじだろ？

「ハイディング・マップ
透明移動！」

「絨毯炎槍の薙 『クラスター・フレアランス』！」

「ゴウツ」という音と共に、敵たちの上空に幾本もの焔でできた槍が出現する。

「な、なんだなんだ！」

「援軍か！」

「ちつ。怯むことはない！ 敵はせいぜいレベル40程度だ！ あのふざけたテスター野郎を除けば脅威ですらないぞ！」

「そのテスター野郎一人にケチヨンケチヨンにされてる貴方達は何なんでしょうネ？」

透明のまま近づいて見ると、十数人の剣士を片手剣と拳銃だけであしらっているシウエルさんの姿が見えた。

余裕そうな発言とは裏腹に、額に汗が浮いている。
ときどき、鮮血も舞っていた。

「てめえら・・・生きて帰れると思つんじゃねえぞー！」

僕は、自分が真剣に怒っていることを自覚した。

「来たー！リュウヤのマジギレ状態

敵の魔法使いと思われる人影に切りかかっているクラウドの軽口
も、あっさりと聞きながす。

「『ライトニングビーム』！」

約一秒間しか持たないとはいえ、長大な射程を誇る雷撃が、蒼白く輝く杖の先から発射される。

シウエルさんに群がっていた敵には面白いように命中した。

「くそつーちがれ！一端下がって新手の敵に戦力を裂け！テスターと戦うのは最後でいい！」

「グラン・サンダーフォール 聖光十字の四重奏」

「い、いくです！『神上の兵器となりし巨人の吐息。我的手先となり敵を滅ぼせ。 風神の破城槌』」

雷撃がほどばしった後、辺りを覆いつくすようにまばゆい光が生じた。

そして高威力の白光が、十字型に敵を襲うのと、上から音速に迫る勢いで風圧塊が叩きつけられるのが同時だった。

轟音と爆風、閃光が辺りを滅茶苦茶に襲うが、ぼくのパーティメンバーには何の被害も及んでいなかつた。

通常、エリーナの攻撃はクラウドたちに当たつてしまふのだが、PKを確認した時に、エリーナをパーティに誘つておいたため、味方を誤射してしまふ心配はなかつた。

「ぐはあっ！」

シウエルさんから多くのダメージを被つていた戦士や、盗賊系のプレイスタイルの敵が、数人倒れ伏す。

エリーナはINTに全て振っている、純粹火力の魔法使いタイプなのだろう。

彼女の攻撃は、格下とはいえども、侮れない威力を誇っていた。が、それは裏を返せば、防御力や回避力がほぼ皆無ということ。

敵を一人も彼女に近づかせずに、全員殲滅しなければ！

僕は、今覚えたばかりのパーソナルスキルを使用することを決意した。

「魔光砲撃（マジカルビーム）！」

僕の周辺に、幾十もの輝く光の球が出現した。そして、僕が腕を振り降ろすと、その一つ一つから、猛烈な力を秘めた光線が進る。

僕がアーツを発動した瞬間、シウエルさんの口元が、ニヤツと歪むのを見た。

まるで「いたずら成功！」と喜ぶ子どものよ。

「その調子ですヨ、リュウヤ君！さて、私も負けてはいられません
ネ 電磁弾発射銃」

シウエルさんが手に持っていた拳銃から、音速の三倍を超える速度で弾丸が打ち出される。

一撃でせつせと回復魔法を発動していた女の心臓を打ち抜く。彼女のHPバーが一気にゼロになり、断末魔の悲鳴を上げることすら許されずに、姿がぼやけてついに消滅した。

「シウエル！囮つたなこの野郎！」

「口と人聞きが悪いですヨ、リュウヤ君。強くなれたんだからいいじゃないですか」

「あらかじめ言つておいてくれりやあよかつたのによー」

「いいサプライズになつたでしょウ？」

言い合いつつも、お互に寄つてくる敵を仕留めるのは忘れない。

こちらにはたつた五人しかいのにもかかわらず、戦闘開始四分で、二十人以上いたレベルが上の敵の数はその半分以下にまで減じていた。

「ちつ。なめんじゃねえぞクソガキがああああああつ！」

さつきから他の人に指示を飛ばしていたリーダーと思しき男と、その取り巻き一人が、僕めがけて斬りかかってきた。
ここでシウエルさんやクラウドといった戦士系に向かわないところ、あえて一人ではなく三人できたところが、物凄く格好悪い。

「失せろ！ フラッシュ！ ライティングビーム！」

閃光が生じるが、驚くことに三人には効果がなかつた。
不敵に笑つたリーダーが、手に持つた長剣で僕に切りかかつてきたが、ぎりぎりで雷撃で迎え撃つ。
命中するも、敵のHPバーはほとんど削れなかつた。
もともと減つてい多分を合わせて、残り3割から2・7割ぐらいになつた程度だろうか。

「効かないな！」

意識を向けて、敵のレベルを読みとると、レベル60だつた。
三人とも、同じレベルで全員戦士系。
この三人が、このPK団でのさばつていたに違いない。

「そうか。雷撃に対する抵抗力が異様に高いのか・・・よし、エリ一ナ！」

「はっいー！やるますよー！ 獄焰の破裂砲 ヘルフレイズ ！」

僕の方にすっかり気を取られていたリーダーたちに、真横から撃
氏3000 の熱線が直撃する。
バタバタと、二人の男が倒れ伏して消滅した。
残るは、リーダーただ一人。

「甘いぜえっ！俺はなあ、 属性魔法無効 のレアスキルを揃えて
んだよー！つまり、雷に水に風に炎、闇や光の全ての属性の魔法攻
撃は、俺にどうかねえ！」

ちつ。相対するのにこれだけ相性の悪い敵はいないかもしねり。

「はっ。ほやいてろ！ ホーリーバインドローズ ー』。」

光でできた茎が、リーダーの身体を締め付ける。

「ぐつ・・・ち。まあいい。こいつが消えた時が、お前の命が死
る時だからなあ！」

瞬時に魔法の効果を悟ったリーダーは、余計な抵抗を諦めたよう
だ。

確かに、魔法が効かなければ僕に勝ち目はないかもしれない。が、
違う。

『『至上の力の根源より導かれし奔流。静かに敵の命を燃やしつく
せ。 灼音の命撃（サイレント。キル）』』

辺りから音が消えた。

戦闘の音も、爆発音も、木々のそよぐ音すらも、まるで時間が止まってしまったかのように停止している。

そんな空間の中を、一陣の焰を纏った衝撃波が走り抜けた。

数秒して辺りに音が戻ってきたとき、立っている者は、僕たちのPT五人しか残っていなかつた。

更新遅れました！

二回、データが飛んでしまったんです。
申し訳ありませんでした。

今回は、番外編になります。が、おそらく次回からは現実世界での
話になると思います。
では、サイドストーリー、どうぞ！

「シウヘルさん…リュウヤをビームにやったんですか…？」

リュウヤが目の前で投げ飛ばされ、驚いたクラウドが抗議の叫び声を上げる。

「ちょっと修行に送りだしましタ。帰つてくる頃には桁違いの強さを手に入れてござると思いますワ」

シウエルは、どこ吹く風といった様子で、クラウドの抗議をやり過げると、パツチリとワインクを決めながら、クルリと体の向きを変え、ゆっくりと歩き出した。

「ま、心配しなくともあいつは強いからなあ。精神面は置いておいて。俺たちは自分のレベル上げでもやっておくが」

やれやれ、と肩をすくめたクラウドも、巨大な足音を鳴らしていれる「巨人獣兵」の方に向かつて駆け出した。

残っていたセーラも、「ま、待ちなさいよっ！」と駆けだしていく。

「」の時、背後から忍び寄る幾つもの人影には、誰も気が付いていなかった。

いや、シウエルの口元にだけは、まるで獲物を見つけた虎のようだ、獰猛で、残忍な笑みが浮かんでいた。

「 「で、でつか――――――.」

震源地にたどりつくと、其処にはなんと横幅10メートル、縦二
十メートルのでっかい獣がいた。

もう聞かなくても見なくとも、あれが目的の「巨人獣兵」だと知
れる。

「あああああんなおおつきいのと戦うんですか！」

「いやー、まさかあんなに大きな個体がいるとはネ・・・。私にも
予想外でしたヨ」

答えるシウヘルの額にも、若干の冷汗が浮かんでいる。

「まあ、やつてやるしかないんだよなー行ぐぞー手伝ってくれよ、
シウヘルさん！」

「君つてさつきからホントに開き直るのが早いですネ」

「ウジウジ悩んでたつて、なにも良いことないだろ。前に進んで、
がむしゃらに前に進んでいれば、勝手
に道は開けているさ」

クラウドは、咳きながら一步、前に向かつて足を踏み出した。

「やれやれ。単細胞なガキですね。まあ、嫌いではないですガ

肩をすくめたシウエルも、虚空から光の粒子と共に、「二丁の拳銃を取り出した。

慣れた手つきでマガジンを交換し、撃鉄を下ろす。

「あ、あたしだってやればできるんだからねー。あの程度、眼をつぶつても倒せるわよ！」

慌ててセリアも杖を構え、支援呪文の詠唱を開始する。

「グギヤアツアアアツアアアアアアアアアアアアツ！」

耳を劈く様な獣の咆哮が、スタートの合図になった。

「私が一つのHPを三分の一にまで減らしますから、それからは二人で頑張ってくださいネ」

「了解！」

ニヤツと唇を歪めたシウエルは、いつでも発射できるようにしておいた拳銃で、
「巨人獣兵」の頭部に照準を当てる。

「さあて、ちよつと派手に行きます。」

荷電粒子砲エレクトロニック・チャージバズーカ

ドンッ！という音が一発轟き、蒼い光条が伸びる。

加速器を用いた上で、イオン化した原子や電荷を持つ素粒子などの荷電粒子に超高電圧をかけ、高速で発射する、近未来兵器。

この世界では、魔法を用いて必要な大電力を補っているという仕様だ。

発射された荷電粒子の塊は、見事に「巨人獣兵」の頭に一つの穴

を穿つたが、致命傷には至らなかつた。

「まだまだ行きまス。 七神融弾 ！」

火、水、風、土、雷、光、闇の七つの属性全てを一つにまとめた光線を放つ一撃。

一つの拳銃で同時発射されたそれは、さらに先ほどどうがたれた穴の周りを抉る。

「ガルルルルウ・・・グラアツアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

HPを半分ほど削られて、獣の苦悶の叫びが、怒りの咆哮に変わる。

「これで終いでス。 一回新しいこのアーツを使ってみたかったんですね。 一蒼天に咲く弾幕の雨 ！」

クククククツと、悪役同然の意地の悪い笑い声が、シウェルの喉から漏れる。

拳銃が発光した瞬間、眼にもとまらぬ勢いで引き金が次々と引かれる。

ただし、銃口は「巨人獣兵」ではなく、晴れ渡つた空に向かれている。

「おい、シウェルさん！ 何を無駄打ちして・・・」

「いいから黙つて見ててください。 ほーら、面白いことになります

このアーツの効果時間は、ちょうど十秒。

引き金が一回引かれるたびに、上空には三十の色とりどりの弾丸が出現する。

そして、十秒間にシウェルの一丁の拳銃の引き金は、それぞれ二十五回ずつ引かれている。

$$25 \times 2 \times 30 = 1500.$$

拳銃がさらに激しく発光したかと思うと、1500もの弾丸が一斉に「巨人獣兵」目掛けて襲いかかる。

従来の法則を取り戻して得た、自由落下の上にさらに加速される。

「ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！」

一気に全身に弾丸の雨を浴び、HP云々以前に、大きく体勢を崩してよろめいた「巨人獣兵」の足元に疾走したシウェルの蹴りが決まる。

もちろん、ただの蹴りではなく専用のアーツも用いられているが。

獣の巨体が、大きな揺れを引き起こしながら、地に叩きつけられる。

そして、その眉間に、2丁のけん銃がぴったりと押し当てられていた。

「やっぱりあつけなかつたですね。だいぶんこれでも手加減したんですね。ま、ここから先は一人で頑張ってください」
「…………なんていうか、敵が哀れに見えてくるな」

一度も反撃ができないまま、地面に引き倒された「巨人獣兵」の気持ちを推し量ることはできないが、案外「さっさと止めを刺してくれ！」と願っているかもしれない。

「・・・ねえ、なんだかあいつの様子がおかしいわよ」

そんなことを考えていたクラウドは、一瞬、異変に気づくのが遅れてしまった。

普通なら、問題にならないような僅かな隙。が、今は『普通』ではなかつた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！」

全身から深紅のオーラを立ち上らせた「巨人獣兵」が、のつそりと土煙の中で起き上がっていた。

同時に、辺りの地面を抉つて手にした土塊を、クラウドめがけて投げつける。

それが、彼の脇腹を軽く傷つけ、同時に意識を引き戻した原因。

「ど、どうなつてんだあれば！説明してくれ、シウヘルさん！」

慌てふためいているのが丸わかりなクラウドを見て、ちょこんと首をかしげたシウヘルは、何を思いついたのかポン！と手を打ち鳴らした。

「あれ、言つてませんでしたっけ？「巨人獣兵」は、残りHPが3割になると、【狂化】するんですけど。内容は・・・」

大きさ、攻撃力、防御力、スピードなど、全てのパラメータ

が、1・5倍になります

「聞いてねえええええええっ！で、手伝ひは！」

「毛頭あつません！」

「即答かよオイ！」

「漫才やってる場合じやないわよつ！」

セリアは、思わず現実逃避をするかのように、シウェルと漫才を始めたクラウドに駆け寄り、彼の身体を抱え込みながら地面に倒れる。

ほぼ同時に、空気を切り裂く音と共に、先ほどまで彼のいたところを、破壊力抜群の土塊が通過する。

「あんたバカ！？まずはあいつを何とかしないと！」

「わ、悪い。ついでにちょっと離れてくれるとありがたいんだが」

は？と首をかしげたセリアは、自分の身体を見下ろし、顔を真つ赤にしながら慌てて飛び退く。

「てえりやああああああああつ！燃え尽きろオオオオオつ！ 爆炎纏剣

」

セリアがどいた途端、抜剣したクラウドは、大上段に振りかぶった剣を、勢い良く振り降ろす。

敵までまだ数十メートルある今の位置では、到底無意味に思われるが、振り降ろされるその最中に、剣の先から膨大な熱量を持った炎が、うねりを上げながら百メートルほど伸びている。

もうもつと立ち込める土煙を通して、深く傷つけられた地面が見える。

アーツによつて生み出された炎が、綺麗に土を蒸発させたため、
大きくて長い亀裂が、一直線に走つている。
が、どこにも「巨人獣兵」の姿はない。

「やつたか……？」

自身の剣の手ごたえを確かめていると、彼の後方から甲高い悲鳴
が聞こえた。

「クラウドー後ろ！」

思わず振り返つたクラウドは、信じられない物を見た。

物凄い巨体が、超速で動き、いつの間にか背後に回り込んでいた
のだ。

もちろん回避も間に合わず、クラウドは「巨人獣兵」の蹴りを、
正面から食らつた。

「クラウドー！…！…！
ヒーリング・ハートビート
脈動回復」

一気に八割ほど削られたHPが、セリアの回復呪文によつて、次
第に回復していく。

おかげですぐに傷も痛みもなくなつた物の、不覚を突かれた悔し
さと怒りは、クラウドの中に溜まつていた。

「舐めやがつて！行くぞ、化け物オオオオッ！」

舐めていたのはどちらだよ、といつツツコミを入れるような人は
いなかつたため、自分たちから攻撃しておいて何様のつもりだ、お
前。と言いたくなるような理不尽なセリフを吐き重ねながら、クラ

ウドは再度鞘にしまつた剣を抜き放つた。

辺りが、白銀色の光に閉ざされた。

Saiyori 1 対巨人獣兵 前編（後書き）

とか言いつつ、前編で終わってしまいました。次こそ終わらせますので、お許しください！

後ついに完全にストックが尽きました。そしてゴールデンウィークには大量の宿題と部活の試合があります。

なかなか更新できなくなると思います。

本当にごめんなさい。

それでも読んでくださっている読者の皆さま、これからもどうぞ拙作をよろしくお願いします。

遅くなりました！

次こそ、第三章に入ります。

・・・・・本当だよ？

「…、今度こそ殺れたか…？」

白銀色の光が收まり、ぽつりとクラウドが荒い息と共に呟いた。

が、そんな淡い期待は、儚く散つた。

「グアアアアアアアアアアアツ！」「ロシテヤル…」「ロシテヤルウウウウウウツ！」

「どうやら、頭もよくなつてゐみたいね」

答えるセーラの額からは、大粒の汗が流れている。

目の前の「巨人獣兵」は、いつの間にか団体に見合つ大きさの戦斧を握つていた。

柄の部分は多分ヒノキで造られていて、それ以外は鋼製。

それでも、あくまでクラウドは不敵な笑みを消さない。

「残りHPは後2割程度か…。行くぞ、セーラ。支援と回復は任せた！リコウヤが帰つてくるまでに、なんとしても倒しておかねえとな」

「ええい、女は度胸！分かったわよ！」「解つ！」

もうセーラの叫びは、ヤケクソに近い状態だつた。

が、支援系のアーツはきつちり発動させ、クラウドの身体には色とりどりのオーラが揺らめいている。

「せええええええええやあつ！」

ガキイイイン

「がはつ！」

金属音が鳴ったかと思うと、**「巨人獣兵」**に斬りかかっていたクラウドの身体が、大きく吹き飛ばされ、近くの樹にぶつかった。

一部始終を見ていたセーラにも、**「巨人獣兵」**が自らの戦斧でクラウドの攻撃を受け止め、弾き返したのだと、すぐに気付くことができなかつた。

「クラウドッ！ 緊急回復 治癒促進！」

詠唱時間が短い代わりに、回復量の少ない治癒呪文と、自然回復の速度を速める呪文を併用。

「チツ・・・ありがとな。それにしてもあいつ強すぎだろ」

「確かに。クラウド一人で勝てる相手じゃないわよ！ そうだ、シウエルさんは！ もしかしたらこんなに強い相手なんだしちゃんと手伝つてくれそうにないわね」

期待を込めた目で後ろを振り返つたセーラは、そそくさと走り出していくシウエルの姿を捕え、聞いただけで同情を誘うような、特大のため息をついた。

「そりだらうな。でもな、何があつてもリュウヤの助けだけは借りねえぞ。あいつの手を借りたら意味がないんだよ。あいつが来る前に、サクッと殺してやる。行くぞ！ 聖なる光の加護の剣！」

「ちよつと一ちゃんと作戦立ててから行かないとさつきみたいにな

とに・・・

白銀色の閃光が眩しく煌めくが、今の〈巨人獣兵〉大した効果がないうえ、MPの残りがもうほとんどない状態にあることは見て取れた。

「あのバカ！せめてMP回復ポーションぐらい飲んで行きなさいよね！天の魔力の御裾分け！」

この世界でおそらく唯一のMP回復呪文。

対象者の最大MPの三分の一を即座に回復する効果だが、一四時間に一度しか使えない。

前衛職であるクラウドのMPなんて微々たるもの。それの三分の一といったら、大した量ではない。

「グアアツアアアアツ！メガ！メガ！オノレ、ドコニイツタ！」

閃光で、目をつぶされたく巨人獣兵[→]が、やみくもに斧を振りまわす。

が、そんな攻撃を受け付けるほど、クラウドも甘くはない。

「い、こ、だ！」

空高くジャンプしていたクラウドは、斧の刃の部分にすとんと着地した。

そして、ニヤッと笑って、腕を高く振り上げた。

「ざあ～んね～ん！ 天翔^{フライ・ソーラク}ける衝撃の刃！」

クラウドが切り下げる剣の軌跡に沿つて、見えない斬撃が走り出

す。

打ち出した方向が悪く、その斬撃は、**「巨人獣兵」**の身体には届かなかつた。

「クラウドーどこを狙つてるのよー。」

「時機に分かるさー。」

クラウドは、一端剣を鞘に納めると、勢いよく引き抜いた。

「ええいやややあつ！ 燕返しー！」

五回連續で剣を振り、縦、横、袈裟斬り、逆袈裟、剣突を敵に浴びせる。

その間にかかる時間は、およそコンマ三秒。

隙が大きい半面、瞬間攻撃力は打撃攻撃としては最高クラス。

武器の攻撃力がそこまでないクラウドでも、**「巨人獣兵」**程度の物理防御力なら、四割はHPを削ることができた。

が、HPと物理防御が一倍になつている今の状態では、一割しか削れない。

「グアツ！」「ゴザカシイマネヨ！」

ブォン！と大きな音を立てて、**「巨人獣兵」**が手に持つた戦斧で辺り一帯を薙ぎ払・・・おうとした。

が、肝心の刃の部分が、バッサリと切り裂かれていて、クラウドには届かなかつた。

「さつきの攻撃で、刃の部分だけ斬り落としておいたんだよ！ 分かつたが、この脳無しの禿が！」

「クラウドっ！調子に乗つてないで避けて！」

敵を騙した優越感に浸つていたクラウドは、迫りくる「巨人獣兵」の拳に気付かなかつた。

ちょっとと人体からなつていい音とは思えないエグい音がして、またクラウドの身体が吹き飛ばされる。

「くっ・・・そ・・・」

彼のHPバーが一気に僅か数ドットにまで削られる。しかも敵にも知恵がついたらしく、すかさず追撃を仕掛けてきた。

「コレティドメダアアアアアアアアアツ」

「巨人獣兵」が空気を切り裂きながら、毛むくじやらの腕で殴りかかる。

「クラウドッ！」

「ええい、ちくしょう！一か八か！ 聖なる光の加護の剣！」

セーラの悲鳴と共に、いつも通り白銀の光が弾けた。

運のいいことに、クリティカルヒットを示す光のエフェクトがきらめいたが、一撃で「巨人獣兵」の命を奪うほどの威力はなかつた。空中にいるクラウドには、いまさら回避行動をとる余裕はない。

「くそっ！俺はまだ消える訳にいかないつてのに・・・」

「このシウエルのボケ禿くそカス冷徹な人外のノータリン野郎！仲間が死にかけてるつてのに、さっさと助けなさいよ！」

こんな敵と戦わせた、しかも自分は一瞬で何とかできる力を持つ

ていながら傍観に徹している、シウェルに罵詈雑言を浴びせながらも、必死で回復呪文を唱えるが、間に合ひそうにない。

「大丈夫ですよ、ホラ。リュウヤ君がやつてくれたよつですネ」

近くの森の木陰からひょっこりと顔を出したシウェルが、何やら意味深なことを呟くが、セーラはともかくクラウドにはしつかりと伝わつたようだ。

「つたく・・・結局あいつの力を借りることになつたじゃねえかよ。天翔ける衝撃の刃！ 聖なる光の加護の剣！」

空中で無理な体勢から、二つのアーツを放つクラウド。そしてそれは、実にパンチが彼の身体に当たる一秒前に、^ム巨人獣兵_ムの身体を貫き、焼いた。

アーツによる強制的な動きによつて、体中の腱や筋肉がみしめしと悲鳴を上げるが、クラウドは歯を食いしばつて黙殺した。二つのアーツによつて、^ム巨人獣兵_ムが吹き飛ばされた隙に着地し、「レベルが上がつたことによるスキルポイント」を振り分けて得た新アーツを発動する。

「くたばれえええええっ！ 防喰されし夢幻の剣！」
イノフイニティ・ナギハ

キラキラと舞うエフェクトと共に、数百本の剣がクラウドの前に出現した。

「斬り死へせー！」

マシンガンのように、絶え間なく剣が打ち出される。

剣と言つより、日本刀のようなものや、サーベルまでが含まれて

いた。

「ガアアアアアアアアアアツ・・・ハツ・・・・・・・！」

全身を串刺しにされた「巨人獣兵」は、辺り一帯に震度三程度の地震を引き起こしながら後ろに倒れ、ついに粒子となつて消えた。

「いやあ・・・終わりましたネ。どうですか?レベルが上がったで

C - 1

「まことに、いつ時も持ち前の開き直りを発揮して立ち直ってくれたさ。
・・・新たな敵が来ます！」

シウエルに言われ、クラウドとセーラが慌てて背後を振り返ると、其処には数多の人影が。

そしてその一人一人から、「PKモード」にしている者特有の殺氣を感じ取れた。

「… もやるかー。」

「あ、あたしはもちろんやれるわよっ！それより、クラウドにそもそもMHPがほとんどないじゃない！あんな大技を、たかだか残り〇・三三三割程度のHPに使うなんて・・・ばあつかじやないの！」

「何だと！あれは新アーツを試すのには絶好の機会だつただろ？それに、こんなに敵に囮まれてるなんて気付かなかつたんだししょうがない！」

“あきやあきやあと言ひ争う二人に空氣を読んだのか、敵も動こうとはしなかつた。

「はいはい、夫婦喧嘩は其処までテ」

「「誰が夫婦だつ（よつ）！」」

「ベタな展開をどうもありがとウ。・・・来ますヨ」

シウエルが言つた瞬間、人影が斬りかかってきた。

「奴らを殺せええええええええつ！」つちは人数が人数だ、恐れるこたないぞ！」

「さて、あいつらには遠慮がいらねえんだよな、シウエルさん？」
「もちろん。今のあなたに何ができるのかは疑問ですが・・・思う存分、やつちやつてください」

クラウドの顔に、余裕を取り戻したような、不敵な笑みが浮かんだ。

ついに一万PVを突破しました！

読者の方々、ありがとうございます。

本当なら記念に何かしたいのですが、それはまた次の機会に・・・。

ではまた今度は現実の世界でお会いしましょう。

第三章 Act 1 異変の始まり（前書き）

今回、だいぶん時間を進めます。リュウヤたちの居る世界で換算して、ざつと今話だけで一冊は進んでいると思います。

それは、時間の流れが違うところと、お許しください。

ちなみに、その間リュウヤ達は、必死でレベル上げと装備揃えにいそしんでいます。

第三章 Act1 異変の始まり

時は少し流れ、四月九日の午前六時。

自衛隊・警察・消防の三つの機関の電話のベルが、ほぼ一斉に鳴り始めた。

「はい、こちら警視庁奥多摩区支部です。どうされましたか?」「119番です、どうされましたか?」

日本全土のあちこちで110番、119番通報がなされたが、どれも内容はほぼ一緒だった。

『VRSGゲームをやっていた家族・友人が戻つてこない』

VRの特性上、現実世界の時間で八時間が経過すると、強制的に意識を引き戻される。

もちろん、そうなつてしまふとその後一時間はプレイできないことになつてしまふのだが、それは公表されていない・・・というより、説明書の端の方に小さい文字で書いてある。誰もそんなところまでチェックしないだろ、という運営側の意図が見え見えだ。

一般人にとつてはほぼ未知の技術であるVRに関する」とだけあってか、通報者の声にもかなりの焦燥感がにじんでいる。

「落ち着いて、詳しい話を聞かせてください」「詳細な状況説明をお願いできますか?」

そんな通報者から得られた情報によると、事件の概要はこうこう

「うるさい。

『昨日の午後八時以前にログインしていたプレイヤーが、いつまでたっても起きてこない。心配になつて見に行つたら、大抵のプレイヤーはVRのゲームの世界から戻つてきていなかつたが、中には死亡していた人もいる』と。

多すぎる通報の電話に、警察と消防の電話回線はパンク寸前。

警察では、慌てて緊急の対策本部が設立された。名称は【仮想現実神隠し事件対策本部】

消防は、自衛隊にも協力を要請し、何とか通報の嵐をしのいでいる。

そして自衛隊の中で唯一、この事件に關して「上」から任務を与えられているのが、【サイバーテロ対策課】。

事件発覚から三十分後にようやく『電腦の処理者』や『AI・M/コト』を所有しているヴァルハラ社の社長、技術開発グループのリーダーなど、およそ十数名を何故か任意で同行させた警察に比べても、おおよそ、その半分ぐらいの時間しか経過していない。

その任務の内容は、『救出方法の解明・プレイヤーとの連絡方法を見つける』。

全国で五つのチームが編成され、それぞれ「プログラミング」「ハッキング」「コンピュータウイルス作成」「情報処理」「その他」の役割を担っている。

なぜこんな物騒な役割のチームがあるのか?と思われるだろうが、世界最高レベルの厳重なセキュリティが掛けられていた—『脳から送られる電気信号の管理プログラム』『レディオジメント』の異変は、明らかに事故では済まされない。

最後のチーム、「その他」は明らかに手抜き×丸投げな感が否めないが。

何者からハッキングを受けたのは明白。そしてセキュリティを突破できるほどのハッキングの腕を持った犯人、もしくは複数の犯人を相手して確実に勝利を収めるには、このぐらいの用意があつた方がいいのだ。

もちろん、「上」が圧力をかけて、ヴァルハラ社から『電腦の処理者』を徴収したため、ただでさえ周到に準備したサイバー戦の勝率がさらに上がった。

が、今回の任務はあくまでも『救出方法の解説』と『連絡手段の確立』。

その過程で、万が一にも争いを回避できるなら、その方がいいに決まっている。

そういう意味では、争いには参加しないであらう、「その他」チームはある意味良い仕事ともいえるのだが・・・。

「つたく、なんだつて『その他』なんていかにも雑用的なチームで仕事しなきゃなんないんだよ」

バタン！とおそらくわざと大きな音を立てながらドアを閉め、荒々しく『えられた部屋に入ってきたのは、サイバーテロ対策課その他チーム、仙崎直弘。階級は少佐。

自分の従弟がゲームの世界にとらわれていることもあって、『自分も捜査に参加させてください！』と上司に頼み込んだのだが、軽くあしらわれて、『その他』に回されたのがよほど不服らしい。

「落ち着いてください、仙崎少佐。そんなことをおっしゃられては我々の士気が下がります。それに『その他』といふことは、ある意味、自分たちで好きにやつていいというふうと繋がります。それは少佐の気風に合っているのでは？」

「まあ、お前はそういうがな・・・なんといつか、むづちゅっと体面上ましな名前をつけるとか、投げやりすぎだらコラーとか、給料増やせとか、上に文句がいくつかたまつてな」

がりがりと頭をかきむしりながら、溜息をつく。

目の前の冷静沈着で、直弘より一つ年下の女性は、昔からの仕事仲間の加藤麗華。階級は大尉だ。

整った顔立ちで、いまどきの女性には珍しく、完全な漆黒色の短髪。下手に茶色く髪を染めているよりも綺麗に見える。

のだが、長い間ともに働いてきた直弘には、魅力的には映らない。

「最後の一つは全く関係がありませんね。給料を上げてほしければ、愚痴つてないでさつさと仕事をしてください」

「へえいへい。といつても何をやればいいのかすら掴めてないのが現状なんだけどな」

「それはこの資料に纏めてあります。五分で目を通してください」「一、三十枚はあるうかという分厚いレポートを、直弘に押し付けて、麗華は自分のデスクにあるパソコンに向かつた。

「これから先は自分でどうぞ、と言いたいのが丸わかりだ。

「・・・・・・良く招集されてからの短時間でこんなに纏められたな」

非番だったメンバーも含めて、招集され、チーム編成が発表されから、まだ三十分もたっていない。

その割に、レポートの内容は分かりやすく、しっかりとした内容だった。

「そりゃ もう、麗華先輩ですからね、このぐらいは朝飯前なんでしょうよ」「みづ」

「あいつのタイピング速度半端ねえからな。ソフトや変換の速度が追い付いてないこともあるってんだから神業の域だろもつ」

淡々と弦きに答えたのは、これまたいつもメンバーや、石黒秀吉中尉に、根室静也少佐。

中尉の方は、「豊臣秀吉」から字をもらつたため、仕事仲間からは「太閤」と呼ばれている。

生真面目な性格と、シャープな感じの眼鏡がとても似合っているのだが、年若いせいか、いじられやすいキャラのせいか、はたまた両方なのか、「太閤」と言つよつた威厳は皆無と言つていい。

初めは恐縮して、「そんな大層なあだ名をつけなくていいですよ！」と遠慮していたが、皆がからかっているだけだと気付いてからは、そう呼ばれるたびにため息をつくようになったのだが、今ではそれすらもあまり残つておらず、もうどこか諦めている。

静也少佐の方は、直弘の高校からの同級生にして親友。ついでに言つと、『電腦の処理者』を開発した技術者、『早瀬王怜』とも知り合いだ。

彼を通じて、直弘も早瀬と交流があるから、この事件に関しては比較的密接にかかわつてになることになる。

静也と直弘は、今年で二十六だから、おおよそ十年ぐらいの付き合いになる。

王怜の方は七年上の、三十三歳。といつても、子どもじゃないから、友人となるのに年齢は関係ない。

王怜はともかく、静也は口や素行も悪く、友達は少なかつたのだが、何故か直弘とはとても気が合ひ、就職したのも同じ自衛隊だつ

た。

驚いたことに、何の口裏も合わせていなかつたのにもかかわらず、「俺、人の役に立ちたいから自衛隊に入ろうと思う」と進路を教えた時、「奇遇だな、俺もなんとなく自衛隊に入りてえつて考えてたんだよお。珍しい偶然もあるもんだ」等と本気で驚いた顔をしていた。

「えーっと、これで四人、と。あと一人・・・だれだつけ?」

「知らん。忘れた」

「えーと、誰でしたつけ?」

思惟から戻った直弘が首をひねつたが、それに正確な答えを返してくれる者は、男三人の中にはいなかつた。

「はあ・・・。自分の担当チームのメンバーの名前ぐらい覚えておいてください。『神上葵』さん・・・でしたよね?」

「しつれいしま・・・」

「何か偉そうなこと言いつつ語尾が疑問形だったぞ」

「う、うるさいですね。疑問どころか全く思いつきもしなかつた少佐に言われる筋合いはありません」

ドアの陰から、問題の人物が完全に麗華をからかう体勢に入った直弘と、見た目は冷静に返答をしている麗華を、生温かい目で見ているのだが、二人は全く気付かない。

真面目な秀吉はそのことを伝えようとするが、面白がった静也に口をふさがれて止められる。

数分が経過して、ようやく堪忍袋の緒が切れた問題の女性が口を開いた。

「私の名前は、『上神葵』ですー思い出したか『コンチクショウー。』

「いや、さつぱり」

「ああ、そういうえばそんな名前でしたね」

実は、とうの昔に「こと」という付いていた二人は、最後まで悪ノリを続けた。

直弘はともかく、麗華にしては珍しいことだが、大事件を前にして、若干テンションが上がっているかも知れない。

「さて、メンバーも揃つたことだし、ちやちやっと事件、解決しちゃいますか！」

一言叫ぶと、直弘は自分のパソコンの電源を入れた。

第三章 Act1 異変の始まり（後書き）

色々な人物名が出てきてこんがらがつた方すみません。
一覧にすると

仙崎直弘・・・「その他」チームのリーダー。壬怜や静也とは親友。上司とは仲が悪く、良く仕事をさぼるが、今回の事件に関しては本気で取り組んでいる。が、日ごろの行いが悪いためあまり最前線には送つてもらえない。そして現実世界編での主人公。

加藤麗華・・・直弘の副官。優秀だが冷静・・・むしろ冷徹。テンションが上がると、冗談を言つたり悪ノリをすることがあるが、あまり感情を表に出さない。タイピング・ハッキングの腕は超一流。

石黒秀吉・・・通称、「太閤」。いじられやすいキャラで、溜息が口癖。若干かわいそうな人w（作者からもいじられる）

根室静也・・・自衛官というより、ヤから始まりザで終わりそうな、その筋の人見える。口が悪く、「ん」を「ン」と発音する。おもにこれは作者が直弘と口調を識別させるため。見た目に反して頭は良いが、コンピュータの扱いは苦手。さらに銃器などの扱いや、武道の心得もあるため、今すぐでも暴力団に転属できそうな人。

上神葵・・・天然キャラだが、空気が薄いため、良くするーされたり忘れられたりする。

秀吉「なんか僕の紹介文短くないですか！？」

葵 「私と大して変わらないですよ」

直弘 「はつはつは！ 所詮君たちは脇や」

静也 「うるせえンだよ。狭い部屋の中で騒ぐなっての」

• • • • to be

continue .

Act 2 捜査開始（前書き）

前回のあとがきが見苦しかったため、少し手直しさせていただきました。

ですが内容 자체は変わっていないので、読めた方は気にしなくてもよいかと思います。

Act 2 捜査開始

「まずは、中にどういわれている人の現状を把握しないとな。いつい何人が出られなくなっているのか、そしてゲームの中でどういった状況で生活しているのか。さらにまだ可能性の話だが、中にいる人は何らかのきっかけで、現実世界で肉体が死亡することになる。その理由を突き止めないと」

ぐつと拳を握つて力説する直弘だが、部下からは白い眼を向けられた。

「つて、麗華先輩のレポートに書いてあつたんですね」

「人の言つたことを自分の意見みたいに偉そうに語るのはアホみたいだぜ」

「・・・・・」

「先輩サイテー！男としてサイテー！見損なつた・・・わけでもないか。もともとの評価が最底辺なんだから」

三者三様ならぬ囚者四様の口撃に、あつさり撃沈する直弘。傍から見ても、やはり情けなかつた。

「ど、とにかくだ！まずは王令に会いに行く！警察？知らん！監視システムにハッキング・看守には賄賂だ！」

冷汗を垂らしながら、拳で机をドンと叩く。

そう、うちの上司が、学生にやるみたいにチーム分けの発表時間がごとに時間かかるから、先に警察に身柄をかつさらわれてしまつた。

と、直弘は思いこんでいる。

「彼らはまだ任意同行の段階ですし、いまどきの刑務所に看守はいませんよ？それに監視システムにハッキングするのは犯罪です。警察相手に犯罪仕掛ける気ですか、少佐は？」

「うつ・・・」

全ての意見を合理的に否定され、ぐうの音も出ない直弘。
そんな友人の取りそうな行動をキチンと把握している静也は何も言わなかつたし、さつきはともかく基本面目な秀吉も特に触れない。

が、残念なことにそんなスキルがないうえ、お調子者な人が一人。

「やーい、仙崎がまたやりこめられてやんの～つていつたあああー！」

そう、残り一人の葵。

彼女は一応、一応一年分年上。だが、天真爛漫・・・じゃない。天「然」爛漫な性格が災いしてか、男性にはもてるが、全然昇進させてもらえていない。

で、階級としてはまだ少尉にもかかわらず、よく先崎をからかっては殴られている。

「女性に手を上げるなんてサイテー！」

「うるせえ、男女平等だ」

ペッと唾を吐き捨てでもしそうなほど、不機嫌な様子をかくそうともしない直弘。

それでも、男女平等と言いつつ、しっかりと手加減はして、軽く頭をはたくだけだった。

何度も同じやり取りを繰り返すうち、そう悟った葵は、普段は

「これで引き下がるのだが、今日は違つた。

「うわっ！セクハラだ、仙崎い！」

「・・・むかついた。お前、今後三年間は給料五割引きな。俺に決定権がある限りだが」

「それはあんまり仕打ちじゃないですか、先輩？」

本氣で値下げしようとしている直弘を見かねたのか、葵が哀れになつてきたのか、救いの手が秀吉から差しのべられた。

「ちっ、なら今月だけにしてやるよ」

「「「結局やるんですか（ンだな）（の）！？」」

「しょうがないな、この事件が今月中に解決するか、上神が活躍すれば考えなおすかどうか検討する気分にはなるかもしねないと書いておく」

これ以上何も言わんぞ、とばかりに、腕を組んで三人をぎろりと睨みつける。

「・・・少佐、それはあまりにも大人げなすぎかと」

「いいんだ！部下の指導に必要なのは、鞭と罰と少量の飴つていうしな！」

「言いません」

直弘の放った冗談に微塵も顔を動かさず、即座に冷たく返した後、くるりとパソコンに向き直つて、カタカタとキーを、神速で打ち始める。

「・・・興が削がれたな。どうでもいい話はここまでだ。俺は王伶に会つてくる。葵！ヘッドギアと『ゴグドラシア・オンライン』の、

事件発生前と発生後の物を手に入れる。麗華と静也は好きなように動いてくれてかまわない。一応忠告しておくが、捜査に関係ないことはするなよ。秀吉は静也から指示をもらつて、では行動開始！

「分かりました」

「はい」

「合意承知、つてな」

「ちょっとー何で私だけそんな厳しい扱いなのよー」

麗華と秀吉は素直に敬礼を返し、静也はもつすでにスーツを着終えていた。

で、案の定囁みついたのは葵。

「麗華は多分俺より優秀だし、静也に閑しちゃ同年齢で同期、しかも同じ階級だしな。それに行動力も十分だから十分に任せられる。で、パソコンいじりとかじゃないやり方で動く、だろうから、一人じや厳しいだろ。で、葵か秀吉、どっちをつけるかだが、これはもう仕事の相性の問題だ。秀吉は状況把握とか弁舌とか武術が得意。で葵はいかにも、ゴリ押しとか延々と食いさがつたりするのに必要な精神力を持つてる上に機械の扱いも上手いしな。ハードとソフトの回収兼調査に適性があるのはどっちだと思つ？」

長々と相手の反論を許さない、とばかりに捲し立てられでは、さすがの葵も頷くしかなかつた。

メンバーの特技としては、麗華がパソコン操作を含む、デスクワークが完璧、静也が武術とかの肉体労働+頭脳戦、秀吉は主に交渉とパソコン以外の機械操作（銃器含む）、担当。葵は元科捜研にいたためか、長時間粘るだけの精神力や解析調査に長けている。

直弘に関しては、普段からあまり必死にやつてる様子も見られない、仕事もよくさぼるくせに、やるべき事は麗華以外の誰よりも

も早く終わらせられる。そして柔道が苦手で剣道が超得意、と。

「「じゃ、行つてくる」」

「俺は一人でいい。太閤はここで麗華の補佐をしておけ。で、葵からベッドギアが届き次第、その仕組みを詳しく調査。いいな？」「ぜーつたいてに給料減らすなんて許さない！頑張つて活躍してやる！」

子供っぽい葵に苦笑しながら、直弘と静也はそろつて「その他専用部屋を後にした。

Act 2 捜査開始（後書き）

着々とお気に入り登録してくれる人が増えてきていてうれしい限りです。

厚かましいようですが、感想や苦情等ありましたら、報告宜しくお願いします。

Act 3 法定速度

部屋を出た直弘は、軽くコキコキと首を鳴らすと、まず何より先に、自衛隊基地の駐車場に停めてある愛車、日産のGT-R Sp e c E X のもとへ向かった。

高い買い物だったが、走りやすいうえに見た目が好みだから重宝している。

なかなかに広い基地だけに、駐車場まで行くのに十分はかかってしまった。

一刻も早いいかないど、とはやる気持ちを抑え、自分の愛車に駆け寄つた。

手先が震えてなかなかキーが差し込めなくて、思わず舌打ちをしてしまう。

左手で右手の手首を抑えてよつやく中に入れた。

「よし、ちょっと飛ばしますか！」

壬伶は今、任意同行中だからあまり急いでも意味がない。さしあたつては、『電腦の処理者』の回収が一番の急務だらう。壬伶が削除していない限り、『電腦の処理者』にはVRSに関するすべてのデータが残されているはず。それにあいつの妻とも面識があるから、強制的に押収しなくとも、穩便に借りられる可能性もある。

シユルルツとシートベルトを引き出し、しつかりと装着する。運転の荒い直弘にとって、シートベルトは命綱にも等しい。

「俺の辞書には法定速度なんて文字は載つてないからなあ。非常事

態なことだし、全速力で走らせてやるとするか。確か壬令の家はこれからさつと120キロほど北に行つたところにあつたけな……」

何気に物騒なことを漏らしながら「ヤツ」と唇を釣り上げる。

同時に、アクセルを思いっきり踏み込み加速する。

それでも悲鳴も上げないし、環境にと燃費に悪いブロロロロオ・・・・という音もしないエンジンはほめてやるべきだろ？

「ま、そんな程度の短距離、助走にもなんねえな！」

一言、威勢よく啖くと、駐車場から抜ける。

と、同時に法定速度を軽く振りきつた速度で飛び出した。

白い高級車にぶつけかけたが、見事なドライビングテクニックで車体を傾けながらかわした直弘は、そのまま元通りに車線に入つて加速する。

「あぶねえなこの野郎！警察訴えるぞこり！」

「はー違法プレート使つてる上に、無断で自衛隊基地の写真撮つてたくせに言えるもんなら言つて見やがれってんだあああああああああつ！」

走り去りながらの大暴露に、白高級車の運転手は怒りと周りの視線に晒された周知で顔を真つ赤にしながら、ぎりぎりと歯ぎしりをした。

もちろん、彼程度の動体視力では直弘の車体のナンバーまでは見極められなかつたのも、さらにそれに拍車をかけていた。

その肩に、ポンッと手が置かれて、慌てて振り向いた彼の後ろには、110通報を受けて近くの交番から駆け付けたらしき警察官と、

通報したのであらう自衛隊員が男を睨みつけていた。

「で、カメラ、貸して見せてくれないかな？」

この時の警察官の笑顔ほど怖い笑顔は、見たことがなかつたと牢の中でのその男が語つていたがそれはまた別の話。

「お、捕まつたみたいだな、あいつ。だつせー！」

走り去つていくパトカーの音に、彼が逮捕されたことを知つた直弘は、社内ではつはつはと大爆笑する。

が、いつまでも消えないパトカーの音に不審を持つて振り向くと、交通機動隊の白バイと覆面パトカーだった車が、パトランプをつけながら追つてきていた。

「げええええっ！」

慌ててハンドルを切りながら加速したが、連絡を受け前からやつてきた普通のパトカーに道をふさがれ、あつさりお縄となつた。

「で？何が目的であんな無茶みたいなそうこいつやらかしたんだ？ああ？」

「・・・・ホントにすみません。ちょっと自衛隊の急な任務で

「その任務の内容は！？誰も怪我人も出さない見事なドライビングテクニックだつたから、それさえ話してくれれば執行猶予になるだろうが！？」

「自衛隊にも守秘義務があるって言つてるでしょ！言えるのはそれが守秘義務にかかるような、超最高機密ということだけだ！」

見た目が猿みたいな刑事と、かれこれ三十分はこんな感じの取り調べが続いている。

薄暗い部屋に閉じ込められた直弘は、「こいつ一人だけならボコして逃走できるよな・・・」などと物騒なことを考え始めたが、辺りにもう一人、有能そうなメガネの刑事が張り込んでいたため、逃走は不可能だとあきらめている。

「いい加減げろっちまえって言つてんだ、このバカ野郎！」
と、ついに猿刑事がこぶしを振り上げ、直弘の頬を殴り飛ばそうとする。

が、気付いたら地面に組み伏せられていたのは猿刑事の方だった。
柔道の要領で、拳を余裕でかわすと、ガラ空きになつた腕をつかんで投げ飛ばしたのである。

「誰がわざわざあんな遅い拳に殴られてなんかやるか、出直してこい！」

偉そつに腰に両手をあてて威張つているが、立派に公務執行妨害である。

現に、もう一人の刑事はすでに拳銃を抜いて構えている。

それは、銃器を扱つてゐるだけに、直弘には許せないことだった。

ダッと走り出し、一気に距離を詰め、足で拳銃を持った手を蹴りあげる。

弾き飛ばされた拳銃が、綺麗な弧を描いて監視カメラのレンズを割つた。

「そう気安く人に銃口向けてんじゃねえ！撃つ時は心の中で、撃つ正当な理由を十回復唱し、上からの指示があつた時だけにしろ！ボケが！貴様ごときが銃を握るのは億年早いわ！」

「ぐ・・・はつ・・・・おまえ・・・公務執行妨害・・・・・」
「知るかバカ。正当防衛に近いんじゃないか？殴りかかってきたのはあの猿顔だし、撃とうとしてきたのはお前だ。警官だからって何やってもいいわけじやないぞ！？それに、今は俺も政府直々の『公務』中だ。で、自衛隊員の緊急任務中だから、拳銃も携帯していて、危険があつたら使つてもいいことになつている・・・意味は分かるな？」

最後に、訓練で培つた飛びきり鋭いまなざしに最大限の気迫を込めて言い放つと、眼鏡の刑事は、言いたかつたことを悟ってくれたらしく、顔を青ざめて壁にぺたんと身体をつけると、ずり刷りと崩れ落ちてしまつたが、それでもまだ惰性で首をガクガクと上下に振つていた。

それを見た直弘は、身体から一気に力を抜くと、纏つていた気迫も一緒に消す。

あきれるほど早く自然体に戻つた彼は、軽く服をはたいてそのまま少し体を伸ばす。

「さて、と。カメラが壊されたのに気付いた警官が来る前に、さつさとトンずらこかせていただきますか。おい其処の眼鏡！俺の自動車がある場所教える！」

ジャキン、と取り出した拳銃の銃口を向けて脅すと、あつさりと
「ふ、普通に駐車場に放置してありますですはー！だからそんなも
のを向けないで！」と話してくれた。

「マイツ、警察官には向いてないのではないか？」と思つたが、拳銃
はしまつてやつた。

「おまえ、警官やめた方がいいんじゃないかな？」

も、辞めさせられるかも、だがな

むつと

地味に怖い事を言いながら、直弘は顔を隠して歩き出した。
ドアにはもともと鍵がかかっていなかつたため、眼鏡の警官を無
力化できればそれで十分だつたようだ。

その後、無事に逃走し終えた竜哉が、法定速度を無視して、後ろ
に交機をつけ従えながら飛ばしていったのは言つまでもない。

ちなみに一人の警官は、揃ってクビを言い渡されたとか。

Act 3 法定速度（後書き）

皆さん、法定速度は守ってくださいね。

何気に直弘、滅茶苦茶重大な犯罪をやつちやつてますが、警察も「VRS」の事故の対応で忙しかったんですね。

そういうわけで、実際にはこんなことはあり得ません。
あくまでこれはフィクションです。良い子は真似しないでね（笑）

Act 4 第六感

警察署を脱走した直弘は、文字通り風のよつたな速さでGT-Rを駆つて、壬令の家へと向かつていた。

すでに秀吉を介して上は説得済みだ。

今回の事件はもみ消してもうえらし。

「俺の辞書には、反省つて文字もねえんだよ」

白痴にもならない」とをほやこして居るが、気にしてはいけないとこいつだらひ。

逃走からおよそ一十分、有り得ないような速さで田的池にたどり着いた直弘は、持つてきていった線香を手に持つて、洋風な豪邸のインターホンを鳴らす。

『何でしじう?』

『すみません、壬令の友人の直弘です。少しお話を伺いたいんです

が

『ああ、直弘さんですね。どうぞ中へ

警戒心バリバリの声音を一転させた、おそらく壬令の奥さんと思われる人の声が遠ざかり、ボタンが押された音がして門がゆっくりと開き始める。

二つものじなので特に何の感慨も覚えずそのまま中に入つていく。

通された客間では、何時も通り美人の奥様がティーカップから紅茶をすすっていた。

人妻に手を出す気はないが、物凄く壬令がつらやましく感じる。

二人分の紅茶を用意して、砂糖を入れくるくるとまわしている女性の姿は、実に絵になっていた。

「いらっしゃい、直弘さん。今日は何の用ですか？やつぱり『ユグドラシア・オンライン』関係の話ですか？」

「ええ。実は私の従弟もあるゲームの世界に閉じ込められていましてね。なんとしても救出してあげたいんです。そのためにはまず、あなた方が持つていらっしゃる『電腦の処理者』を貸していただけないか思いまして」

「私は、そういうことには本当に疎いので・・・。どうぞ、『自由に持つて行ってください。もっとも、壬令が警察から帰ってきたらまた変わるかもしれません。まあどうぞ、紅茶でもいかがですか？其処まで慌てなくても、時間はまだあります』

にこやかな笑顔で、紅茶の入った皿を直弘の方にそっと押す早瀬夫人。

そう言われてはしようがないので、出された紅茶を一口飲む。
これは、直弘の下になかなかにあつていて、思わずおっと声を上げそうになる。

が、すぐに後悔することになった。
奥さんの美しい顔が見にくく歪み、くつくつくと悪役同然の笑みを漏らし始めた。

視界がぐるぐると回り、意識が削られしていくのが分かる。

「お、おい……やはり、睡眠薬……か……」

持つでしきたしたんで言ふがふです

あれには、少し人には見せられないデータが入っていましてね。実を言うと、壬伶にすら話していない実験が終わりかけなんですよ。今はなんとしてもあれを死守しなければ。大丈夫、死にはしません。近くの裏路地にほうり捨てておくことになりますが」

優しげな笑顔などといふものはかなぐり捨て、本性をあらわにした早瀬夫人は、軽い興奮状態で、まだ直弘の意識が残つてゐることには気づかない。

「おれらがやれど・・・」マテの事件の上と下関係があんただろ?」

苦し紛れの予測だが、直弘が口にした途端、早瀬夫人の顔が驚愕に彩られたのははつきりと見て取れた。

四星だつたのだろう。

「な、なんであの睡眠薬入りの紅茶を飲んでまだ起きていられるのですか！」

ですか！」

「なあに、自衛隊では・・・少しばかり、いりいつた物に身体を慣
れさせる」とも・・・してきたのでね。で、お前の目的は・・・な
んだ?」

慣れているとは言つても、その効果を完全に打ち消せるわけでもなく、直弘には瞼がだんだん重みを増していくよに感じ取れた。まるで、春先に窓側の席で退屈な授業を受けている学生よろしく、ときどきしゃべりながらも意識が飛んでいることがあるが、必死で意識をとどめ続ける。

「もちろん、『コトをこの世界に蘇らせる』ことですよー。あの子はまだ、ただの『脳死』状態。脳の電気信号をいじることができれば、あの子を・・・あの子の笑顔をもう一度、見ることができるんです！そのための実験台なら、今たくさんいるじゃないですかー！『コグドラシア・オンライン』の世界へ入り込んでしまった、『脳死』状態のプレイヤーたちがー！」

最早狂っているとしか言ひようがない早瀬夫人。

そうと分かっていても、止めることのできない自分を、直弘はどうしても情けない存在としてどうえていた。

「そこで、貴方はしばらく寝ていなさいっ！」

もう睡眠薬が体中に回つて、動くことすらままならない直弘の脳天に、早瀬夫人の足が振り降りられる。

「がつー！」

自分の頭蓋がたてる鈍い音を聞きながら、直弘は自分の意識がついに手放されるのを感じた。

（ああ・・・ちくしょー、こんなところで寝てる時間なんてないつてのによお）

心の中で呟いても、誰に聞こえる訳でもなく。

そして、その数秒後、思考もままならなくなつて、視界がブラックアウトした。

「…………てください、起きてくださいー少佐ー！」

「ん？…………ああ、麗華か。ちくしょう、今は何時だー？」

目を開けるなり、飛び込んできた麗華の姿に、自分が眠らされていたことを思い出した直弘は、慌てて腕時計を確認する。が、普段から自分が腕時計はつけないタイプの人間であることを失念していたため、手首を見ても何も無い状態に。

「…………カバツ」

何とも言えない白けた空気が漂う中、携帯を開けて、時間を確認する。

【4月9日 PM4:00】

「大分お休みになられたようですが、収穫はー？」

「あ、ああ。今回の事件には、早瀬夫人が一枚噛んでいる。それぐらいしか分かつてないな」

忌々しげに、スーツをはたきながら立ち上がった直弘は、体に異常がないことを確認すると、周りを見回してみる。

意外なことに、すぐにどこかは特定できた。早瀬邸が近くに見える、ビルとビルの間。

「しかし、よくここが見つけられたな、麗華？」

「少佐が持つてこる携帯電話のGPSから位置情報を解析すればす

ぐです、その程度の」と

不審そうに尋ねられても、眉一つ動かさず冷静に返す麗華。

実は自衛隊メンバーの携帯にはGPS機能を妨害するロックが掛けられていて、プライベート用とは使い分けられているので、プライベート用携帯の探知ができない麗華にとっては、そう簡単なことではなかつたのだが、間違えてもそれを表情には出さない。

麗華に言われてポケットを探ると、意外なことに携帯電話はすぐにつつかつた。

普通、人の動きを奪つたら携帯ぐらい持ち去つておくのがセオリーだと思うのだが、その点、まだまだあの夫人は甘い。

「もつとも、電腦の処理者は手に入らなかつたがな。やれやれ。アレがあれば百人力だつたんだが。せつからく警察署から脱走までしてきたかいがなくなつただろうが」

はあ・・・とため息をつく直弘と、「そんなことしたんですねか」と言いたげな冷徹な目線で彼を見る麗華。

「とりあえず、場所を変えましょ。こんなところで寝ていては体が冷えてしまいます」

「そうだな。次にするべきことは・・・」

「従弟の見舞いに行かれでは?色々とついでに調べることもできるかもしれませんし」

実を言つと、それはさつきからずっと考えていたんだが、なかなか気が進まない。

自分でもよく分からぬいが、あそこに行つてはならない、と心の

中で第六感ともいるべきものが告げている。

バカバカしい、ただの一般家庭であるあの家に、いつたい何が起
こるといつか、と自分に問いかけても、不安の正体は分からぬ。

「うーん、他にすることもないしな、行つてみるか。何か分かるか
もしれないしな」

そう、この時点ではまだ甘く見ていた。

この自分の、第六感がもたらしている不安の正体について。

Act 5 見舞い（前書き）

遅くなりました！

最近リアルで色々と試合とか試験前とかバンド組もつぜとか、多忙
だったもので書いている暇がなかつたです。

久しぶりの更新にもかかわらず、分量少ないしこともにも増して駄
文。。。

更新ペースは当分上がらないと思います。申し訳ありません。

またもや法定速度を無視した速度で爆走しようとした直弘を止め、少し体を温めつつ横になつていることを勧めた本人である麗華は、直弘とは対をなす、華麗なドライビングテクニックで持つて、次々と車両を追い抜きながらも、危なげなく高速道路を走つている。

麗華は多分、高速道路にも法定速度があることなんて、全く知らないか、注意すら払つていらないに違ひない。もちろん同乗者もガン寝していて、注意することもないし、万が一起きていよいよ咎めることがはないだろう。

一見、優等生をうに見えて、麗華もなかなかにぶつ飛んだ性格をしている。

「チツ・・・今日は調子が悪いですね。あまりスピードが出せません」

ハンドルを握ると性格が変わる、というのにはこのことが、と初めて麗華の車に乗つた時は直弘も驚いた物の、今ではすっかり慣れてしまつている。

法定速度オーバーになれるつていうのもどうかと思つが。

「目的地まで後五十キロですか。もう少し飛ばした方がよさそうですね！」

いやあ、もう十分ですよっ！と叫ぶような同乗者はいない。

すでに車の速度はメーターを振り切つていて正確には分からぬ。

それでも、さらに踏まれたアクセルのせいで、次第にエンジンの都合上出せる最高速度まで到達する。

さつ あまでは「あぶねえなこの野郎！」とか、「警察に訴えんぞ！」等の野次が飛んでいることもあつたが、今はもうそれもない。度肝を抜かれた他の車の運転手が、「あ、抜かされた」と認識するころには、すでに声が聞こえないところまで走り去つてゐるからである。

約十五分後。

奇跡的に全く事故を起さず、直弘は従弟の家まで到着することができた。

つまり計算上は平均時速200キロといつ巴カげた速度で走つていたことになる。

「ん？ああ、もつ着いたのか。相変わらず運転の腕は確かだな、麗華」

「少佐に教えていただきましたからね。そつそつ簡単には衰えませんよ」

首を「キコキと鳴らす直弘と、過去を振り返るような眼に怒りを込める麗華。

おそらく、直弘は過去に、とんでもなく厳しい方法で運転を麗華に仕込んだらしい。

・・・・・何をどうしたらあんな爆走ドライバーができるのか。

そもそもそれ以前に、通常の運転を習つて免許も取つたのに、な

ゼ わ ゼ わ ゼ あ ん な 危 な い 運 転 の 指 導 を 受 け た の か ． ． ． そ れ は 、 永 遠 の 謎 で あ る 。

「 さあ て 、 あ の ト ラ ブ ル 巻 き 込 ま れ 体 質 な 竜 哉 の 寝 頭 で も 押 み 行 く か 」

「 ど こ ま も 捏 ぐ れ た 言 い 方 し か で き な ん で す ね 、 少 佐 は 」

グ サ ッ と 心 に 突 き 刺 さ る よ う な セ リ フ を さ ら じ と 言 わ れ た 直 弘 は 、 胸 を 抑 え る よ う な ポ ー ズ のま ま 、 達 も の 家 の ド ア ベル を 鳴 ら し た 。

「 あ ー 、 すみませ ん 、 竜 哉 の 徒 弟 の 仙 崎 直 弘 で す 。 竜 哉 の 見 舞 い に 来 ま し た 」

「 そ れ で は 、 私 は 近 く で 待 機 し て い ま す 」

氣 を 利 か せ た 麗 華 が 引 き 返 し て い つ た 。

ま や に 、 直 弘 が 止 め る 間 も な い 早 業 だ つ た 。

「 い や 、 別 に いい ん ジ ゃ な い か 　 つ て も つ い な い し 、 あ い つ ど ん だ け 行 動 早 い ん だ よ 」

は あ ． ． ． と た め 息 を つ い た 直 弘 、 この 後 に 待 ち つ け る 展 開 が だ い たい 想 像 で き て い る の で 自 然 に そ の た め 息 は 深 い 深 い も の に な る 。

「 つ た く 、 氣 を 利 く の か 危 險 に 敏 感 な の か 、 ど う す と も 断 定 で き な い 奴 だ な 、 ホ ン ト 」

諦 め た よ つ に ぼ そ つ と 呟 い た 同 時 に 、 家 の ド ア が 開 く ． ． ． わ け も な く 。

「 ど う い う セ イ で しょ う か ？ 」

ドタバタといつ足音が鳴ったかと思つと、インター ホンで返事があつた。

「ああ、おばさん。直弘だよ。入れて?」

「あー、直弘ちゃんね。どうぞどうぞ」

音もなく扉が開けられ、「ささ、何も出せないけど入つて入つて」と密間に通された。

そして、若干既視感のある、紅茶と奥様の組み合わせが、一一〇でも出迎えてくれた。

一一〇までは、いたつて普通なのだが、

「まつたく・・・いつまでたつても、直弘ちゃんは一人身なのねえ・・・。たまには彼女の一人や一人ぐらい連れてきてくれればいいのに」

第一声がこれというのは、あまり普通ではないと思つ。

「いやあ、なかなかそういうことは無縁の職場だからな。それに二人も連れてきたらそれはそれでおかしいし」

最早おなじみとなつたこのやり取りだが、回を重ねるごとに、だんだんおばさんのため息が深くなつていく気がする。

「それで?要件はやつぱり・・・竜哉のこと?」

急に真剣な顔つきになつた竜哉母・・・仙崎咲哉は、单刀直入に

せんざきさくわくや

切り出した。

「そうだな。今は他の被害者と同様に、昏睡状態にあるみたいだが、幸い、命は落としていないようだな。個人的な見解だが、多分竜哉たちは、ゲームの中の世界に、何者かによって閉じ込められたんだと思っている・・・というより、自衛隊ではもうその方針だ」

「それで。見舞いついでに情報収集つてわけね。どうぞ、会つて行く?」

「お願ひします」

案内された竜哉の部屋のドアを開けると、綺麗にベッドに横たわっている、彼の姿があった。

だが、もちろんただ寝ているだけではない。

実質、見えない敵に命綱を握られているような状態だ。

「竜哉君もやはり、午後八時ぐらいにはこの部屋でゲームを始めていたんですね」

しゃべりながら直弘は、持つてきていた工具箱からコードと工具を取り出して、達也のヘッドギアに向やら細工を始めた。

「何をしてるの? 危ないことじゃないでしょ? うね」

「もちろん。ただ、今ゲームのプログラムはどのようになっているのか、それを覗かせてもらうだけだから」

簡単に言うと、パソコンにつないでハッキングを行う、といったところか。

接続完了、とUSBコネクターをノートパソコンにつないでPCを起動する。

「お宝持見つと。たあて。何をじつ書き変えへだせつたんじょ
うねえ？」

着々と事が進んでいた、まだこの時。
直弘の顔には余裕の笑みが浮かんでいた。

Last Act ハッカーの正体

（ネットワークに接続、バグの数、584970。こいつはおそらく、今意識不明の人間の数か、すでに死亡した人間も合わせた総数。つまり、仮想空間から戻つてこれなくなつたつていうのは間違いないようだな）

手慣れた様子でパソコンを扱う直弘。

高速でスクロールされる文字列を読みふけつているその顔は、彼にしては珍しくとても真剣なものだった。

（誰かが、ネットワークにハッキングして、脳から身体へと送る電気信号の送受信にまつわるプログラムを書き換え、「ヘッドギア」からネットワークに送っている電気信号が、元通り「自分の肉体」に送られることを阻止してゐるのか。相当な腕を持ったハッカーの仕業だな。ウイルスと同じ要領で、バグを散布したのかもしれないが、それよりは一回、ネットワークの中心に近い、当時に送られてきているデータすべてをハックした、と考えた方が妥当だろう。厳重なセキュリティもあつただろうし……）

ここまで思考が及んだ時、ピーッ、ピーッといふ電子音が、直弘愛用のパソコンから鳴り響いた。

それは、何者からハッキングを受けていることを示す音。

タイミングから考えても、真犯人かその関係者の仕業と見て間違いないだろう。

「はっ、おもしれえ。返り討ちにしてやるよー。」

「ヤツと口角を釣り上げた直弘は、携帯電話から自分の部下全員に指示を飛ばす。

『各自、今やっている作業を中断して、よく聞いてくれ。今、俺のパソコンが今回の犯人の関係者と思しき者からハッキングを受けている。パソコンが今扱える奴は、逆ハックを手伝ってくれ、犯人の素性を洗いだす!』

「「了解!」」

「悪いな、今こっちじゃ手が話せねえんだよ」

「ちょ、交渉中に電話かけてこないで下さいよ! あたしは今手伝えません!」

麗華と秀吉の手が借りられるようだが、はっきり言って秀吉のハッキングの腕は、そちらへんのちょっとパソコンの扱いに詳しい高校生の方が上かもしねえ。

でもまあ、陽動ぐらいには使えるだろう。

「頼むぞ、麗華、秀吉。他の一人は引き続き仕事を頼む・・・さて、久しぶりに楽しい勝負になりそうだな」

ハッキング用の「マウンドを開き、猛スピードでキーボードをたたき始める直弘。

その速度は、麗華に勝るとも劣らない。

(セキュリティが第三レベルまで突破されてる。この短間にしちゃあ上出来じゃないか。まずは敵のパソコンに侵入させてもらいますか)

素人目には何のことか全くわからない文字列が、二つのウインド

ウで並行して流れていく。

敵のハッカーが直弘のセキュリティを突破すると同時に、新しい上に仕様の違うセキュリティを開発し、同時作業で相手のセキュリティを破っていく。

(そもそも、終いにさせてもらいますか)

最後の仕上げ、とばかりに、相手のパソコンのハッキングシステムを書き換え、使えないようにつぶすと、強制終了しようと/orする。

その時、直弘のパソコンから、先ほどよりも耳障りな、電子音が響いた。

「なー? もう第十一セキュリティまで破られた?」

先ほど、完全に追い出したと思ったたら、僅か数秒の間に全十五のセキュリティ中、十一枚目までが破られていた。

到底、人間業とは思えないほどのスピード。

しかも、それと同時に、直弘が破壊したセキュリティが全て元通りに復元されている。

「うそだろ・・・」

呆然とする直弘の前で、ついに十四のセキュリティが破られた。

最後の警戒音が響き、我に帰った直弘は、慌ててパソコンに含つた重要なデータを削除する。

そして、今回の事件にかかるデータは、麗華のパソコンと、自分の携帯に送る。

それが完了すると同時に、直弘のパソコンが異様な熱を発し、画面が真っ暗になる。

回線が焼き切れたのか、黙々と煙まで立ち上っている始末だ。もう使えないのは見るまでもない。

パタン、と閉じて、わきに抱える。

「やられたか……」

今までハッキングでは負けたことがなかつただけに、今回の完敗は身にしみた。

ゆつたりとした動作で立ち上ると、「今日はお邪魔しました、また来るかもしれませんがよろしくお願ひします」とだけ言って、ふらふらとした足取りで外に出た。

「ちつ、新しいパソコン、経費で落ちるかねえ」

外に出る頃には、強靭な精神力で持つて気分を切り替え、今後の対策を練っていた。

(ハッキングに関しては、多分俺と麗華が一人がかりで挑んでも勝ち目がなさそうだな。複数人でやっているのか、それとも……・)

漠然と、今回のハッキングの犯人が誰か、つかめたような気がする直弘だった。

だがこの時、彼は気が付いていなかった。

近くの電光掲示板を流れる、『意識不明の「ユグドラシア・オン

「ライン」のプレイヤーたちが、次々と命を落としている』ところ
ユース[。]

· · · to be continue

last Act ハッカーの正体（後書き）

えー、時間がなくてぐだぐだ感がさらに増した気がします。

次からは、竜哉サイドに視点を移します。このゲームの世界で換算すると約4日間の間の話は書けませんが、その後から始まります。

さて、直弘を襲ったハッカーの正体は誰なのか。

もうお分かりの方もいらっしゃると思いますが（といふか大半の方がお分かりですよね）それはしばらく先の話に。

では、次回もまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2185s/>

FANTASY ESCAPER ~幻想の脱出者~

2011年6月15日14時38分発行